
家庭教師ヒットマンREBORN! もう一つのリングとファミリー

ホッキョクグマ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

家庭教師ヒットマンREBORN！ もう一つのリングとファミリー

【Nコード】

N3605W

【作者名】

ホッキョクグマ

【あらすじ】

ヴァリアーとのリング争奪戦が終わり、沢田綱吉とその守護者達は見事ボンゴレ10代目として決定した。なにもかも平穩に戻ったと思った矢先、ツナは1人の男に出会う。彼もまたリング保持者だったが……

今日も補習が終わり1人帰宅だ。獄寺君は用事があるからって言うて先に帰って、山本君は部活の野球でいない。リボーンは相変わらず、どっかにでかけている。こういう時に限って痛い目に合う・・・。
ツナの予想は的中した。

「よお、誰かと思えば並中のダメツナじゃねえか」

「おつ、ホントだ・・・。ダメツナ、金持ってねえか？」

「やばいよ・・・。制服のバッチには並盛高等学校って書いてある・・・。並中の先輩じゃないか。どうしよう・・・。このままじゃ、ボコボコにされる・・・。」

「あ・・・、あの。今、お金持ってないんですけど・・・。」

「ああ！舐めた口利いてんじゃねえぞ！おら！」

「ああー！や・・・、やめてくださいー！い！」

ボカツ、ドカツ、ドシャ、ウヘツ・・・

「いたい！いたい！」

「つたく、XANXASを倒した程の男がたかが高校生にボコボコにされるとは・・・。情けない・・・。しょうがない。ここは助っ人として助けてやるか・・・。」

「おい！そのデカイ馬鹿ども！弱い者いじめはいけな・・・。」

「なんだ。お前。ダメツナの仲間か？」

「まあ、そんなとこだ・・・。」

「なら、お前もダメツナと一緒にしてやる！」

「おうおう・・・。血気盛んなこと。だけど、焦った奴程負けるんだよね・・・。」

「おらっ！」

ボカツ、ドカツ・・・

「まっ、ざつとこんなもんか？」

それにしても弱すぎないか？この高校生……。だけど、ガキから金とるには十分な容姿だこと。

「大丈夫か？ボンゴレ10代目！」

ここはいっちょ、単刀直入に言ってみるか。

「そんな……。ボンゴレってなんですか？僕には……」

「10代目ーーーーー！」

「ほら、お仲間のお出ませ」

「獄寺君！」

その声はだんだん近くなる。顔がはつきり見えた瞬間、獄寺は血相を変えた。あいつはツナになんかあるとすぐに爆弾をくりだす。

「獄寺君！」

「いきなり、爆弾かよ……。さすがスモークキングボムだぜ……」

俺は投げられたボムをすばやくかわした。そのボムは一直線にツナに向かう。

「ええーーーーー！」

ボカーーーーン!!!!!!!!!!!!!!

「あいたたた……」

「大丈夫ですか？10代目！すみません！俺がボムを投げたから……」

獄寺隼人、こいつはホントにツナが神みたいな感じに接しているし……。よく、こんな奴を仲間に入れたな。だが、戦闘だけなら獄寺も強い。

「初めましてだな。沢田綱吉君……」

この人は……。？制服は並中でもなければ黒曜中でもない……。どこなんだろう？

「10代目！下がってください。ここは俺が・・・」

「待って、獄寺君！その人はさつき不良に絡まれてた俺を助けてくれたんだよ・・・」

「そうなんですか？10代目・・・」

「ああ、名乗るのが遅れたな。俺は坂上中2年福瀬希生だ。つていうよりもバンビーズファミリー、12代目の守護者といっておこうかな・・・」

「バンビーズ・・・。聞いたこと無いぞ！おい！嘘つくな！」

この人もマフィアなのー！どうしよう・・・。

「なら、証拠を見せてやる」

「証拠？」

「ああ、リングだ。俺の属性は雷だ。よろしくな」

しかもリング持つてる！雷のリング。ランボと同じだ・・・。

「ちやおつす！」

「リポーン！」

やっと来てくれた。助かったー！

「お前がああ、呪われた赤ん坊か？」

「そつだぞ」

「なら話しは早い！俺をボンゴレの仲間にしてくれないか？もちろん、俺らのファミリーも一緒に・・・」

「いいぞ。しかし俺は厳しいぞ！」

「問題ないさ！」

リポーンあっさり認めてるし・・・。しょうがない。リポーンが言ったら逆らえないから・・・。俺と獄寺君、リポーンと福瀬君を連れて家に帰った。部屋に入ってすわるなり、すぐに希生君に獄寺君が質問を始めた・・・。

「お前！バンビーズってどこのファミリーだ！そんなファミリー聞いたことないぜ！」

「言つとくが、俺達バンビーザは1代目から外部ファミリーとの接触は一度もしていない。ごく一部のファミリーだけがしるファミリーさ……。12代目の守護者達はみんな坂上中だぜ……」

「そんな事で通用するかよ！」

「でも、この雷のリングが動かぬ証拠だ……」

「それだが！」

「獄寺やめろ！」

「リボン！」

「俺が知る限りバンビーザファミリーは聞いたことがねえ。でもリングがあるならそれはファミリーがあると思えねえ。この件は俺が詳しく調べてみる。ツナ。今はこいつ達のファミリーも貴重な戦力だ」

「わかってるよ……」

ボンゴレの公式記録にも載っていないバンビーザファミリー。これは調べがいがありそうだな。

つたく、獄寺隼人は血気が盛んすぎる。俺の話なんて聞いちゃくれねえ……。沢田綱吉はいいが獄寺が気に入らない。しかし、ボンゴレ10代目の守護者達はみんな猛者ばかりだからな。

スクアールを倒した山本武。世界に三人としない術士、六道骸、そしてクローム髑髏。ルッスーリアを倒したツナの惚れる京子の兄の笹川了平。ランボはどうだが分からないが……。

「おい。希生どうした？浮かない顔してるぜ？」

「ああ、なんでもない。それより翔太。山本武も偵察はどうだった？」

「まあまあだな……。一見強そうには見えないな……」

「俺は危つく龍属性のリングがバレるとこだったぜ。でもポケットに入ってた雷のリングがあったから助かったけどな……」

「はははは……。獄寺の奴のせいだろう？」

「ああ、そうだけ」

この動物7属性、クレイチャーリングをボンゴレに教えるのはまた後だ。その時までじっと待つか。時期が来るまで……。

標的 1

出会い・・・（後書き）

REBORN！第1章の1話。書き終わりました。今回の小説では数人の視点から書きたいと思っています。1話は福瀬、ツナ、リボーンの3人の視点で書いて見ました。文字数は少ないですが第2章に入ったら増える予定です。1章目はリボーンが10年バズーカに撃たれて未来に行くまでにする予定です。まあ、あと2話もしたら第2章ですが・・・

標的 2

バンビィザファミリー集合とリボーンの失踪

先日、不良に絡まれていた沢田綱吉を助けてから俺はツナの家は何度か足を運んだ。そこでは獄寺も来て面倒な事にもなったがリボーンが沈めてくれた。しかし、その代わりにリボーンの質問は答えるはめになった。

今日もリボーンとツナに呼び出しを受けファミリー全員でツナの家に行った。

「沢田！来たぞー！リボーン、ちゃんとファミリーも連れてきたぜ」

「ああ、助かるぞ。では話しを始めるぞ・・・」

こうしてボンゴレとバンビィザの会談は始まった。

「では、俺から行くぞ。福瀬、自己紹介をしろ・・・」

「おう！俺は福瀬希生。雷属性のリングを持っている。あと霧属性の幻術も使える」

「俺は早崎賢。嵐属性のリングを持っています」

「早崎将だ。両属性のリングを持っている」

「本田海星だぜ。俺は雲属性のリングだ」

「うちは福坂壘。うちも福瀬と同じ雷属性を持っている。福瀬に比べれば全然弱いけどな・・・」

「俺は浅井翔太。属性はないけど格闘戦が得意だ」

「俺は長田敬介だ。俺も両属性だ」

「まあ、これがバンビィザの主力だ・・・。宜しくな。ボンゴレの話は聞いているから、自己紹介はいらない・・・。早速、本題に入りたい」

バンビィザのみんなは本当は大空7属性の炎ではない。もちろん大

空の属性も流れているが、本当は誰も知らない、謎のリングの所有者達だ……。本題に入つてすぐリボンが口を開いた。

「ボンゴレの奴らもしらねえが、お前達バンビーズはどんなファミリーだ？」

「どんなファミリーと言われても困るが、まあお前達と同じく大空の属性を持つもの達だ……」

受け答えるのは全て福瀬希生だ。

「では、なんで大空のリング保持者がいないの？
今度はツナが質問してきた。」

「この12代目は大空の適応者がいないからだ。いるならリングを渡したいのだが……」

「お前達は、どこで生まれたファミリーだ！俺だけじゃなくてリボンさんも知らないファミリーとは……！」

「獄寺、落ち着け……。俺らは日本のファミリーだ。代々日本人の守護者になっている」

「極限に分からんぞ！！結局バンビーズは、このボンゴレに協力するの……か！」

笹川了平は真正正銘の馬鹿だ。希生は確信した。

リボンはさつきから黙りコクっている。ツナは何か質問しようか迷っていた。さつき大空のリングの件の質問をしたがそれっきり質問はしていない。獄寺君やお兄さんは質問してるみたいだけど……。今日は山本君も黙っている。クロームは来てないし、雲雀さんは絶対に来ない。ランボは……。見たくはないがイーピンとジャレている。

「みんなはどんな武器で戦うんだ？」

山本君が口を開いた。

「俺は福瀬家に代々継承されている、龍の爪という6本刀で戦う」

「俺はバットだな。部活も野球だし……」

「おつ、俺と同じだ！」

「山本、言つとくが今のバンビーズファミリーはみんな野球部の所属だ」

「えっ……」

「嘘。みんな山本君みたいに野球できるんだ！俺は何も出来ないし……」

リポーンはこの話しをずっと聞いていた。バンビーズが何者なのか、そしてなぜ大空がないのか……。謎はまだまだたくさんあった。「ここで一つ聞きたいのだが……。福瀬、お前達は絶対にボンゴレに協力するのか？」

「ああ、もちろんだ。裏切る気持ちはさらさら無い。ボンゴレのためなら我らバンビーズは命を懸けて戦うつもりだ……」

「そうか。わかったぞ。じゃあ、解散だ。帰っていいぞ！」

「ちよつと待って下さい、リポーンさん！」

「獄寺も帰れ。ツナと2人だけで話しがしたい」

「わかりました……。それでは失礼します、10代目……」

ボンゴレのメンバーはみんな帰った。

「リポーン、ハーブティー、美味かったぞ。また頼むな……。それじゃあ」

「ああ、わかったぞ」

バンビーズのみんなも帰った。

リポーンの奴、話ってなんだろう？ってあれ？リポーンは？まあ、いいか。

翌日・・・

「ちょっと待ってよ・・・2人とも・・・」

俺は2人の人物を追っていた。

「沢田殿。リボンさん！」

「ボンゴレか？」

「ハア、ハア・・・。何も言わないで・・・。イタリアに帰るなんて・・・」

そうなのだ。俺が追っていたのはバジル君とランチアさんだ。朝、急にいなくなつてびっくりして家を飛び出してきたんだ。

「すいません。急に召集がかかってしまって・・・」

「俺は湿っぽいのが苦手な・・・」

「ランチアさんはどうするんですか？」

「俺は亡くなったファミリーの方の家を回る旅にでかける・・・」

「ランチアさん・・・」

「俺には一生をかけて償うことしかできなので・・・」
ランチアさんは亡くなったファミリーの家を回る旅・・・。骸に憑依されていた時間は記憶にないのに・・・。しかもランチアさんは何も悪くないのに・・・。そう思うとツナは骸に対する怒りが込み上げてきた・・・。

「そうだ、お前にコレをやらう。俺のボスの形見だ。ボンゴレリング程、立派なものじゃないが・・・」

「拙者からは、これを・・・。もしもの時に使ってください・・・」

「ありがとう・・・」

「あ・・・」

ツナは後ろを振り返った。すると、頭がモジャモジャの来てほしくない奴がきた・・・。

「ランボさんもピクニック行くー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！！！」

「こら、待て！」

「では・・・」

「バイブウーリーー！」

バジル君とランチアさんは行ってしまった。

「ところでツナ、バジルに何ももらったんだ？」

「あ……。死ぬ気丸だ！」

「アメ玉！」

「違う！」

「ちようだい……」

なんでこういうチビはすぐに頂戴がくるんだか……。でも絶対にあげちゃだめだし……

「ダメだ、ランボ。食べると死ぬ気になっちゃうんだぞ！」

「それに死ぬほどウザクなるんだぞ……」

「あら、リボーン。いまのコチンときた……」

「それをいうならカチンだろ」

「チンコ！」

「違う」

「暴蛇烈覇！！！！！」

リボーンは形状記憶装置のレオンをランチアさんの蛇鉦球を似せたものをランボに浴びせた。たちまちランボは飛んでいき地面に落ちた。

「ガ……。マ……。ン……。」

「何やってんだよりボーン！」

「堪忍袋の緒が切れた……」

「リボーンのバカ者が！タレマユのクセに！！！」

そうやってランボは10年バズーカを構えた……。やばい。しかし、振り返るとリボーンが地面から石を拾っている。

「星になれ！！！」

そっぴいランボめがけ石を投げた。その石はランボの10年バズーカにあたった。しかし、10年バズーカは発射された。しかもその弾がこつちに向かってきてる……。やばい。あたる！

「ん？やべーな。動けねえ……」

ドガーーーーーーーーーーン!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!

10年バズーカの弾がリボーンに直撃した。ツナは10年後のリボーンにあえることを楽しみにしながら煙が収まるのをまっていた。しかし、そこには誰もいない。その日はすぐに戻ってくるだろうと思い家に帰った。しかし、翌日もリボーンが帰ってこない。獄寺君やハルにもリボーンの搜索をお願いした。ツナはランボのところについて……

「なあランボ、10年バズーカで大人になってくれよ!」

「なに言ってるんのツナ。ランボさんは10年バズーカなんてシ・リ・マ・セ・ン」

「頭からでてるじゃないか……」

ツナはランボの頭からバズーカをとった。照準をランボに向けて……。しかし銃口はツナに向いている。

カチツ……。あ……

ランボは誤ってトリガーを引いてしましツナにバズーカがあたった。

ツナは冥界に落ちた気分になっていた。

気づくと……。暗い……。しかも木の匂い……。ここは？

標的 2

バンピーザファミリー集合とリボーンの失踪（後書き）

今回で第1章は終わります。ようやく10年後の世界での戦いが始まります。

標的3

10年後の世界&10年後の戦い

ここ何処だ？木の匂い……。あつ、開いた……。

「もしかして、ここ10年後？」

そうだ。ランボの10年バズーカに当たったんだ。ってここは何処だろう……。しかも、箱に入ってるし……。てか……

「何で俺、棺桶に……！！！！！！！！！！」

「誰だ！！」

何処からか男の声があった。ツナは恐る恐る近づく足音に耳を澄ました。

「あ……、あなたは……………」

「あ……れ？あの面影……。まさか……」

男はツナに近づくと両膝立ちで……

「10代目！！！！！！！！！！」

やっぱり10年後の獄寺君だ……。すげーデカクなってる……

「スイマセン、スイマセン、スイマセン！！」

「なっ！！」

「スイマセン……………」

10年後の獄寺君はひっきりなしに俺に謝ってくる。ツナは何がなんだかわからずとにかく自分の置かれた立場を獄寺君に話した。

「そうですね……。5分しかない……」

「いいですか10代目。過去に帰ったら今からオレの言う事を必ず実行してください」

「えっ」

「過去に帰ったらまずこの男を消してください……」

そうやって獄寺君は俺に一枚の写真を見せてくれた。

「この時代の写真ですが、あなたとは中1の時に接触しているんです」

「えっ！誰これ……。ていうか消すって……」

「躊躇する必要はありません……。奴さえいなければ百蘭もこれほどには……」

「ビヤク……。ラン……。？」

ていうか……。さつきから何でこんな空気なんだろう？一体、10年後の世界で何が起きてるの！俺にはわからない……

「次の念のためですが……」

「あの……。一つだけ……。すごく気になるんですけど……。何で10年後の俺は棺桶に？」

「それは……」

獄寺君は何かためらっているようだった。それよりも申し訳なさそうな。複雑な顔をしていた。しかし……。目の前で煙が起こった。煙が収まるとそこには、10年前の獄寺君がいた。

「10代目……」

「獄寺君！」

ガーン。おかげで真実を聞きそびれた……。

「あれ？いつもの10代目だ。てっきり10年後に来たかと思いま
したよ……」

「いや……。ここは10年後であつてるよ……獄寺君……」
「なんだ。やっぱりソウスか！てかこれ、棺桶みたいすけど……」
「みたいじゃないんだよ……」

すると獄寺君はズウーンっとなつてしまった。

「あれ……。もう10年後に来て5分たつたと思うんだけど……」

「そついやあ、俺もこつちにきて5分経つた気がします」

「じゃあ、なんで過去に戻らないの……！」

しかし、嘆いたときツナのお腹がなつた。

「とりあえず八つ橋食べましょう。10代目」

とりあえず獄寺君が過去から持ってきた八つ橋を食べた。その間も
2人は落ち着かなかつた。ここは森の中でしんと静まり帰っている。
すると獄寺君は近くにあつたバツクを開けて中身をだした。一度は
やめといた方が良くといったが獄寺君は自分のだから良いといつて
聞かなかつた。

中には手紙やタバコハンカチ、財布とコケにたいなのが生えたボツ
クスが一つ入つていた。獄寺君は1番最初にコケみたいなのが生え
たボツクスをもち、その後、手紙を開いた。でも、手紙の中はなん

か古代文字みたいな暗号だった。

「これはG文字だ！」

「G文字？」

「ゴクデラ文字と言って、俺が中1の時に考えた暗号です」

授業中何やってんだ。この人は——！！ しかし、獄寺君はその暗号を読み始めた。

「え〜と、シュゴシャ・・・ハ・・・シュウ・・・ゴウ・・・」

「

パキッ・・・

後ろから枝の折れる音がして振り向くと、そこには武装をしたひとりの人がたっていた。

「はじめまして」

しかし、その人は何も言わずにマントみたいなモノの中から両手をだしてなにやら武器を構えた。

「さようなら」

「10代目、下がってください！ ここは俺が！ 果てる！！」

「

獄寺君はいつも通りダイナマイトを敵に投げつけた。しかし、そのダイナマイトは全てかわされた。次も間隔を置かずダイナマイトを投げた。しかし、それも全弾、撃ち落とされた。その相手がうった攻撃がツナと獄寺の近くにあたり爆風が起こった。

爆風がおさまると、電磁シールドみたいなものに閉じ込められた獄

寺君がいた。

「やはり、リングを使いこなせないのか……。宝の持ち腐れだな……」

「リングをつかいこなす？」

「俺を恨むな……。死ね」

「10代目、逃げてください！」

でも……。仲間を見捨てるようなことは出来ない……。あー！、もーやるしか……。ツナはバジルからもらった死ぬ気丸を飲んだ。みるみる、体は戦闘モードに変わる。

相手からはさつき構えた武器から攻撃が放たれた。その弾は獄寺の方に向かっている。

しかし、弾は全て近くの木に打ち付けられた。

「10代目!!」

「9mm弾丸をものともしない高密度エネルギー……」

相手はそう呟いた後こう付け加えた。

「待ってたぜ！お前のハイパー死ぬ気モードをな……」

「なぜ、俺たちを狙う……」

「今は非常時だ。手っ取り早くが1番だ……。次には鉛玉とは違う。その炎でもけさせやしない」

相手は武器からエネルギービーム？を撃ちだした。ツナは攻撃をギリギリでかわすが、そのビーム？もツナを追っかける。どうやら追尾型らしい。ツナは炎の膜を張るがあっさり破られ、攻撃をまともにくらった。煙の中からは真っ逆さまにおちるツナがいた。

「休憩なんてやらないぞ。生きたきゃ、生きる！」

また相手からさっきと同じ攻撃が撃ちだされた。その弾は全てツナに直撃した。爆風が起きる。

「リボーンの指導を受けながら、こんなもんか・・・」
「なぜ、リボーンを知っている」

爆風の中からはツナが現れた。

「零地点突破改か・・・」
「なぜ・・・。死ぬ気の炎を使えるんだ？」

ツナは木を思いつきりけり、一直線に相手に向かった。一撃目の攻撃は外したが、二発目の鳩尾パンチは当たった。相手は吹き飛ばされた。しかし、空中で態勢を立て直し近くの木の太い枝に着陸した。相手はマントを投げ捨てた。

「女！！！！」

そうだ。相手は女だったのだ。

「なかなか、見所がありそうだな。俺が全力をだしてもお前の戦闘能力には及ばないだろうな・・・。最も・・・、旧時代的、意味においてな・・・。」

「・・・???」
「それだけでは、この時代、生きていけないぜ！」

女はさっきの武器からまた弾を発射した。しかし、それは弾ではな

かった。ツナの体に近づくとそれはツナの体に巻きついてきた。ムカデのようなものだ。しかし、なんでムカデが炎をまとっている。ムカデを振り払うと炎を目一杯に吹き出す。

「すげえ。10代目！」

「気づけよ。逆効果だ。お前は死ぬ気の炎を自分の意思でだしてるんじゃない。無理やり大気に放出させられているんだ。炎で動く玩具としてな……」

やがてツナは力をなくし、地面におちた。獄寺も近づこうとしたがさっきの電磁シールドが展開されていて動けない。女はツナに向けて武器を構えた。

「こんな初歩てきな罠にかかるとは……。情けないなボンゴレ10代目」

「待ちやがれ！」

「及第点だ。殺すのは見送ってやる」

「！！！！」

「俺の名はラル・ミルチ……」

「オレの名はラル・ミルチ」

女が名乗ると獄寺を覆っていた電磁シールドは解かれた。獄寺はツナに駆け寄り怪我の確認をする。

「派手に暴れすぎたな……。このままでは奴らに見つかるのも時間の問題だ。これをリングに巻きつける……」

ツナと獄寺の前に落ちたのは変なチェーンだ。一見、おしゃれ用のチェーンと変わりはない気がする。変わったところといえば、チェーンの大きさだけだ。これ巻いてどうなる。

「マモンチェーンと言って指輪の力を封印する鎖だ」

「おい！ちよつと待て！！ てめーいきなり襲っておいてわけわからねー！こと言っつてんじゃねえ！それに何故ボンゴレリングの事を！一体何者だ！」

「急いでここを立ち去る。ハダシじゃ無理だ。コレをはけ」

無視—————！！しかもサンダル！！でも、この人敵じゃないかも……

「ちよつと待ってください！オレ達、過去からきたんです。さつきから驚くことばかりで……」

「口ごたえするな」

「ふざけんな！なんで、てめーの言う事を！」

「ついてこれない奴は死んでくれた方が助かる。俺には時間がない

んだ……」

ラルは訴えかける目で2人に行ってきた。

「知りたい事は目的地についてから調べるんだな」

「目的地!？」

「お前達のアジトだ」

「オレ達のアジト!! まさかこの時代の……」

「てことはリボンもそこにいるんですか？」

「知るか……。コロネロ、バイパー、スカル……。最強の赤ん坊アルコバレーノは達は皆死んでいった。もちろん、リボンもない……」

ツナは期待を抱くがすぐに消された。リボンはいない。しかもコロネロまでも!なんで!あんなに強かったのにみんな……

とにかく女の後に付いていき、森の中を走った。ラルはなにも喋らずひたすら走っていく。向かっている先はこの世界のツナ達のアジト……だろう……。やがて川にたどりつき水を飲んだ。

「おい!どんだけ走らせんだよ!！」

「今日はここで野宿だ」

「な……」

「野宿……!!!!!!!!」

「闇で目が効かないおまえたちと動くのは危険すぎる。まったくいい迷惑だぜ」

「てめー、調子に乗ってんじゃねーぞ!」

「それはオレのセリフだ」

ラルは銃を向けてきた。そうしたら抵抗は出来ない。まあ、というわけで諦めた。しかし、次のラルの一言でまた驚いた。飯はラルの分しかない。だから、お前達は自分で調達しろなど……。

渋々、獄寺と食材探しに出かけた。途中、変なものを見てしまった。ツナは変なきのこを食べたりといういろいろな事があったが、結局はラルに魚を貰って食べた。焚き火を囲み3人で魚を食べていた。

「お前達は写真でしか見たことがない。だが10年バズーカの存在のおかげで何者が識別できた。時間が出来たんだ。知ってることを教えてやる」

「本当ですか!？」

「オレはボンゴレ門外顧問の組織に所属している」

「門外顧問って父さんのこと!」

父さん!! 門外顧問がなんで俺らを襲ったんだろう……

「じゃあ、お前味方なのか!」

「ああ……。ボンゴレ全体に緊急事態が発生したため10代目ファミリーの状況を調べる命を受けやってきた……」

「緊急事態?」

「ボンゴレ本部は2日前に壊滅状態に陥った……」

えっ……。ツナの表情が強張る。ボンゴレが壊滅ってなんで?

「今のところ本部の生存者は0名。9代目も行方不明。急遽、門外顧問チームが向かったがすでに消息は途絶えている……」

「だまされないでください10代目! あのボンゴレが壊滅するなんてありえませんか!」

「10年前ならな……。だが、この時代にはそれを出来るファミリー2つがいる。一つ目はミルフィオーレファミリー、ボスの名を

百蘭と言う。もう一つのファミリーがバンビーズファミリー。こいつらはボンゴレと数年前から同盟ファミリーになっている。ボスの名を福瀬希生。しかし、バンビーズも消息が途絶えている……」

バンビーズって福瀬君も！！ボンゴレとかかわりを持っているファミリーが狙われているの！？

「百蘭！10年後の獄寺君が言っていた名前だ！」

「……………！！！」

「こ……この人の言っていることは本当かも……。この時代のリボーン的事も、そんなあ……。そ……それにオレが棺桶にいたこともつじつまがあう……」

「この時代戦局を左右するのはリングとボックスだ。奴らはリングとボックスを略奪することにより急遽力を付けてきた。ボンゴレを狙ったのもそうだ……」

「ボンゴレリングが狙いだっつてのわか！？」

それからラルはリングの目的を話してくれた。

「まずい！！逃げる！！！」

ラルの一言でツナと獄寺は服を着て近くの岩陰に隠れた。岩陰から顔をだして相手を見た。

「ゴーラ・モスカ！」

「ゴーラの2世代後の機体だ……。ストウラオ・モスカ。軍はボンゴレ以外にも機密を売っていたんだ……」

ストウラオ・モスカ……。それはボンゴレリング争奪戦時にヴァリアー側の雲の守護者として登場した。しかし、モスカの動力源に

は9代目が使われていた。

ストウラオ・モスカはツナ達の隠れている岩に顔を向けた。

「こつち向いたぜ！」

「みつかりつこない。ストウラオはリングの力を探知するセンサーを内臓しているがマモンチエーンで力が封じられている」

「来たぞ！」

「・・・・・・・・！！・・・・・・・・？」

モスカは岩に進路をとり、進んでくる。止まる気配はない。

「バカな！お前達、ボンゴレリング以外のリングは持っていないな？」

「ああ、さつき見せたので全部だ・・・」

「あつ・・・ランチアさんにもらったリングが・・・」

「そのリングは・・・！！何故話さなかった！3人でも倒せる相手じゃない。全滅だ・・・」

「へっ弱気じゃねーか。自慢のリングは役にたたねーのかよ！！」
「戦いは力だけではない。相性が重要なんだ！」

そう井伊ラルは岩陰から飛び出し銃を構えた。

「アジトまでもう少しという所で・・・」

その時、モスカの後ろで影が動いた。するとモスカの頭部に衝撃波が起こり、モスカが止まった。

「鮫衝撃。こいつで一分はかせげるはずだ」

男の声がした。すると静止したモスカの後ろから人が現れた。

「助っ人とーじょーっ」

「お前まさか……」

「山本……」

登場したのは10年後の山本だった。

「あれ、悪い冗談じゃないよな。門外顧問とこの使者を向かえに来たらおまえ達までって……。ん？でも縮んでねーか？」

「あの……。オレ達10年バズーカで過去から来て……」

「ああ、どーりで。元気そうだなツナ」

山本はモスカを相手にするだけ無駄と言って過去の話 시작했다。リング争奪戦のときの事など……。森の開けたところに来て山本は立ち止まった。

「オレを見失わないようについてこいよ」

そう言つて山本はリングからマモンチェーンをはずし小さい箱を取り出した。リングと箱を合わせた。そうすると箱が空きそこから何かが飛び出した。その飛び出したモノは地面の葉っぱを避けた。

「何だ!？」

「防犯用のカモフラージュだ。よそ見はするなよ」

するといきなり雨が降ってきた。しかも、その雨は強く肌に当たると痛い。

「こっちだ!」

山本の声がし、ツナは少し目を開けた。すると、山本は何かの入り口にいた。ツナ達はそこに向かい中に入った。中は下に続く階段が続いている。そこを降りていくと扉が開きその中にはいった。どうやらこれはエレベーターらしき更に下に下りる。次に扉が開くと目の前には広い空間が広がっていた。ここはボンゴレのアジトだったのだ。

「すげー！！ボンゴレってこんなの作れんの？」

「いいこと教えてやるうか？このアジトはツナが作れせたんだぜ」

「えーーーーー！！！」

「おい！あの装置はなんだ？」

ラルが山本に質問する。正面には奇妙なバリアがあつた。横に模様がある。

「ああ、なんとかって言って物質を遮るバリアだそうだ」

ツナたちはそのバリアをくぐる。しかしラルが通つたあと急にラルが倒れた。

「おまえもか……。」ここは彼女達にとって外界と違つつくりになつていゝんだ。少しすれば目を覚ます」

山本が一つのドアの前で止まり扉を開けた。するろ、正面の椅子にリボーンが座っている。

「ちゃおつす」

「リボーン」

ツナは椅子に座るリボーンに歩み寄つた。しかし……

「だきしめてー」

後ろから声がした。

「こっちよ」

「うげっ」

後ろからキックされた。しかも首元に……。振り返るとそこは変な服を着たりポーンがいた。

「つちふまが後頭部にフィットした」

「な！！なんなんだよ！このふざけた再会は！こっちは死ぬ思いでお前を探してたんだ……。！また、変な格好をして……」

でも……。無事でよかった……。

「しょーがねーだろ？このスーツをきてねーと体調最悪なんだ。外のバリアもオレのために作らせたんだしな」

「というか、ここは何処で今はいつなんだよ！！」

「お前達は10年バズーカに撃たれたはずなのに、この時代は撃たれてから9年と10ヶ月くらいしか経ってないんだ。なんでこんな事になったのかはオレにもさっぱりだ」

「じゃあここは？」

リポーンは山本に言って、山本はスクリーンに外の風景を映し出した。しかし、そこはどこかの住宅街でどこかは分からなかった。しかし、次の画面でやっとわかった。そこには並盛中学校だった。そうなのだ。ここは並盛なのだ。

「過去にもどれない以上、これはお前達の問題だ」

「現在、ボンゴレを拠点が次々に落とされている。もちろんここでもボンゴレ狩りは進行中だ」

「ボンゴレ狩り？」

その後は山本トリボーンが話しを始めた。今の状況、ミルフィオーレの現状など。ツナ達はわけのわからなかったこの時代が少しわかった。

それとトリボーンがボンゴレの守護者を集めることを命令した。

翌日、早くも守護者を集めるミッションを開始した。

「オレはいけねーが、山本が付いている。奴はこの時代の戦いを熟知している」

「なーに微々るこたあないさ。お前達はこの時代のオレ達が失ったすんげー力を持ってんじゃねーか」

「失った・・・」

「すんげー力？」

「・・・お前達は希望と共にこの時代に来てくれたんだ。ボンゴレリングっていう・・・」

それから外に出た。外に出たら、腐りきった建物がたくさんあった。

「6丁目の工場跡地だ。6つある入り口の1つはここに出るんだ」

「おい！ボンゴレリングはどうなったんだよ」

「とりあえず並中行くか」

「こら！話を聞け！」

「ん？」

「ボンゴレリングだ！」

「あーその話な。だいぶ前に砕いて捨てちまったんだ」
「なー捨てた！誰がそんなことを！！！！」
「うちのボスさ……」

山本は普通の会話みたいに言った。

「もしかしてオレ！！！！」

「10代目が！！！！」

「守護者の奴には反対する奴もいたんだけどな……。ツナの奴、譲らなくてな」

「オレ……。そんなこと……」

「ツナがボンゴレリングの破棄を口にするようになったのはマフィア界でリングの重要性が騒がれはじめ……。略奪戦の様相を呈してきたころなんだ。戦いの火種になるくらいなら無い方がいいと思っただんじゃねーか。お前はそういう男だ……。ボンゴレの存在自体に首をかしげていた程だからな。っても今じゃオレ達もリングの力に頼ってるんだがな……」

「そいえば山本、野球は？」

そう言ったとき、正面の建物で爆発が起こった。しかも、その中から声が聞こえる。

「あ、あれは？」

「イーピンにランボ！！」

「誰かを連れているな……」

「京子さん、ハルさん、逃げて！！」

京子ちゃん、ハル？どうして……

しかし、どろどろしてるうちにまた爆発が起こった。

「上だ！」

獄寺がそう言っ上を見ると、人が2人見える。しかも、足から炎を出している。

「リングからマモンチェーンを外せ！」

山本の一言で獄寺とツナはリングからマモンチェーンを外した。

標的 5

バンビーザ登場

「獄寺、ツナ、リングからマモンチェーンを外せ！」

山本の一言でツナと獄寺はリングからマモンチェーンを外す。

.....

「じゃあ、オイラがもらう！手え出すなよ。太猿兄貴」

「しっかりやれよ、野猿」

下では・・・

「うるたえないでランボ！京子さんとハルさんをお願い」

「その体じゃ無理だよ！」

「へっへー、じゃあ行くぜ！」

野猿はリングに炎をともし、ボックスに注入する。ボックスから出てきた黒鎌ダイクサイスを持ち、まず黒鎌から炎を出しそれを下にいる人たち目掛けて放つ。炎は見事に下の人達に当たり爆風が起る。その中に野猿は突っ込む影に斬りかかる。しかし・・・

刀と刀がぶつかるような鈍い音がした後、爆風が止んだ。野猿の黒鎌を男の刀に阻まれていた。

「兄貴！こいつ誰だ？」

「抹殺者リストに載ってたかもしれないが、消えていく人間をいちいち覚えちゃいねーな」
「だよな」

野猿は黒鎌を振るい相手の男に斬りかかる。しかし、全て止められ・

「なんだ！こいつ！？オイラの黒鎌を！！」
「行くぜ・・・」

一言、相手の男が呟いた。するとリングから炎が出て構える。

「時雨蒼燕流 八の型・・・」

「はなれる野猿！！」

「！？」

「篠突く雨！！！！」

相手が刀を振り、野猿の隊員服をすこし切った。野猿はギリギリで回避し、体には傷を受けていない。

「いつつ・・・。あつ・・・あぶねー」

「ボンゴレには2大剣豪がいると聞く・・・。よもやあいつ・・・」

・・・

ツナはランボとイーピンのところに駆けつける。

「みんな、大丈夫！？」

「しっかりしろ！！」

「ボンゴレ、獄寺氏も」

「だから言つたじゃないですか」

煙の中から声が聞こえる。それも聞きなれた声。

「絶対、ツナさん達が助けに来てくれるって」

10年後のハルーーーーー。なんか大人っぽくなってる。

「はひ？なんだかハル、急に背が伸びたみたいですよ！」

中身変わってないし……

しかし、依然山本はブラックスペルとか言う連中と戦っている。

「しゃらくせえ！！よくも兄貴達とおそろいのスーツを破いたな！

ショアツ！！」

相手は炎を纏った鎌を振りおろし、炎を出す。ツナ達が驚く前に山本はボツクスを取り出し、炎を注入する。すると、水のバリアが張られ敵の炎を防ぐ。

「んだとおーーーー」

「水のバリア……！」

「お前達、よく覚えておけ……」

「……！！！」

「リングにはボツクスつてのを開ける力がある」

「そーか！こいつに開いてる穴はこーやって使うんだな！」

「おまえ……、それどこで……」

「10年後のオレのかばんに入ってた」

「そーいやあいつ、すごい手に入れたって……」

獄寺は山本の話を見無視し、ボックスにリングを当てる。しかし、何も起こらない。どうしてだ？

「人間の体には血液だけでなく目に見えない生命エネルギーが波動となって駆け巡ってんだ。リングは自分の素質と合致した波動が通過するとそれを高密度エネルギーに変換する。死ぬ気の炎をな．．．」

山本はリングに炎を灯しボックスに注入する。すると素早く何か飛び出した。それは空を駆け回り相手に体当たりをする。しかし．．．

「大変です！京子さんがいない！」

「もしかしたらさっきの爆風で．．．」

「そ、そんな．．．」

「ツナ、まだ決まってる。探しに行け。ここはオレが引き受ける！」

「うん！わかった」

．．．．．

ツナは走り、建物の方へ急いだ。しかし、敵の攻撃に巻き込まれ爆風で建物の中に飛ばされる。しかし、ツナはすぐに起き上がり京子ちゃんを探しに行く。京子ちゃんの名を叫びながら建物の中を走って探す。ちょうど角を曲がると．．．

「京子ちゃん！．．．！」

「ありがとう。来てくれたんだ、ツッ君！」

「早く！」

「あの、京子ちゃん足くじいちゃったみたいで・・・」

声をかけたのは京子ちゃんと同じ年くらいの女の子の人だ。

「あなたは・・・」

「私のお友達。橋本紗夜夏ちゃんって言うの！彼氏もいるの！」

「橋本紗夜夏さん・・・」

「とりこぼしは無しだぜ・・・」

後ろからさつき聞いた男の声がした。確か、太猿とか言ってた。太猿は宙に浮き黒鎌を構えている。

「なあにすぐに済む。雨の守護者を待たせられないからな・・・」

「さがって・・・」

ツナは京子ちゃんと橋本さんに声をかけ自分は2人の前に出た。しかし、後ろで何かがはじけた音がした。振り向くと京子ちゃんが10年前の姿に戻っている。しかも、橋本さんまで・・・。その隙に男は黒鎌を振り下ろし炎を飛ばす。ツナは京子と橋本さんを突き飛ばし庇う。

爆風がおさまりツナを探すと、地面に横たわっている。しかも、京子の腕には血がついている。京子はツナに駆け寄ろうとしたが、例の男が道を阻む。

「お嬢さん、次はあんた達だ。女子供を殺すつてのは草を刈るようなもんだと思わんか？何の心配の無く気づけばちゃん切れている。なあに怖がることはない。一瞬であの世だ」

京子と橋本は背筋がゾクツとした。次に私達が殺される。そう思ったのだ。太猿からは炎が飛ばされまっすぐ京子たちに向かっている。激しい爆発の後2人は目を覚ました。自分は生きている。よく見るとツナが2人を抱えていたのだ。

「下がってる・・・」

今まで見たこともないツナの反応にも驚いたがすぐに橋本と共に物陰に隠れた。

ツナは超死ぬ気モードになりXグローブに炎を灯す。そして、炎の推力を用いて宙に舞う。太猿の黒鎌をなんなく交わし、男にパンチをお見舞いする。太猿は飛ばされツナに背を向けている。ツナは太猿に接近し、最後の攻撃をしようとする。しかし・・・

「屁でもくらない・・・」

その言葉と同時に太猿の背中から無数のトゲが飛び出した。それをツナは避けることも出来ず、肩、足、腹部にくらい地面に落ちる。

「ツナ君!!」

京子はツナに駆け寄りうとするが太猿がまたしても道を阻む。

「お前達もすぐにあいつと同じ運命にしてやる・・・」

またしても太猿は鎌に炎を灯し京子達に向ける。しかし・・・

「HELL DRAGON!!!」

後ろからまた、新しい男の音がする。それと同時にでかい雷球が太

猿を襲う。太猿は攻撃を受け止め、なんとか態勢を保っている。

「大丈夫か!!!」

「希生くん!!!」

煙の中から姿を現したのは隣に電気を纏ったユニコーンを連れているバンビーザファミリー龍の使い手の福瀬希生だった……。

……

一方、工場跡地外では、山本が野猿相手に終始圧倒していた。

「獄寺、炎をイメージしろ。死ぬ気を炎にするイメージ。覚悟を炎に変えるイメージだ」

「覚悟を炎にだ？」

「お前なら出来るさ。ま、でも今回はオレに任せとけ。ツナも心配だしな。さがってる獄寺」

山本は獄寺たちを下がらせ自分は野猿に近づく。

「こいつで決めるぜ」

山本は2つのボックスを宙に投げた……。その時……。パフンという音と共に山本・ハル・ランボ・イーピンが10年前の姿になる。

「はあ!!!??」

「獄寺、こんなとこで何してんだ？」

「獄寺さん！探したんですよ!!!」

「どーなつてやがる……。よりによってこんなやべえ時に……」

いいか！よく聞け！とにかく逃げるんだ！」

「ん？」

「はひ？」

「はひじゃねえーんだよアホ女！これしか道はねーんだ！」

「アホ女ってなんですか！」

「いいから走れ！じゃねーと！」

しかし、獄寺たちが走りだす前に野猿から炎が発射された。爆発音と共に山本のバットやハルのバツクなどが飛ばされる。肝心の本人達は……

「くそ！イーピンしか守れねーとは……」

獄寺はイーピンを庇って地面に転がりこんだ。しかし、山本とアホ女にアホは？しかし、後ろを振り向くと山本がアホ女とアホ牛を庇って倒れていた。3人とも死んでない。

「あんの野球バカ……。わけも分からず庇いやがったのか……。まーまー、やるじゃねーか」

「やりい！！刀の奴もぶっ倒したぜ！」

宙では野猿が喜びの声をあげている。やってやるしか……。獄寺はダイナマイトを構える。

「へへっ。ダイナマイトでオイラに勝てるかよ！」

奴の言う通りだ。ダイナマイトじゃ歯がたたない。その時、獄寺はリングを見て山本の言ったことを思い出した。「炎をイメージしろ獄寺。覚悟を炎にするイメージだ」

「へっ、お前にいわれたかねーんだよ。オレあいつだって・・・、ギンギンに覚悟は出来たんだ!!」

あとは炎だ。そうこうしている内に野猿は鎌を振り上げてこっちに向かってきている。覚悟を炎に、炎に!!
すると、獄寺の嵐のボンゴレリングに炎が灯った。

「これが死ぬ気の炎・・・」

獄寺は10年後の獄寺のボックスに入っていたボックスを取り出す。

「へっ、まるでパンドラの箱だな・・・。だがやるしかねえ!鬼が出るか、蛇がでるか!」

獄寺はボックスに炎に注入する。すると、ボックスの穴から微かに光が出て、次の瞬間、完全にボックスが開き中から何かが出てきた。それは獄寺の左腕に装着された。よく見ると髑髏の銃みたいなんだ。その髑髏の銃?に見とれていると野猿が早いスピードで接近してくる。

「どーやって使うんだ?」

獄寺は側面にあつたボタンを押す。すると、前面にメッセージが表示される。

「弾を食わせるだー!!オレは銃は使わねーんだ!弾丸なんて持ってねー!!」

「死ね!!!!!!」

「こいつじゃダメか?」

獄寺はダイナマイトを髑髏の銃の口に押し込み発射した。すごい風圧が相手を襲う。しかし、攻撃はそれだけで、相手を見失った。すると後ろから黒鎌の炎を食らった。獄寺は地面に転がりこみ倒れた。

「ちきしょー！ー！」

相手はすでにこっちに接近している。獄寺は目をつむる。しかし、爆発音で目を開けた。そうすると、横から3人に少年がこっちに走ってくる。

「大丈夫か？」

「あんた、たしか、バンビーズの浅井翔太？」

「ああ、そうだ。助けてやる。山本たちも連れて物陰に隠れて！後はオレ達でなんとかするから！」

「すまねーな・・・」

獄寺は翔太の指示に従い、まだ倒れている山本たちを起こし、物陰に隠れた。

「ここからはオレ達が相手だ！」

「なんだお前ら！」

「バンビーズファミリーだ！」

「バンビーズ？ボンゴレの同盟のファミリーか・・・」

.....

「なんだお前！」

「オレはバンビーズの福瀬希生だ。お前の相手はオレがしてやる！」

「希生君！ー！！」

「紗夜夏！京子さんとツナを連れて物陰に隠れろ！早く！！」

紗夜夏は希生の指示に従い、倒れているツナを京子と救出した後近くのドラム缶の影に隠れた。

「さあ、おしまいにしてやる！ユニコーン、行くぞ！！！」

希生は雷ユニコーンにまたがり太猿に接近した。

「終わりだ！ CLAZY STORM！！！」

「ぐわっつっつっつー！！！」

太猿は建物の天井を突き破り外に飛んでいった。

「紗夜夏、大丈夫か！？」

「アタシは大丈夫！でも、沢田君が！」

「ああ、分かっている。こいつに乗せる。とにかく、獄寺たちのところに向かうぞ！」

希生はユニコーンにツナを乗せ、紗夜夏と京子を連れて外に出た。

.....

「行くぞ！凶暴鯨！」

バンビーザの鯨の使い手、長田敬介はボックスから凶暴鯨を呼び出し、野猿に接近する。

「行くよ！大鷲！！！」

「行くぜー！オレのレッドタイガー」

翔太は大鷲を、早崎賢はレッドタイガーをそれぞれ、ボックスから出し、3人で野猿に接近していく。

「食らえ！ コンビネーションアタック！！！」
「うわー！ー！ー！ー！」

野猿の3人の合わせ技を食らい、飛んでいった。

「コレでお終いだな……。獄寺たち、大丈夫か！」
「なんとかな……。早く、アジトに……」
「おい！翔太、賢、敬介！獄寺たちも……」
「ボス……」
「10代目！！！！！」

獄寺が希希のユニコーンに乗っているツナを見つけ近寄る。

「10代目……」
「沢田は太猿の攻撃を食らって、腹部とか3ヶ所に傷がある。早くしないと……。とにかく、獄寺アジトに案内しろ！これではツナがもたない……」
「そんな……。ツナ君……」
「京子さんも落ち着いて……。バンビーズの医者をやぶから……」

そうして獄寺の案内でボンゴレのアジトに入った……

ひとまず、急いでボンゴレのアジトに戻った。ツナは重症、獄寺は軽症だった。ツナはすぐに医務室につれていかれ、そのままバンビ―ザの医者によって手当てが行われた。

その間にリボーンは山本、京子、ハル呼び出した。獄寺はずっとツナの寝るベッドの横にいる。

「あの戦いだけでも驚いただろうが、今からここで起こってる事を教えてやる。心して聞いてくれ」

「……一方、バンビ―ザの連中は……」

ボンゴレアジトの一室を借り、作戦会議をしていた。

「まさか、紗夜夏までもが10年後に来るとはな……」

「ああ、しかし今回の敵はブラックスペルだ」

「ねえ、この世界ってどうなってるの!? 希生君!？」

「紗夜夏……。とにかく落ち着いて。俺が過去に戻る方法を調べるから。ね?」

「う……。うん」

「じゃあ、長田と浅井はここに残って。俺と早崎はボンゴレと話しをしてくる」

「ああ」

希生と早崎賢はツナのいる医務室へと向かった。かなり紗夜夏も動揺していた様だが、そこは浅井と長田に任せた。

・・・・・・・・・・医務室・・・・・・・・・・

獄寺はツナの手当てが終わってからずっと医務室にいる。ボスの右腕になるという意味でいるのかもしれない。なにはともあれ、ツナは致命傷になるところギリギリで当たっていなかった。肩と足は大事なないが腹部は時間がかかるらしい。

ツナはさつきから額に汗をかいている。表情からしてうなされてい
るのだろう。

「・・・・・・・・10代目・・・・・・・・くっそーあのヒゲヤローめ・・・・・・・・」

その時、ツナのまぶたが微かに開き次は「あぶない！」の言葉と一緒に起きあがった。

「いてててて！！」

「10代目！ ムリをしないでください」

「獄寺君・・・・・・・・ここは・・・・・・・・？」

「アジトっす！10代目は敵の攻撃に当たって気を失ったんです。でも、バンビーザの福瀬が助けにきたみたいです」

「来ちゃったんだ……。京子ちゃんが過去から！！！」

「・・・・・・・・そのことなんです、笹川だけじゃないんです・・・・・・・・えっ！そんな！みんなも10年前から！！？」

「それが、どうして10年バズーカに当たったのかいまいち分からなくて・・・・・・・・」

「ダメだよっ！こんな所にいたら・・・・・・・・みんな殺されちゃうよ！！！」

獄寺が「落ち着いて」というがツナの耳には届かず女子の恐怖にお
びえる声で目が覚めた。

「いやですこんなの〜」

ツナは声のする医務室の部屋の扉を見ると、そこには京子に支えられたハルが居た。

「10年後の世界がこんなデストロイだなんて・・・」

ハルを支える京子の顔も真っ青になっている。目は涙をこらえている目だった。

やがて、京子がツナの方を向き・・・

「ツナくん・・・だいじょ・・・」

「ハルは平和な並盛に帰りたいです!!」

そう言つてハルがツナに抱きついてきた。医務室にいた他のひと達もハルの一言で京子は目に涙が、獄寺は暗い表情になっている。するとまたしても医務室のドアが開き次は、山本とティーカップを二つ持ったりリポーンが来た。山本は顔が珍しく暗く、部屋の入り口で立ち止まっている。

「ハル・京子、こいつを飲め。落ち着くぞ。特製ハーブティーだ」

「ありがとう、リポーン君」

「それと、さっき話したお前達に任せたいことだ。読んでおいてくれ」

「リポーン!!!!!!」

医務室の部屋中にツナの声が響きわたる。他のメンバーが一斉にツナに視線がいく。ツナは服を着、立っていた。

「お、もう立てるようになったのか」

「・・・オレ・・・」

「・・・・・・・・分かったぞ。ツナと獄寺と山本と話をする。ハルと京子は席を外してくれ・・・」

「ハルちゃん、いこ・・・」

入れ替わりでバンビーザの福瀬と早崎が入ってきた。

「京子とハルには今ヤバイ状況にあるということだけ伝えておいた。マフィアの事やボンゴレの事は一切話していない」

「・・・・・・・・。帰さなきゃ。みんなをこんな所にはいさせられない！なんとしても過去に帰さなきゃ！！ もう生き延びるとか、そんな問題じゃー！！」

「落ち着いてください・・・・・・・・10代目・・・」

「お・・・・・・・・おい、ツナ」

「だいぶ錯乱しているな・・・」

「ちっ、違うよ！もうここで守護者を集めるとか！！ そんなのんびりしている場合じゃないんだって！」

ツナは他の人の声など届いていない。京子やハルたちの方が気になつてしょうがないのだ。希生はこんな自分が昔いたなと思いついた。

「そうやって興奮するな。やはり守護者を集めるのは避けては通れねえぞ」

リボーンはそう言うと獄寺に指示し、獄寺はある手紙を取り出した。それは、10年後の獄寺のカバンに入っていた一通の手紙だった。獄寺はその手紙の内容は話し始めた。

「守護者は集合。ボンゴレリングにて百蘭を退け、写真の眼鏡の男を消すべし。全ては元に戻る」

「でも、今の話って・・・」

「ええ、最初に10代目が10年後のオレから聞いた内容と重なっている。なのでオレも10年後のオレへの指令書だと思って気に止めていなかったんです」

「だが、今朝知った事実からすると、この時代にはないモノがこの手紙に書かれてるんだ。わかるかツナ？」

福瀬がツナに問う。しばし、ツナは考えた。そして、ツナはある一つの答えに繋がることを発見した。

「ボンゴレリングー!!」

「更にこの手紙には過去で眼鏡の男を消せなんて書いていない。むしろ百蘭がいるのは、この時代だ」

「わかるか？この手紙はこの時代においてリングを持つ、つまり過去から来たお前達に書かれていたんだ」

「そして、文面通りなら、ボンゴレは守護者を集めて眼鏡の男を消せば全ては元に戻る。つまり過去に帰れるんだ」

「幸いな事に、この眼鏡の男なら福瀬が知ってるんだ。入江正一っていうらしい」

.....日本某所.....

2人の女性がデカイ丸い装置のある広い部屋に入り一つの机に向かって歩いていく。やがて、2人の女性はクスクスと笑いながら机に寝そべっている男のヘッドフォンを取る。

「研究、お疲れ様です。入江様.....」

「ごめん、寝ちゃったよ.....」

男は夢から醒めた。その後、この2人の女性からの話を聞き、すぐ

に隊員服を来て部屋を出た。

「野猿と太猿？第3アフエランドラ隊の？負傷ってどういうことだ
い？」

「報告では兄弟ゲンカをしたとのことですよ」

「なくもないだろう。野蛮な連中だよ。ブラックスペルは」

「処分はいかがなされますか？」

「彼らきつと外様の上官のいうことは聞きいれないだろう。・・・」

「僕が直接、第3部隊の隊長と話を付けるよ。ところで君、百蘭サン
から送られてきたの見た？」

「ええ、格納庫いっぱい。・・・。たしか、花言葉は・・・」

「期待だろ？プレッシャーで僕を殺す気なのさ。あの人は・・・」

「・・・ボンゴレアジト・・・」

「でも、人を消すなんて・・・!!」

「なら、こらしめる程度にしとけ」

「ツナ、問題はお前自身だぞ」

「え？」

「人を消すの前にお前は過去に帰りたいか、帰りたくないかの問題
だろ？」

「福瀬君・・・」

「帰りたいなら、やるしかないんだ。わかるだろ？」

「でも、京子ちゃんとハルが・・・」

しかし、ツナの心配を吹き飛ばすことが起こった。

扉が開き入ってきたのは「ガハハハ」と笑いながら入ってくるラン
ボだった。その後ろにはハルが・・・。しかし、ハルは何かにつま
づいたのか持っていたボウルを落とし倒れた。ボウルの中に入って

いた、たまねぎが散乱する。

「スイマセン！イタズラしたランボちゃんを追いかけてまして！！」
「ハルちゃん、大丈夫？」

その後ろから京子とイーピンが入ってくる。京子もボウルにたまねぎを入れてもっている。

「京子ちゃん！とたまねぎ？」

「非戦闘員には食事やチビ達の世話を任せた」

「じゃあ、紗夜夏にも手伝ってもらっかな」

「その心配はないよ！」

なんと紗夜夏までもがニンジンをもっていたのだ。

「私達が紗夜夏ちゃんの所にいって頼んだの！そしたらOKしてくれて」

「そうか・・・」

「今日はカレーを作るんだよ！」

「あれ？なんか元気になってる・・・？」

「当然です！こんな時だからこそいつまでもクヨクヨしてられません！」

「ツナ君たちに負けないように、私達もがんばろうって決めたの！！」

「立ち直り早っ！」

「女ってすげーのな・・・」

3人の女子と2人のチビがいなくなる。そっだ、今やれる事をちゃんとやって行くんだ！

そう心に誓ったツナだった。

……ラルは……

ラルは部屋で戦闘用の服に着替えていた。全部の準備が調い最後に棚に飾ってある一枚の写真に目を落とした。この写真はコロネロがアルコバレーノになる以前、イタリアの特殊部隊にいた頃に撮った写真だ。コロネロはもういない……。ラルはその写真を懐にしまい、部屋を出た。すると、部屋の前に土下座するツナと獄寺の姿があった。

「何のマネだ？」

「オ……オレ達……もつと強くならなくちゃいけないくて……でも、リングの使いかたとか分からなくて……」

「リボーンの差し金だな……」

「ピンポーン！ 守護者集めには戦闘力UPが絶対に必要だからな」

リボーンは宙からツナの頭に落ちた。着地はしたものの、当の本人のツナは額を床にぶつけた。

「断る。山本に頼るんだな」

「それがな……山本は見ての通りただの野球バカにもどつちまっただ」

「お前達と遊んでいる暇はない。オレは発つ」

「ちよつと待つてください！ 真剣なんで……」

「ツナ。だったら、その仕事はこのバンビーザに任せな」

「福瀬君……！」

「バンビーザだと！ 生きていたのか！？」

ラルはバンビーザと聞いて反応した。そういえば、野宿してたときもバンビーザも本部と連絡が取れていないといていた。

「だが、オレ達も10年前の姿だ。てか、教えるか？リングの事？」

「じゃあ、お願いします！」

「おう！」

と、チヨードそこにジャンニーニが通りかかったのでどこか暴れる場所がないかと質問したら下にあるということ以案内してもらった。

.....入江正一は.....

「この部屋です」

「うん」

入江は2人の女性に案内されある部屋に向かっていた。扉をあけると足元のビンを蹴ってしまった。よく見るとそれは酒のビンだった。

「誰だ!!!」

奥から男の声が聞こえる。

「ホワイトスペル、第2ローザ隊、隊長A級。入江正一です」

「おおっと、これは失礼！こっちから挨拶に伺おうと思っていたんだが.....オレが第3アフエランドラ隊隊長.....だ。ようこそメローネ基地へ」

「あなたが電光の。武功はかねがね聞いています」

「やめてくれ。上司におだてられると鼻の下が伸びる」

2人は握手を交わす。

「上司？同じA級ですよ」

「いいや。あんたがこの最高責任者はあんたなんだ。我ら第3部隊は惜しみなく第2部隊に協力する」

「助かります。では早速ですが……。野猿と太猿がトラブルを起こしたことに付いて……」

「おお、それはオレの監督不行届きだ。2人には灸をすえて反省もしている。俺の顔に免じて許してもらえないか？」

「ですが……。問題はボックスを4つ失ったこととして……」

「……。次は庇いきれないと伝えてください」

「いやあ、助かる」

「それともう一つ、ボンゴレに関することはどんな小さなことでもいい。もし何かあったら必ず僕に伝達してください」

「そうかい」

「では、これで。失礼しました」

入江は の部屋をでた。

・……………ボンゴレアジト、トレーニングルームでは……………

「これからオレ達の知ってる範囲でお前達に教えていく。一度言うておくれが俺は優しくくない。ついてこれない奴は放っておく」

「はい！」

「この時代は俺らのいた10年前と違い、戦闘ではこのリングとボックスが要になる。つまりボックスを開けることが出来なければ戦いにならない。だから、まずはボックスを開けるのに必要なリング

を理解しろ。リングに出来ることは2つ。リングそのものの力を使うか、ボックスを開けるかのどちらかだ。例えばオレの雷のリングで出来る、この電磁シールド。これはリングの力を使っている。次にボックスだ。ボックスとはリングの炎をボックスにチャージし使うモノだ。種類は実に多種多様」

希生は前回の戦闘で使った雷ユニコーンと魅夜魔鍬を出した。同様に早崎賢はレッドタイガーを出す。

「しかし、炎が切れれば活動を停止する」

炎をあまり注入しなかった希生のクワガタはすぐに力をなくす地面に落ちた。希生はそれをボックスにしまった。ユニコーンはたくさん炎を注入したためまだ動いている。

「ここまでわからない事はあるか？」

すごい！希生君も10年前から来たのもうリングの使い方を知っている。

「あの一ー。オレ、一つもわかんねーんすけど」

「わかれ！！！！！」

希生は山本に思いっきりパンチをした。

「では、実践に入る。まずはリングに炎を灯せ。獄寺はリングに炎を灯したと聞いたが」

「つたりめーよ！」

「じゃあ、見せてみる」

「覚悟を炎にするイメージ！！！！覚悟を炎に！！！！」

「獄寺君!」

「よっしゃあ!!!ともった!!」

獄寺は赤い炎をリングから出した。

「見事だ。今はこの段階でいいが戦闘に入ったらすぐに炎を出せるようにならなくちゃいけないぞ。じゃあ、次は山本だ・・・」

「覚悟を炎につて・・・こんな感じか？」

しばらくして水色の炎が灯った。それも、獄寺よりも早く。

「山本は良いな。すぐに出た。じゃあ、ツナだ」

「それが・・・」

「甘えるな!!!」

本日2回目、希生のパンチが入った。

「お前、本当に覚悟あんのか？」

希生が怒ったような口調で言う。

オレにだって覚悟はあるさ。ミルフィオーレに勝って眼鏡の男を!だからどんな修行にだって耐えて!

ツナを少し目を開けるがリングは何も反応しない。なんだオレだけ・・・。

「ツナ、お前はヒーローになんかなれないんだ」

「えっ!」

「お前、最初に京子を見つけて何がしたかったんだ？」

「それは・・・き・・・京子ちゃんを守りたかった」

「それで、今はどうしたい？」

「仲間を！みんなを守りたい！」

「10代目！炎が！！！！」

ツナはリングを見ると確かにオレンジ色に炎が出ている。

「よくやったぞ。じゃあ、次は……」

「待て！」

声のする方を見るとラルが立っていた。

「なんのようだ？」

「オレが教えてやる。ここにいる全員がリングに炎を灯した。では、次はこのボックスを開けてみる。一度も開いたことのないこのボックスを……」

ラルが差し出したのがカラフルな迷彩柄のボックスだった……

……

「こいつ山中武だよ」

「たしか、ボンゴレの雨の守護者は山本武だぞ！」

「兄貴、この哀れな山中はどうする？」

「情をかけてやれ」

「情つてのは愛情じゃないよな？」

「ああ、非情の方のな……」

ラルは突然トレーニングルームに来て指示をした。なぜ、いきなりやろうと思ったのか？

ともかく、ラルは迷彩柄のボックスを獄寺に渡した。

「まかせとけ。オレで終わらせてやる。よし、見てろよ」

獄寺はリングに炎を灯しボックスに注入するが・・・、何も起こらない。

「経験でわかる。こいつは不良品だな」

「オレにもやらせてくれよ」

山本は獄寺からボックスを取り自分もやるが、またしても何も起こらない。

「おい！やっぱこれ壊れてんじゃねーか？」

「壊れてなどいない。ボックスを開けられない場合、考えられる要因は2ふある。炎が弱いか、属性が違うか」

「!!!」

「属性？」

「リングが発する炎は7種類。ボンゴレリングと同じように、大空・嵐・雨・雷・雲・霧・晴に分類される。更にボックスも同じく7種類に分類され、リングとボックスの属性が合わなければ開けられない仕組みだ。ざっと、こんなもんだが・・・」

またしても、ラルを差し置き希生が説明してしまった。ラルはまた後ろに下がる。

「でも、10年後の山本はそんなこと言ってなかったぜ。奴は波動がどうこうって・・・」

「まあ、波動ってというのが大空や嵐などの大空7属性というものだから、例えば、獄寺は嵐の波動のリングを持っている。しかも、炎が灯ったとすれば、お前は嵐属性の波動が流れてるんだ。つまり、嵐の波動、嵐のリング、そして嵐のボックスとならなければボックスは開けられない」

「とにかく、属性を揃えればいいんだな」

「そういうことになる」

「じゃあ、雨と嵐属性ではないってこと？」

「オレの霧属性でも開けなかった」

今度はボックスを渡したラルが言ってきた。今現在、嵐、雨、霧では開けなかった。ツナの番になりボックスがツナに渡る。

「言つとくが、大空はすべての属性のボックスを開けられる」

「それじゃあ、つまらないから俺にも開けさせてくれよ」

そう言って希生はツナからボックスを貰い、自分のリングに炎を灯す。

「福瀬君、いくつの波動持ってるの・・・？」

ツナと獄寺、山本やラルは驚いた顔だ。それはそうとも、希生の両手には3個ずつリングがはめられている。

「まあ、6個の波動だが、3つは何の波動だか分からない。でも大

空7属性だったら、雷・霧・雲を持つてる。じゃあ、行くぜ」

希生は3個のリングの炎をボックスに注入するが何も起きない。

「しゃあねー。なんだか分からない属性をやってみつか」

そう言つて、黄色の電撃を発する炎をボックスに注入する。するとボックスが壊れる。迷彩柄のボックスを壊れ、中から傷だらけの青いおしゃぶりが出てきた。おしゃぶりにはマモンチエーンが巻かれている。

「おしゃぶりだ。しかも、これはコロネロの・・・」

すると、ラルが希生の手からおしゃぶりを取り返し、その場を去っていった。すこしの間、なんでラルがおしゃぶりを取つてたのか話していたが、やがて話を希生のリングにいった。

「お前のそのリングなんだ？」

「分からない・・・。とにかく飯だ。ほら、京子さん達が待つてるぞ」

・・・リポーンは・・・

その様子をトレーニングルームの端にある椅子に座ってみていた。ちょうど、希生が黄色の電撃を発する炎を出したときだった・・・。

「なんだ、あの炎・・・。オレもみたこたあーねーな・・・。それに、他のリングもだ。緑の炎を出しているのと、無色の炎を出すリングがある」

この光景を疑問に思ったりボーンは後でこっそりと希生と話をした。

「……………テーブルを囲むボンゴレとバンビーザは……………」

「うまい！！！！！」

みんなが京子・ハル・紗夜夏の作ったカレーをほお張っていた。

「本当にすごくおいしいよ！！！」

「はい。イーピンにニンジン」

「○……………」

「私と京子ちゃんと紗夜夏ちゃんが腕によりをかけたからね」

「カレーなんて誰が作ってもかわんねーだろ」

「おかわりよそいませんよ！！！」

獄寺の言葉にハルがすごくキレる。

「おやつ！！！」

「??？」

「ランボさん、もーおやつにする~~~~！！！」

「そんなのないよ」

「プリンは？アメは？！？」

「……………就寝後、京子は……………」

みんなが寝た後も京子は1人、ベットに体育座りをしていた。なかなか寝れない様子だった。

「何？沢田達が見当たらん？心配いらん！どいつも、くたばりそー
にない奴ばかりだ」

「ええー！ー！！なんで10年前の京子ちゃんか！！」

「なあに、一瞬であの世だ」

「大丈夫。君は守って見せる」

「この時代の了平は行方不明なんだ」

京子の頭の中には先日起こったばかりの戦闘のことや、この時代の了平のこと、ツナ君の違う顔……。京子はなんだか不安になってきた。というより、思い出すのが怖くなってきた。そんな事を考えていると、部屋のドアが開く。

「だれ？」

京子が尋ねる。

「アタシ。紗夜夏だよ」

「紗夜夏ちゃん？どうして……」

「だって、ご飯のときも暗い顔してたから……。なにか、考えてるんじゃないの……？」

京子は小さく頷くだけだった。

「ツナ君は、変な人達と戦ってて、お兄ちゃんはいなくて……。私……。強がってたけど……」

「そう……。アタシもね、昔は希生君が戦っているのなんてあ

りえないと思つたの。でも、こないだ、襲われて希生君が来て・・・。アタシ、信じてるの。絶対、過去に帰れると・・・」

紗夜夏は静かに喋った。京子はこの人は大人だなあと思いながら聞いていた・・・

・・・翌朝・・・

ツナは朝早くトイレに行きたくなり部屋を出た。道のわからないツナは開いているドアを見つける。そこに入ると、ジャンニーニとリボンが画面に向かっていた。どうやらここは作戦室らしい。部屋には通信機器やモニター、パソコンなどがある。

「ジャンニーニさん、リボンも」

「おはようございます。10代目」

「ちやおっす。朝1番のGood Newsだぞ」

「え!!!何?」

ツナは期待を抱き耳を傾ける。

「外にミルファイオーレのブラックスペルがウジャウジャいるぞ。こりゃ、外に出たら戦闘は免れねーな」

「どこがいいニュースだよ!!!」

しかし、部屋内に警報音が鳴る。画面には「S7S」と表示される。

「味方からの救難信号をキャッチ!!!信号の発信源を捕捉。モニタにだします!!!」

「!!!!これはヒバリさんのヒバードだ!!!」

モニターに映ったのは雲雀の鳥、通称ヒバードだった。発信機を取り付けているらしい。しかし、信号が弱まりついには消えた。

「何asca!今の音は!」

「何があつた」

「みんな!」

部屋に入ってきたのは獄寺、山本、ラルだった。

「信号の消えた場所をわりだせ!」

「えっと、出ました。並盛神社です!」

「なんでだ?」

「単にバッテリー切れかもしれませんし。もしくは敵の罠かと・・・この辺にも敵がいますし」

「ちょ!どうすればいいのー!」

「ちょっと待ってください。中にひととき強いリング反応が・・・恐らく隊長クラス。Aランク以上のリングかと・・・」

「だな・・・お前達の戦った野猿と太猿の隊長だ」

しかし、この作戦だけでは無く、またしても災難が起こる。ハルが走って部屋に入ってきた。

「大変です!京子ちゃんがいらないんです!さつき、紗夜夏ちゃんに話したら希生さんと早崎さんが基地と飛び出していきました!」

「ツナ君!」

「浅井君に長田君・・・」

「京子さんの搜索はバンビーザに任せてください。今、福瀬と賢が搜索にできました」

「なんて、勝手なことを・・・」

「いいじゃねーか。あいつらはこのボンゴレより強いし、知能もある。必ず連れてくるはずだ」

「リボンさん……。では僕達は他の女子達をまとめておきます」
「ありがとう。浅井君、長田君……」

浅井と長田はハルを連れて部屋を出ていった。ツナ達は、作戦を考え始めた。

最初に作戦を考えたのがラルだった。

「バンビーズに頼るのは不安だ。もうひとり捜索に向かわせるべきだ。また、ヒバードの事もある。どうする沢田？」

「うん。じゃあ、オレとラルで京子ちゃんを探す。獄寺君と山本でヒバードの捜索に出て」

「山本とですか……。じゅ……。10代目の命令とあらば喜んで……」

獄寺の顔はかなり怒っている顔だ。

ツナとラル、獄寺と山本はそれぞれの場所に近い位置から外に出た。

……。京子は……

塀の影から自分の家を見ていた。しかし、家の前には黒いスーツを着た男が2〜3人立っている。その男の1人が通りかかったおばさんに話しかけている。耳を澄ますと……

「この家の子を知りませんか？ 笹川京子っていうんですが……」

私を探している。やっぱり……。でも逃げられない……。

「やっと見つけた」

ふいに後ろから口を押さえられ、言葉を話すことが出来なくなった京子。口を押さえている服の色は黒。もしかして捕まった。そう思った時、腕が回され黒い服を着た人の顔が分かった。

・・・・・・工場跡地では・・・・・・

「ほう、そいつは朗報だ。すぐに向かうと伝えてくれ」

「アニキ!!!!」

「ウサギが網に掛かったらしい」

「おいら達も行くよ!」

「いいや。オレ1人で充分だ。別命あるまで現状維持。こつこつとき他は他のウサギもかかりやすい」

はそう言ってブーツに炎を纏わせ宙に浮いた。そのまま、どこかへ移動した・・・・。

・・・・・・京子は・・・・

「静かに。騒ぐとあいつらに見つかるよ。にしてもあんだ、いつ髪きつたの?」

この声・・・・。

声の主は京子は自分の方に向かせた。京子の口もとには静かきの印、人差し指があった。

「京子、あんだ縮んだ?」

「!!!!!!」

「間違いない……。10年前の……」
「花~~~~~!!!!!!」

京子は10年後の花に助けられたのだ。そのまま、花の家まで走っていった。花は「あんたの兄貴からのことづてもあるし」と言っていた。

……ラルたち……

ラルとツナは京子の家の塀に隠れて正面の見張りの人を見ていた。すぐ近くには並盛公園がある。

「やはり笹川の妹は捕まっていないな……」

「本当ですか！よかったー！ー！」

「だが、これほどの監視の中、見つかってないとすると一体……」

ラルとツナは並盛公園の木の下で布を被り見えないようにしていた。しかし、突然電気の弾ける音がした。

「だ！」

ラルがそう叫ぶ。多分 という奴は雷属性の人なんだろう。ツナは昨日、教えてもらった属性の事について思いだしていた。

……獄寺・山本は……

獄寺と山本は並盛神社の林の中にいた。

「ここにくると思いだすよなー！夏祭り」

山本はまだ呑気の事をいつている。獄寺はさっきから頭にきてしょうがない。

「もし、ラル・ミルチが言った戦闘回避不可能の時はコンビプレイで決めようぜ！やっぱ武器からして俺が前衛で、そのスキにお前が……」

「勘違いしてんじゃねーぞ！今までなーなーやってきたのは10代目のためだからだ。他の目的でためーと手を組む気はねえ！」

「想像以上に嫌われてんのな」
「ったりめーだ」

獄寺は山本の首元をつかみ山本は言った。その後もつべこべ言い争っていたが、やがて気配に気づき表情を変えた。リングからマモンチェーンを外しボックスを取り出す。

頭上から野猿同様の炎の攻撃がくる。それを交わし、爆風に紛れながら個別に散った。相手の1人がいきなり飛んできたツバメに気をとられ、一瞬目を離れた。そのスキに山本は時雨金時を变形させ刀にする。その刀で相手を斬った。相手はふらふらと地面に墜ちた。その落ちていく人に気をとられたもう1人の相手が背後から獄寺の赤炎の矢をくらい、焼け焦げて地面に落ちる。

「今のはちょっとしたコンビプレイだな！」

「よけーなことすんじゃねえ！オレ1人で充分だ」

しかし、バチツと音がしてその音の方を向く。

「ボンゴレの守護者ってのは腰を抜かして方々へ逃げたって聞いた

が、こりやまたかわいいのが来たな」

電撃・・・？相手の男はさっきの男同様、宙に浮いてるのだが靴らしくものからでているモノがある。

2人はおそろく雷属性の人だと気づく。

「雨の守護者と嵐の守護者には違いがないようだが、随分と写真より若い・・・若すぎるな。ボンゴレってのは若返りの水でも飲んでのか？まあいい。お前らとやり合つと戦闘ってよりお仕置きになつちまいそうだな」

「このへらず口はオレが倒す。お前は手―出すなよ」

「へいへい」

「さっきの連中への貯金もある」

獄寺は男に向かって走りだす。突然爆発が起きる。獄寺は何もしてないが、あらかじめ仕掛けておいたであろう、爆弾が爆発したのだ。しかし、煙の中からは無傷の男が余裕そうな顔をして出てくる。

「ほう・・・」

「行き止まりだぜ・・・果てな!!」

獄寺は例の銃型の武器で炎を発射する。

・・・・・・希生と早崎は・・・

「おい、爆発だぜ。希生」

「ああ、行つてみるか・・・」

「京子さんは・・・？」

「さっき、ツナとラルが笹川の家近くにいるのを見た。恐らく、

笹川を探している。多分あつちの並盛の山にいるのは獄寺と山本だろうし……。あいつじゃ無理だ……。行くぞ！」
「りよーかい」

希生と早崎は並盛神社に近い路地に居た。ちょうど敵はいなく、作戦を考えていたところだ。

しかし、爆発が起きたためブラックスペルの連中を倒して、急いで並盛神社に向かった。

……ツナは……

ラルとツナは依然、並盛公園を動いていなかった。

「つて人が獄寺君と山本の所!？」

「あの方向は神社だ。その他に施設はない。こう敵が多くてはすぐ助けに行くのは不可能だ。今行ったとしても4対1で勝てるかどうかだ……」

「そんな強い?!?!」

……獄寺・山本……

爆風が収まり獄寺と山本は買った気でいた。しかし林の奥から……

「なに!?!」

「効いてねー!!」

「そーいや、自己紹介まだだったな。オレは つてんだ。宜しくな」

こいつがラル・ミルチの言っていた激強っていう……

「獄寺、ここは、手を組んだ方がよさそうだな」
「つるせえ」

「獄寺、お前……」

獄寺は銃型の武器を山本に向けた。

「組む気はねえって言ってんだろ。すつこんでろ」

「……そーかよ!!! なら勝手にすりゃいいさ」

「はなっからそのつもりだ。ひっこめ」

「仲間割れか？」

「逃げやしねーから安心しろ。お前の相手はオレがしてやる」

山本はこの会話を聞きながら近くの木に隠れる。さっきから獄寺の言葉は気にいらぬ。

「なら、遠慮なく行かせてもらおうかな……」

「もうとっくに戦いは始まってるけどな」

「ああ、わかってる。だが、この手はくどいな」

そうだ、獄寺はまたしても 近くの木に爆弾を仕掛けたのだ。だが、当に は気づいていた。またしても爆発が起こる。

「なんとかのーつ覚えか？」

「どーかな」

はその爆発を難なく交わし宙に上がる。獄寺はダイナマイトを投げる。そこに銃型の武器で攻撃する。すでにダイナマイトは にく近くに来ており回避は不可能だ。そこに炎をうちこんだのだ。

「威力倍増か」

はそう呟く。そしてリングから電磁シールドを展開する。獄寺の攻撃は大空7属性の中で1番の強度を誇る電磁シールドに敗れた。

「電磁バリアだと……？リングそのものの力なのか!？」

いや、そうだ。昨日希生が言っていたし、本当に見せてくれたのだった。

「それほど驚くこともないだろう。こいつはお前達の破棄したボンゴレリングと同等の力を持つマーレリングだ。じゃあ、そろそろ」

はリングから炎を出しボックスに注入する。中から出てきたのはビリヤードのセットだった。しかも、ただのビリヤードの球ではない。雷の炎を帯びた球だ。

「しめていくぜ」

そういうと 球の発射態勢になり、それを打ち出す。不規則に向かってくる。しかも、途中他の球と当たって進路が変わる。一回地面にあたり、それっきり止まった。しかし……

「がはっ……」

地面に落ちた球が炎を出し、その炎が獄寺に命中したのだ。獄寺は避けられずその攻撃にまんまとはめられた。

「どうだ。ショットプラズマの味は……。天国は見えたか？」

「天国への扉は見えたか・・・？」

その勝ち誇った声で言う6甲花の雷の守護者。その声を木に隠れて聞いていた山本は決意を決めた。

・・・・・・・・ラル・ツナは・・・・・・・・

依然、2人は住宅街に居る。あちこちのルートで京子を探していたが、の部下と思われる黒い隊員服を着た男達が道という道にわんさかという。

「どーしよー。これじゃあ、京子ちゃんが探せない。獄寺君達もやばいってのにー」

ツナは不安を募らせる。京子がいなくなっただけからすでに2時間は経過している。ツナ達が外に出たのは京子が外にでてから、およそ40分。ここまでの敵がいるのに捕まっていなるとすると、どこかにまださまよっているかもしれない。もしかしたら、もう捕まっている可能性もある。ツナらは、家の塀に背中をつけ、道を調べていた。すると、ツナの頭に何か当たる。飛んできたであろう場所を向く。後ろは一軒家の家だ。よく見ると2階の窓が一つ開いている。そこには人影がある。それを、もっとよく見ると、それは黒川花であった。もう一度、この家の表札を確認するとやはり黒川と書かれている。黒川を見ると指をさしている。指さしている方から人が出てくる。なんと、それは京子だったのだ。

「笹川の妹が敵に未だ見つからない理由が分かったな」
「う……うん」

……福瀬・賢は……

ツナ達とは違い、こちらは住宅街を抜け出しさっき爆発のあった神社の方に向かっていた。

「おいおい。さっきの爆発って誰か戦ってたのか？」

「だと思っ。ボンゴレはどう展開したか分からないから、とにかく向かってみないと」

「だな……。賢、助太刀の時はお前も戦っていいからな」

「漬け込む隙があつたらな……」

「まあ、とにかく急ぐぞ」

……神社では……

獄寺はの“ショットプラズマ”を食らい、地面に倒れていた。まだ、動けるものの、まともな戦闘が出来るかはわからない。

「球に帯電させた電気を地中でスパークさせたのか？」

「正確には電気の性質と極めて酷似した死ぬ気の炎だ。純度が増すほどに切れ味が鋭くなるのが雷属性の特徴だね……。そこそこしつかり味わって……。召されな！」

また、ショットプラズマを繰り返す。球は他の球とぶつかり不規則に軌道を変える。最もが計算して打ち出しているのだが……。一回目の攻撃はジャンプして交わしたものの……

ゲタもねーのに飛んじまったな……。おしまいだ。

はそう呟くと球打ち出そうとしたとき……。獄寺の前にさっきの竹刀を持った男が出てきた。助太刀かと思っただが、その男は助ける所か獄寺は剣で飛ばした。

飛ばされた獄寺は反論する。

「てめ……。何のマネだ……」

「お前の腐った根性叩きなおしにきた。どーにも腹の虫がおさまんねーからな」

「んだと!？」

「お前、日本に来てツナに会うまで一匹狼で誰も信用してなかったんだってな。だからこそ初めて心を開いたツナに忠実なのは分かる。だけどツナにしか心を開かねーのは、ツナへの押し付けにしかなくてねーぞ」

「何言つてやがる!! てめー!」

「だいたい、右腕つてのはボスが一番頼りにする守護者のリーダーじゃねーか? 守護者をまとめて引張ってかなきゃなんねー奴が、そっぽ向いてたんじゃ話にならねえ! 今のお前に右腕の資格はねーよ」

山本の言葉を受け獄寺は今までの自分を振り返った。ツナにしか心を開かず笹川の兄にも山本にも、誰に対しても心を開かなかった。過去の自分のままだったのだ……。

「選手交代だ。わりーな待たせて」

「いやなかなか甘酸っぱくて楽しかったぜ」

余裕かよ……。山本は が球を打ち出す姿勢になると竹刀を變形させ真剣に変えた。そして刀の意味

“斬る”山本は の球を斬るほうを選択した。球は打ち出され不規則に動く。刀を構え斬ろうとした時、横からの強い衝撃に襲われた。山本は倒れこんだ。もちろん、衝撃を加えたのは獄寺だ。

「獄寺っ、おまえ!!」

「感電して死にてーのか!おめーが死んだら10代目が悲しむだろーが!」

「おいおい、ハーファタイムは一回きりだぜ……」

「いつまで寝てやがる山本。連携であいつを叩くぞ」

「ああ、待つてたぜ!!」

獄寺は の言葉を無視し山本と連携を宣言した。山本はやっと獄寺の心が開いたことに嬉しくなりつつ、現状を見た。

……ツナ……

ツナは黒川の家に入った。

「京子ちゃん!!」

「ツナ君!」

「ごめんなさい……。私……」

「気にしないでっ。今みんなが探してたから。あの福瀬君だって僕達よりも先に捜索にでたけど……。未だ連絡がないから……。あの黒川……。さん。もう少し京子ちゃんをかくまってっ」

「そりゃいいけど……」

ツナはそう言い残し外にでた。とにかく獄寺たちの救援に向かうためである。現状では戦闘は避けたいが獄寺・山本ペアが攻撃されてはやむをえない。とにかく並盛神社に急いだ。

・・・並盛神社では依然戦闘が繰り広げられていた・・・

獄寺の「行くぞ」という声を合図に2人は左右に散り攻撃を始めた。山本はボックスの雨燕を出す。燕の背後を突くように飛んदैいく。しかし、それを見破ったを一個の球を燕に打った。燕は攻撃を受け落ちていく。燕に気を取られていたをボム攻撃を撃つ。それを は電磁シールドで防ぐ。その隙に獄寺は予めセットしていたボムを飛ばす。その全ての攻撃をかわすため地面に降りた は山本に襲われる。しかし、ボックスに炎を注入し狐を繰り出す。

「突っ込め山本!!」

「ああ!!」

「そいつは信頼とはねエ。無謀つてもんだ。嵐の守護者の弾も効かないぜ」

「へらず口をいつまでも・・・。ボンゴレを舐めんじゃねえ!!」

獄寺はボムを装填し口を絞らずに撃った。それは炎を飛ばすだけの攻撃だ。

「行け!!山本!!」

「時雨蒼燕流攻式八の型・・・篠突く雨!!」

山本は剣を振りかざし に当たた。 は吹っ飛び倒れた。その後は炎の気配も無ければ起き上がる気配もない。

「やったな」

「バーか。右腕のオレのせいでヒヤツとすることなんてねーんだ」

「アハハハハは!!!」

「何がおかしんだ!!!」

「別に・・・敵の大將倒したって言ったらツナ達驚くだろうな・・・」

しかし、何かの気配を山本は感じた。すると、前方からビリヤードの球が飛んできた。飛んできた攻撃は無傷でかわすものの、木に当たって跳ね返った球が獄寺と山本に直撃する。2人とも倒れる。山本はまともにくらったらしくすぐに倒れたが獄寺はかるうじて片膝立ちになっている。

「そいつの刀が死ぬ気の炎をまとっていたら少しは食らっていたな。さて、気になることが幾つかある。ボンゴレ10代目はいつ生き返ったのかな?そこんとこ口裂いてでも教えてもらわなきゃな」

「てめー!!!」

「さあ、お遊びはお終いだ。だがボンゴレが生きているとしたらこいつはタダ事じゃない。奴が射殺されることは多くの同志が目撃している」

「てめーらよくも!!!許さねえ!!!」

獄寺は残った力を振り絞り絞りボムを銃に装填させ放つ。しかし、その攻撃は交わされ逆に のボックス兵器の狐に攻撃を食らう。雷の炎を帯びた狐の切断力は凄まじく獄寺も服のあちこちが破れ体にも深手を負った。獄寺が倒れたところ はビリヤードの棒で獄寺の喉元に突きつけた。

「なぜ10代目が生きている。そして今何処にいる」

「・・・だれが・・・てめーなんか・・・」

「お前達の付けているリングには見覚えがある。どういう冗談だ？」
なおも首を絞められる獄寺を山本はしないで のビリヤードの棒を
どこごととする。しかし、すでに山本の体力と力は無く雷の炎にやら
れる。山本が倒れたところで獄寺の首を持ち締め上げる。

「そろそろ吐かねーと、取り返しがつかねーぞ」

獄寺は 血の混ざった唾液を噴出す。

「なるほどそうかい」

は獄寺は上に投げビリヤードの棒で叩く。もうすでに獄寺は白目
を向きそつになつてる。

「あばよ」

がそう言い獄寺と山本にとどめを刺そうとしたとき気配を感じた。
すぐに狐を防御モードに切り替える。狐は の横から襲いかかる雷
球を必死に受け止めている。しかし、狐はパワー負けをする。 は
電磁シールドを展開するが、すでに攻撃は終わっていた。

「誰だ！！！」

・・・京子と黒川は・・・

ツナの指示を受け黒川はいまだに京子をかくまっていた。一応、ツ
ナとの再会を果たし一安心した京子は黒川と共にお茶を飲んでいた。
付け加えるが黒川花は10年後の姿である。

「でも、どうして狙われてんのよ」

「それをツナ君たちが解明してるって・・・」

「警察には？」

「この時代を混乱させるのはよくないからって・・・」

「ふーん。本当、沢田って何者なんだろうね・・・？」

「え？」

「ん・何でも無い。それよりアニキからのことづてね。笹川了平は仕事で海外に出張中よ」

「お兄ちゃん、外国にいるの？」

「そう、オカマに会いに・・・」

京子はびっくりした。オカマって、お兄ちゃんは何してるんだろう。でも仕事だから大丈夫だろう。そう思った京子であった。

「これ、アニキの滞在先のホテル。何度か連絡したけどまだ戻ってこないって。これ渡される時に京子に何かあったら沢田に伝えてくれって頼まれたの」

「ツナ君に！」

「そうよ。でもあんたのアニキって用心深いのね。沢田に繋がらな
いときの連絡先を教えていくなんて。さっき沢田がヒバード見つか
ったっていったのも、私がそこに電話したからだと思っ」

「そこ？」

.....

黒川からの連絡があつた1人の人物はヒバードを飛ばし、自身も並盛神社へと向かっていた。

「久しぶりだな．．．並盛」

．．．．．

「入江様大変です！起きてください！」

女の呼びかけに入江正一はベッドから落ち目を覚ました。

「レーダーに新規の精製度A以上のリングは2つ。ボンゴレリングかと．．．」

「なんだって！！来たのか！」

「なんで今まで見つからなかったんだ？いきなり神社に現れて．．．」

「レーダーが故障していたそうです」

「自律した複数のレーダーが同時にかい？」

「人為的な工作と考えるべきでしょう。ブラックスペルの第3部隊は既に全員が並盛に展開しています」

「くそっ！！あの男か！」

入江は壁に思いつきり拳を打ちつけた。

「我々はいかがなさいますか？」

「百蘭サンに連絡しなきゃ．．．。お腹が痛い．．．」

．．．．．

いきなりの横からの攻撃に驚く。同じく力を振り絞り攻撃の発射地点を見る獄寺。もうもうと立ち込める煙の中から姿を現したのは

バンビーザファミリーの福瀬希生と早崎賢だった。獄寺は彼らは京子の捜索のでたんじゃなかったのか、と思いつつ助太刀してくれたことに感謝をした。その後、獄寺も山本同様に気を失い目を閉じた。

「なんだ？弱い者イジメは誰がやってんだあ？」

希生が言葉を発する。は相手の姿を見ていた。

「まったく……。学校ではイジメは卑怯だって習わなかったのか？」

「誰だ！？」

「おっと、失礼。バンビーザファミリー福瀬希生だ」

「同じく早崎賢だ」

「もしかして、ボンゴレも同盟ファミリーの……。これで守護者の撃墜記録を伸ばせる」

希生は声を発する相手の姿に見覚えがあった。金髪のオールバック。ビリヤードの武器にあの面構え……。希生の彼女のほのかと幼馴染の優音を殺したにそっくりだ。

は福瀬希生と名乗る、これも写真より若い人物を見ていた。こいつもおかしい。バンビーザのボスは福瀬希生だが、こいつも行方不明なのに……。が考えていたが、ふと福瀬を見ると体が微かに震えている。

「なんだ？助太刀来たくせにビビってんのか？」

「なんでお前が……。なんでお前が……。生きてんだよー

「！ー！ー！！」

「はっ？」

がわけが分からず福瀬を見る。

「なんでお前が生きてるんだ。なぜ、生きてるのがほのかと優音じゃないんだ……」

は福瀬の体から出ている蒼い炎に驚く。なぜ体から死ぬ気の炎が放出されているんだ。何故だ、あいつは雷属性の攻撃をしているのに……。よく見ると、福瀬の持っている刀は黄色い炎を出している。それも、雷属性の炎の出方だ。雷撃のような炎も……。おかしい……。何もかもがおかしい。

「てめーーーーーが何で生きてんだよーーーーー!!!!!!」

希生はそう叫ぶと刀を片手に3本ずつ持ち に接近する。 もビリヤードの棒に雷属性の雷を纏わせそれを向かえつつ。金属同士がぶつかり合う鈍い音がして両者の攻撃は止まった。希生の刀を が受け止めている。

「DEATH FANG!!!!!!」

標的9

福瀬VS

決着と仲間との合流

「DEATH FANG!!」

希生は罅迫り合いを続けていた所を片手の3本で相手に上から思いっきり振りかざした。相手はすんでのところでそれを受け止め片膝たちの状態で後ろに飛ばされる。

希生は間隔を開ける事なく攻撃を繰り返す。本来の嵐属性の特徴のように……。

は福瀬と名乗るバンビーズのボスの攻撃を防いでいた。攻撃をしたい所だったが、攻撃に転じる隙がなく防御で精一杯だった。にしても、相手の攻撃は激しい。

「MAGNUM STEP!!!」

希生は雷属性の攻撃をひたすらやっている。相手もシールドで防ぐが希生の攻撃の前では意味の無いモノとなっていた。

「いでよ！我がユニコーン！！そして虫達よ！！」

希生はユニコーン、ミヤマクワガタ、オウゴンオニクワガタ、ギラファノコギリクワガタ、オオスズメバチを繰り出す。すべてが雷属性の炎を帯びている。希生は虫達に新しい炎をあげた。

刀に雲の炎を纏わせその刀を虫達に向けて振る。虫達は雲の炎を受け、数を増やしていく。雲属性の特徴の増殖により、八手は群れを組み、クワガタ達は各7匹ずつに増えている。

「なんだ、こいつ……。雷に雲だと……」

「知らないか？コレは俺だけが出来る技だ。並の人間には出来ない」

希生は指で合図をし、虫達を動かす。希生自身は雷ユニコーンにま
たがり相手を目指す。すでに刀は雷属性の炎を帯びている。

は歯噛みする。俺はこんなガキよりも下なのか？ しかし、思い
を振り払い雷狐に新しい炎をあげ、福瀬に向かう。

両者はまた鏝迫り合いを始める。一步も引かない。希生はもう片方
の手で足元に横から攻撃しようとするが宙に飛ばれ外した。

「残念だな……」

「何が？」

「ガハツ!!!」

は口から血を吐き、その場に留まる。

「どう？八手の群れに一齐に刺されるのは？」

「なんだ……。と……」

「いくよ……。クワガタ、この炎に変えてやる」

希生は刀に緑の炎を纏わせ、それを振りかざす。クワガタ達はその
炎を受け顎が緑の炎になる。

「なんだ、その炎……。見たことがねえ……」

「こいつは特殊な炎だ。それより、遺言は無い？」

「なに！」

希生は遺言を聞くまでも無くクワガタ達に命令を下し、相手に噛み付き始める。相手はさらに体のいたるところから血を出し、尚も動けない。八チが相手の動きを封じているのだ。クワガタは根気強く、未だに相手を噛んで離さない。

「ラストだ……」

「CLAZY STORM!!!」

希生は雷ユニコーンの腹を蹴り加速させる。刀には多すぎる雷の炎を纏わせている。希生は相手に最後の一太刀を浴びせた。相手は力無く地面に落ちる。ここに電光の は敗れた。

希生は地面に落ちた相手に歩みよる。確かにこの顔は だ。

「よく、 を倒したな」

「えっ……。 じゃないんですか!」

希生はラルの言葉に衝撃を受ける。今まで戦っていたのが ではない。しかも、 とは誰だ？

「……。それは の兄貴だ。 がまだ小さい時に殺人事件に合つて死んだ」

「嘘だろ……。こいつが じゃないなんて……」

「どうした?」

「 は俺が殺したんだ……。彼女と友達をこいつに殺された復讐としてな……」

「福瀬君! 獄寺君達は!!??」

「沢田か……。山本と獄寺は林の中だ」

「わかった! ありがとう!」

ツナと後に来た雲雀と草壁が林の中に入り獄寺と山本を見つけ担ぐ。

「とにかく、今は怪我人の手当てが最優先だ。話はその後です・・・」

希生は指示を出し、自身は涙ぐむ瞳を拭く。その場は、雲雀と草壁ツナとラルに任せ希生は京子をかえに黒川の家に向かった。京子を無事救出し、アジトに戻る。ユニコーンを使ったため敵に見つかりそうになったが霧のカモフラージュリングでやり過ごした。

.....アジトで.....

獄寺・山本は救護室で手当てを受けている。その間に2人以外のボングレメンバーを除きその他とバンビーザファミリー全員、リポーン、ラルが作戦室らしく所に集まっている。バンビーザの残りのメンバーは作戦中に偶然見つけた。新たに早崎将・本田海星・福坂壘が見つかった。今はラルとリポーン、希生が椅子に座っている。

「福瀬、バンビーザの秘密ってなんだ？あの炎は？」

まずは、肝心の謎の色をした炎の話だ。これはバンビーザを話す上で1番重要ともいえるだろう。

「俺らは本当は大空7属性のリングを後継者ではない。俺らバンビーザファミリーのリングは動物7属性のリングだ」

「動物7属性？」

リポーンが聞き返す。

「ああ。動物7属性は龍・虎・隼・蛇・熊・鷲・鮫の7種類だ。動物7属性。またの名をクレイチャーリングと言う」

「生物リングってどこか？」

「ああ。クレイチャーは英語で生物だ。単体でのリングの強さも前達の持つボンゴレリングより遥かに強い。しかし、動物7属性のボックス兵器は単体では他のボックスとなんら変わりはない。しかし、他の属性の炎も一緒にあげれば大空のボックスより遥かに強いボックスに変わる」

「じゃあ、バンビーズはみんな、動物7属性以外にも属性を持っているのか？」

「ああ。実際の所、複数の波動を持っている。そして俺にはもう一つ特別な波動を持っている」

「特別な波動？」

ボンゴレ側の人たちが口をそろえて言う。

「俺には虫属性の波動も流れている。虫属性の特性は変化。つまり、他の属性の炎を注入することで特性が変わる。お前らも見ただろ？俺がクワガタ達に雲の炎をあげたり、森の炎をあげたり・・・」

「ああ、確かにボックス兵器の炎が変わった。それと森属性は何だ？」

「ああ、すまん。森属性は大地7属性の属性だ。俺もこれについては詳しく分からない。しかし、森属性の特性は“切断”。つまり、切れ味を良くすることが出来る」

「なるほど・・・」

リポーンやラルなどは希生の言った事が理解できている様子だった。しかし、ツナは何を言ってるのかチンプンカンプンな様子だった。まあ、しょうがない。馬鹿は馬鹿なのだ。

「あと、リボーンさんに一つお願いがある。ランボの雷のボンゴレリングを貸して欲しい」

「アホ牛のか？」

「ああ、使わないなら俺に貸してくれ。多分、大丈夫なはずだ」

「……………」

リボーンはしばし考えていた。たしかに馬鹿げている。ボンゴレ守護者のリングを取り上げれば、逆にランボがピンチの時に何も出来ないのだ。まあ、リボーンがダメといえは素直にやめるんだが……。

「わかったぞ。お前にボンゴレリングの雷を貸してやる」

「リボーン！！！！」

ツナとラルが反論した。

「たしかに、ランボからリングを取ればあいつがピンチの時に使えない。しかし、さっきの戦いを見たよな？あの戦いぶり。ランボに使わずのはもつたいない」

「助かるリボーン。では俺の雷のリングをランボに貸してやる。心配するな。Aランクのリングだ」

「Aランク？」

今度はツナが質問してきた。しかし、リングのランクについては知っているはずだ。そこで、ラルに聞いてみる。

「あれ、ラルさん、説明してなかったの？」

「あ……ああ……」

「なんだよ……。ランクはつまり、リング自体の強さに関わる事だ。だから、Dランクのリングを使えば弱くなる。ちなみにボンゴ

レリングはAランク以上。つまりSランクだ。そしてオレ達の持つクレイチャーリングは龍と虎を除きすべてSランクだ。龍と虎はSランク以上だ」

「Sランク以上!!??」

「あ・・・ああ。しかし、そんなに驚かなくても・・・。Sランク以上つてのはボンゴレリングより強いってこと・・・」

「そんな・・・」

「何、心配するな。お前の大空のリングでも充分勝てる。それより、これからボンゴレのメンバーに修行をしてもらわないとな。さっきの戦いでは勝てない。それぞれの修行相手にはバンビーザのメンバーが付いていいか？」

「ちよつと待て！」

ラルが声を荒げ反抗?してくる。

「お前らがやるより俺がやった方がいい。俺がお前らよりは実践を経験している」

「わりーけど、俺は実践を想定した修行をしたいと思っている。特にツナにはボンゴレの超直感がある。戦いの中で何かを見つけるはずだ。ラルさんは俺には勝てない・・・」

「じゃあ、福瀬。ツナ達の事は任せたぞ」

「おう!!」

こうしてバンビーザがボンゴレの修行につくことになった。

希生はこの修行を通してボンゴレの面子が希生達と戦う事に邪魔にならないかを知りたかった。ようは、こいつらに後ろを任せられるかのテストも入ってるという事だ。

希生はすでにバンビーザの後ろにボンゴレが付く、という事になっている。しかし、本当が逆だが。

「じゃあ、俺は山本とツナの修行を見てやる。他は後で言う。雲雀はお好きなようにしてください。俺からは何も・・・」

いつのまにか雲雀さんが来ていた。隣には草壁さんもいる。

「じゃあ、僕と戦つてよ・・・」

「言つとくが、お前は俺に勝てない。絶対に・・・」

仕方なく希生VS雲雀の戦いが始まった。ルールはボックス禁止。それだけ。みんなはトレーニングルームに移動した。

「じゃあ、行くよ」

雲雀はボックスからトンファーを出した。雲雀はボックスの中にトンファーを入れてるためにそれだけは許可したのだ。

両者の準備が整ったところでリボンが開始の合図をする。と同時に戦闘が始まったが・・・

「ねえ・・・君・・・僕に傷を付けるとどうなるか分かる？」

「やられたくせに何強気なことを・・・。何度やっても結果は同じ。雲雀さんは僕に勝てない」

雲雀はトンファーで攻撃するも、交わされ逆に懐に強大な攻撃をくらって壁に吹き飛んだ。

トレーニングルームの端でこの戦闘を見ていたボンゴレの人は・・・

「えっ、福瀬君強すぎ。あの雲雀さんを一撃で・・・」

「福瀬希生とは一体・・・？」

「10代目!」

「獄寺君、山本君まで・・・」

2人はよろよろしながらも、トレーニングルームに来た。本当は寝ていた方が良いのだが、そんな事を聞くような人ではない。話は早くもさつき起こった爆発音になった。

「それより、さっきの爆発音は?」

「福瀬君が雲雀さんと戦って勝ったんだよ。無傷で・・・」

「無傷ですか?」

「うん」

山本・獄寺は驚いた様子だった。いや、二人だけではない。リポーンもラルも驚いていた。

ツナは少し元気をなくしている様子だった。そうだろう。これから福瀬に鍛えられるのだから・・・。

この戦いは福瀬の勝ちだった。雲雀さんはまだやりたそうな顔だったが、福瀬がそくさと帰ってしまったので終わった。怒りの矛先をツナ達に向けるかとも思ったが、やはり雲雀さんはムツとした顔でトレーニングルームを後にした。

ツナ達もトレーニングルームを出た。廊下を歩いていると後ろから聞き覚えのある声がした。

「リポーン!」

「ツナ兄!」

そう。新しくアジトに来たのは10年後の姿のフウ太とビアンキだった。フウ太はツナよりも背が高い事に喜んでいて。ビアンキは愛しのリポーンに会えて、すぐに抱きついたが・・・。

「期待できそうだな。こいつらも新しい情報を持ち帰ったらしい」
「雲雀さんも何か知ってそうだし」

一行は部屋に移動し、会議に入った。今日は戦いに会議に会議だ。
疲れる。

「敵の日本支部のアジトの場所を突き止めたの」

「場所は並盛ショッピングモールの地下。その先に入江正一はいる」
「このヤバイ状況の中を生き延びて日本支部の入江正一を倒せるかどうかは、お前達が短時間でどれだけ強くなれるかにかかっている」
「。。。バンビーザの連中が行けばすぐに終わると思うけどな。。。」

ツナの中に何か芽生える。そうなのだ。この作戦を成功させて入江正一を倒さない限りツナ達は過去には帰れないのだ。やるしかない。

「そうだね。ありがとう、みんな」

ツナがそう決意を言ったとき、部屋のドアが開き京子、ハル、ランボ、イーピンが入ってきた。
メンバーは再会を喜んだ。

・・・・・・・・・・13日後・・・・・・・・

今日から山本と獄寺も参加する。

「では、今日から守護者の本格的な修行を開始する。では、分担だ」

希生は淡々と修行メンバーを読み上げた。メンバーは次の通りであ

る。

沢田綱吉	・・・	福瀬希生
獄寺隼人	・・・	早崎賢
山本武	・・・	福瀬希生、リボーン
ランボ	・・・	福坂壘

「ランボっているのか？」

「知らない・・・」

「ねえ、僕は？」

やってきたのは雲雀だ。すでにトンファーは出している。

「雲雀もか・・・。じゃあ、お前は早崎将だ」

「じゃあ、まずは一回戦おう・・・」

「ツナ、お前は修行を再開するぞ。まず死ぬ気モードになれ」

「う・・・うん」

「じゃあ、リボーンさん。僕がいない間は頼みますよ！」

「任せろ」

そして、各自修行が始まった。

希生とツナのトレーニングルームに残った。もちろん、他のメンバーはそれぞれの部屋に散って修行を開始している。獄寺と賢は10年後の獄寺が作った特注で作った部屋、嵐ルーム（ストームルーム）にビアンキと共に修行を開始しているはず？

山本はリボンと共にどっかにいった。希生の詳細な場所は聞いていない。ランボと福坂は修行に行ったかと思えば、一緒に遊んでいる。

「ツナ、俺はお前の才能をこじ開ける。覚悟はいいな？」

「実際、ここまで出来ている」

「・・・気を抜けば死ぬ・・・」

「・・・・・・・・！！！！・・・」

希生はツナにボックスを開けるそぶりを見せずにいきなりボックス兵器を繰り出した。それをツナは受け止めるが、次第にツナがボックス兵器によって覆い隠されていく。このボックスは強化球態といつて晴属性の炎をまとっている。ツナはやがて姿が見えなくなる。完全に球態の中に入ってしまったのだ。

「ツナ、この中から出て来い。この球態の中は酸素が次第に切れしていく。早く脱出しないとツナ自身が危険な状態になるぞ」

「え・・・・・・・・！！」

球態の中にあると言っても互いの声は聞こえる。と言っても、この球態を破れる力は今のツナには無いに等しい。この球態は絶対的遮断力を持った晴の炎を帯びている密閉球態。中からこの壁を破ろうとしても晴の炎の特徴である「活性」によって壁が修復される。一

撃で破壊しなければならないのだ。

.....

山本はリボーンに言われた通りに地下10階の部屋に入った。エレベーターを出ると、その部屋は暗く壁は金属で出来てはいるが、所々に木が使われている和風の雰囲気がある部屋だ。

「何だよ真つ暗だ。電気スイッチどこだ？」

山本は電気スイッチを探しながら奥に進む。しかし、何か殺気を感じたらしく変形刀を構える。そして、何処からの殺気だか目で探す。

「この殺気に気づくとは……。また腕をあげたな山本武」

何処からか声が聞こえる。確かにこの声の主からの殺気だ。

「誰だ！！！！」

「だが、まだ時雨金時を使いこなせてねーな。リングでそいつの力を引き出せたら、この時代に剣帝にも負けねーってのは……。10年後のお前が言ってたんだぞ」

「あつ！！！！」

山本はやっと声の主に気づく。

「こつ、小僧！！！！」

そう。この山本が感じていた殺気と声の主はリボーンだったのだ。リボーンは光を正面からあて、壁に大きい姿のリボーンを映してい

ただ。しかし、小僧ながら殺気はスクアーロを超えている。

「時雨金時にボンゴリングの力が合わさればお前はボンゴレ唯一の存在となる。それは入江を倒すのにも必要になるはずだ。そのためなら本当のオレを見せてやってもいいと思ってるんだ」

.....

ツナは依然、このびくともしない壁に攻撃を繰り返していた。外では希生とラルはいつ球態が壊れるかを見ている。希生はあくびまでしている。そろそろ球態の酸素も切れる頃になっている。

ダメだ.....。びくともしない.....。だが、かすかに壁の装甲が溶かされた部分がある。リングの炎の周辺だ。恐らくこいつの弱点は.....より純度の高い炎。だが、どうすれば.....。この球態をうち破るだけの巨大な純度の炎を.....。こんなところで死ぬわけには.....。どうすればいい？ まだ覚悟が足りないのか.....。

ツナの死ぬ気モードが限界になり、額にあった炎も消える。そのまま倒れこみ、目を開ける。視線の先にはボンゴレリングの大空のリングがある。

これ以上.....何が望みなんだ.....何が.....

そのまま目を閉じる。何もかも終わりに思ったその時リングが光だした。そしてツナはリングに刻まれた歴史を見る。

【殺れ。報復せよ。嵌めろ。根絶やせ】

なんだ……。これは……。頭に直接流れ込んでくる……

【ボンゴレの業……。抹殺、復讐、裏切り、あくなき権力の追求……。マフィアボンゴレの血塗られた歴史だ。大空のボンゴレリングを持つ者よ。貴様に覚悟はあろうな……。この業を引き継ぐ覚悟が】

「やめろおおおおおおお!!!」

ツナの声がトレーニングルーム中に響きわたる。

「希生、酸素量が限界だ。これでは無駄死以外の何物でもない。直ちに修行を中止すべきだ!!!」

「ラルさん。ここからが沢田綱吉が変われるか変わらないかの分岐点です。ここで終わったら意味がありません。まだ、終わりません」

【目をそらすな。これはボンゴレを継ぐ者の宿命。偉大なる力が欲しければ偉大なる歴史を継承する覚悟が必要なのだ】

「いやだ……。みんなを守るためなら何だって出来ると思った……。でも、こんな……。こんな力ならオレは要らない!!! オレがボンゴレリングをぶっ壊してやる!!!」

「よく言ったなツナ……。もう少しだ……。頑張れ」

「希生!!!」

「ラルさんは黙ってて。ツナの修行は俺がやるんだ」

何言っただ俺……。みんな、ごめん……

そのままツナは倒れこむ。しかし、誰かに支えられて目を覚ます。

「9代目!!!」

そして、9代目が指指す方を見ると歴代のボンゴレボスが居た。ボンゴレの紋章を囲むようにして……。そして、1番奥に椅子に座っている男がいる。そう、ボンゴレI世だ。ボンゴレフリーモ

【貴様の覚悟、しかと受け取った】

「何これ・・・夢？ 幻覚？」

『E' la nostra incisiva sulla
neilio (ボンゴレリングに刻まれし我らの時間)』

「栄えるもの滅びるもの好きにせよ。ボンゴレX世^{デーチモ}」

「!!!!」

「お前を待っていた。ボンゴレの証をここに継承する」

そして、I世は消え光になる。そして、ツナの視界が眩しくなると球態の壁が壊れる。

「遂に突破したか・・・」

球態の残骸の中から片膝をついた状態でツナが現れる。そして、立ち上がり一回手を握り構える。

「まさか、試練の末の形態がこれだとはな・・・」

「ラルさん驚いた？ でも、ここからが本番だよ・・・。まあ、見てて」

そうやって希生は刀の幻覚を解き『龍の爪』が姿を現す。一見、普通の刀に見えるがこの刀には龍が纏っているという刀だ。希生の家の家宝だ。

「どうだ、新しくなったXグロブver・V・Rの感じは？」

イクスグロブバージョンボンゴレリング

「不思議な炎だ。頼りなさげだけど、底から溢れ出てくるような・・・」
「そうか・・・。じゃあ、その生まれ変わったグローブで手合わせ願おうか」
「ああ」

そして、ツナはXグローブを構え、希生は龍の爪の一本を抜き構える。そしてツナが動く。一瞬にして希生の視界から消える。しかし、希生は走り出しジャンプする。何かに掴んだと思えば、それはツナの頭だった。しかし、頭を持ち投げるのではなく頭を利用しツナの突進を回避したのだ。ツナはそのまま、壁に向かっていく。急制動をかけ壁に止まる。ツナがいる場所は壁がえぐられている。

「・・・つうつ・・・」

そして、また希生に向かって突進する。

「なんて炎だ！！ 希生動け！！」
「なんで・・・」

希生は動かずツナが来るのを待つ。そしてツナが希生のすぐ近くに来た時希生が動く。制動をかけられず突進してくるツナの腹部に刀の柄で突く。そのまま、上空に飛ばされる。ツナが気づく頃には前方に希生がいる。しかも、刀を構えている。

やられる・・・

ツナは両手を前に出し、炎をだす。止まるかと思ったがそのまま床に激突する。ツナが激突すると、煙が出て床がえぐられている。

「じ……自爆……？」

「やっぱり……。そのグローブは随分ピーキーな特性らしいな……」

「ピーキー？」

「ツナの顔を見る限り、炎を思い通りに出せていない様子だな。そうだろツナ？」

「う……うん。言う事を聞いてくれないっていうか……。自分の出したい炎を調節できない」

「先代達がツナに授けた新兵器は飛んだじゃじゃ馬のようだな……」

……

「くそっ！！ こつちにもいやがる！！」

獄寺は嵐の炎で覆われている物体から逃げていた。獄寺は髑髏の炎放射器を腕に装備して、嵐の炎の物体を撃つ。すると、嵐の炎が吹き飛び、中から物体が姿を現した。

「サソリ！！！！」

「そうよ。この子達が私のお気に入り。逃げられなかったわね」

「獄寺君。ちゃんと修行してもらいます」

「嵐サソリ（スコルピオーネ・デイ・テンペスタ）。ありていに言えば移動火炎砲台よ」

このサソリ達はビアンキのボックス兵器だったのだ。獄寺は賢と共に修行をしに部屋に向かったが、部屋に入ったとたん倒れた。理由は簡単でビアンキを見たからだ。その後、目を覚ますがビアンキが修行を担当すると聞き逃げ出てきたのだ。しかし、簡単に逃がしてもらえないわけもなくこのボックス兵器に逃走を邪魔されていたの

だ。

「火炎砲台？ つーか、また動物のボックスかよ！」

「生物を模したボックスが多いには当然のことなの。ボックスのルーツをあなたは知らないわね」

「！！」

「ボックスと言うのは自然の中から兵器を作れないかと4世紀前の学者達が研究したの。そして1人の学者が343編の設計書を書きこれが元になっているの。しかし、書いてあったのは当時の技術力じゃ作れないものばかり。ただの空論になったの。3人の発明家が現れるまでは……」 以下省略。

結局、獄寺はビアンキと賢と共に獄寺専用トレーニングルームに入った。そこは砂嵐が吹き荒れ、視界も確保できない状態の所だ。もちろん、これも人工の場所だ。

「くそ！ 前が見えねえ。何だよこりゃ！！」

「10年後の隼人が特注で作った部屋よ」

「オレが！！??」

「足場も視界も悪い砂漠の嵐を再現したの。そこにいるのは私のサソリも20匹いるわ」

「修行は1分以内にサソリを全滅させること。いい？ これは希生君とビアンキさんで考えた修行だからしっかりやってね。じゃあ、

スタート！！ 幸いにも10年後の獄寺君はSYSTEMA・C・

A・Iをほとんど残していったみたいだからそれも使って頑張つてね」

獄寺は上空から落ちてきたバックの中をあける。中には、髑髏の装飾があるボックスがたくさん入っていた。多分、これを使ってサソリを倒せという修行だろう……。

.....

「いまだ信じられん・・・」

「だが、アフエランドラ隊からの報告書によれば信憑性は高い」

「第一ジョークで全17部隊隊長ミーティングなどやらんでしよう」

「しかし・・・いささか・・・突飛すぎやしませんかね・・・」

過去のボンゴレファミリアが

『この時代にタイムトラベルなど・・・』

「でも正ちゃんが頑張ってくれたから・・・」

そう。ここではミルフィオーレファミリアと呼ばれるボンゴレを狙うファミリアの部隊長ミーティングが行われていた。もちろん、ボスの百蘭。そして、入江正一も参加している。

「既成事実を示したらずくに教えようと思ってたんだ。本当だよ
二・・・」

「まだわからない事があります。その技術を持ってしてなぜボンゴレなのです？」

「彼らを一度消したぐらいじゃ物足りませんか？ ボス」

「まるで分かっていないねえ」

「何？」

「この計画の狙いは幼いボンゴレファミリアなんてカモではなく、むしろ奴らの背負ってるねぎの方でしょう・・・」

「ネギ？」

「リング、リング、ボンゴレリング」

「ボンゴレリング！！」

「さすがグロ君。鋭いなあ・・・」

グロと呼ばれ、ボンゴレリングの事を話したこの男。グロ・キシニ

ア。めがねをかけ第一印象が悪そうな顔をしている、マーレリング
雨属性のマーレリング所持者だ。

「たしかに最高峰のリングとしての魅力はわかるが……。すでに
我々は同等の力を持つマーレリングがあるのですし……」

「ま……まさか!」

「分かってくれたみたいだね……。そ……。僕が欲しいのは究
極権力の鍵。そして僕が神になれる力がほしい。73。トゥリニセ
ツテだよ……」

山本は時雨金時に炎を灯し、刀に変形させる。

「よし、いいぞ。さすが飲み込みが早いな・・・」

「ふーっ」

「そんじゃ、こいつはどーだ？」

リポーンは銃を取り出す。山本は銃から放たれた弾丸を刀で切るが・・・。弾丸は山本に命中する。しかし、それは弾丸では無く、ペイント弾だった。結局、時雨金時は普通の竹刀に戻った。

「わたつ！ 竹刀に戻っちまった・・・」

「炎を灯しての時雨蒼燕流は話になんねーな。これじゃ、最終試験である、福瀬との試合には勝てないな・・・」

「最終試験って・・・。福瀬と試合か？」

「ああ。俺は、お前を最終試験で福瀬に勝つように指導する。それが、福瀬から俺への命令だ」

「じゃあ、俺が、福瀬に勝たないと修行の意味がないのか？」

「まあ、そういうことになる」

.....

「失礼します」

ドアを開けて、レオ君が入ってきた。百蘭の秘書的役割をする人物である。

「第11ヴィオラ隊より連絡が入りました。B級以下の4名が何物かによって暗殺されましたとのこと。ありえない状況の中での暗殺なので今、調査を急いでいます」

「そろそろ、モグラが動きだす頃合か・・・」

「モグラ？」

「ボンゴレ特殊暗殺部隊ヴァリアー」

ボンゴレ特殊暗殺部隊、通称「ヴァリアー」。沢田綱吉率いる次期ボンゴレファミリーとリング争奪戦を行った部隊だ。彼らもまた、この時代ではボンゴレの部隊とした動いている。が、本人達にその意志があるのかは不明だが・・・。

「レオ君なら第11部隊と第8部隊のどっちを日本の増援に送る？」

「じ・・・自分でありますか？ ヴァリアーが相手では11部隊もすぐには動けないかと・・・」

「じゃあ、第8グリチネ隊に日本に向かうように伝えてくれる？」

「は！ では入江様にも・・・」

「いや、正ちゃんにはいいや。第8部隊の隊長みたいなタイプは嫌いだから・・・。下種なのに強い、グロ・キシニアみたいな男は・・・」

.....

ツナはトイレにいた。ガラスに映る自分を見ながら、先日起こった、あの現象を思いだしていた。

「歴代ボンゴレ……。だって、考えてみたら、みんな死んでるし……」

ツナはトイレから出て、廊下に出た。

「ツナ、どいてくれ！」

「？」

その直後、ツナの頭に強い衝撃を走る。目ん球も飛び出しそうになりそうだった。

「や・山本！」

「わりい！ あとでちゃんと詫びるから！！」

そう言つて、山本とボックス兵器である雨燕は走り&飛びさつていった。そして、立ち上がるうとするが、また、頭に衝撃が走る。

今度は、リボンである。しかし、きている服はテニスの服だ。そして、リボンも向こうにさつて行った時、リボンの懐から一枚の紙が落ちた。それをツナは拾って見ると……

「女子マネ的、軽〜〜い準備運動。軽いランニング、42km。

軽い腕立て、100×100回。軽い腹筋、100×100回……

」

「んなー！ー！！！！ 準備運動がこれー！ー！！ あの2人の修行はハイパースパルタ体育会系！？」

「負けてられないな……」

ツナは後ろから殺気を感じた。それと同時に手に持っていたリボン

ンのメモ書きも取られた。

「オレ達は福瀬の修行時間以外はVer・V・Rの強化だ！」

「オレ達って……」

そう、メモ書きを取ったのも、殺気の主もラル・ミルチだったのだ。ラルは燃えており、以前のような怖い感じではなく、鬼のようへと変わっていた。しかも、変なオーラの物もでている。

「Ver・V・Rの新しい必殺技なり戦略を手に入れるんだ！」

「だから、なんでー！ー!? ラルさん指導降りるっていったのに
――！！！！！」

……

「恭さん。マークしていた例の男が動きだしましたとの連絡がイタ
リアから……」

「ここへ、来るのかい？」

「まだわかりませんが、油断は禁物。この情報は沢田側にも提供す
べきかと……」

「任せるよ。たしか、あれの写真があつたはずだ」

「へい。ヒバードの撮影に成功したものが一枚」

草壁が言ったとき、雲雀の頭に小さな黄色い鳥が舞い降りた。これ
が、通称「ヒバード」。以前、バーズが飼っていた鳥だが、雲雀の
鳥になっている。経緯は不明だが……。

……

古びれた建物の中に1人の女性が座っていた。以前のような、場所ではない。壁は壊れ、窓ガラスは無くなっており、カーテンもソファアの壊れている。そして、あの男達もいない。この女性一人しかいないのだ。

リングには、粘着しているものがついており、使える状態ではない。彼女もまた過去からやってきたのだ。背後から爆弾にあたりここに来た。しかし、誰もいない。何かが違うのだ……。

足音が聞える。

「犬？」

今はいない仲間の名前を呼ぶ。女性の足者には鳥の羽が落ちる。

「まさか、再び相見えるのが10年前の姿とはな……。だが、この情報がガセではなかったことは喜ばしい。あった、あーっつた、本当にあった、クローム髑髏、試食会場」

女性とは、クローム髑髏の事である。そして、今いる場所は黒曜ランド。

「誰？」

「グロ・キシニアだ。その様子だとタイムトラベルを理解していない……。さしずめ不思議の国に迷いこんだアリスというところだな……。しかし、10年前がこうもガキとは、熟したクロームの方が趣味だが……。どれ」

そう言うと、グロと名乗る人物はクロームに目にも留まらぬ速さで近づく。そして、右腕を掴みあげる。

「何かで固めてあるのか？ こいつのせいでリーダーに反応がないのだな……。だが、間違いなさそうだ。リングリング、ボンゴレリーーリング！」
「痛いっ！」

クロームは強引に男の腕を解き逃れる。しかし、男は逃れたクロームを尚もおってくる。

「男に触られて嬉しいようだな。ほおの赤みが欲情を隠しきれていないぞ」

「……？ 生まれつき」

「ヒッ！！」

その声と一緒に右目の上の血管が膨れあがる。クロームはバックから三又槍を出す。

「出てって……。ここは私達の場所。ここには骸様と犬と千種がかえってくるの」

「いいぞ。やはりお前は上等だ」

「？」

「いいか少女クローム。その骸様は私に敗れた」
「うそ！」

クロームは槍を振りかざすがやすやすと避けられる。

「さあ、もっとその鈴の音のような声を奏でよ！」

グロの攻撃に当たりクロームは吹き飛ぶ。クロームは態勢を立て直し、霧の幻術を展開する。地上から出てくる火柱である。

「幻術とは脳にありもしない事を思いこませでつちあげる技だったな……。こんな子供だましが通用するか……。技の全てがこんな具合だ。簡単にひねってやったものだぞ。お前の体から実体化した六道骸など私の誇る雨フクロウに手も足も出ず、やられる様は……。それは無様だった」

「うそ！ 骸様は負けない！」

「お前の知識は10年前で止まっているようだな……。よからうを見せてやる。この時代の魔法を」

グロはボックスからフクロウを出す。フクロウはクロームに向かって突進をし結局はクロームの火柱を消されてしまった。

「これはリアルだぞ……」

「雨の属性のボックスの特徴は鎮静。いよいよ、いただく時間だな。リングとお前と……」

「どうかかな？」

「何！」

誰かの声でグロはクロームから視線を外す。その隙に誰かの声の主達はクロームを救出する。

「大丈夫か？ 怪我は？」

「あなたは？ クロームさん。いや、ボンゴレの仲間です。だから、安心してください」

1人の男がクロームを抱え話している間に、もう1人の男が銃をボックスから取り出し、グロの持っている雨フクロウのボックスを手から弾く。

「生憎だが、頂かれるのはグロ・キシニア。お前だ」

声の主達2人はクロームを抱えたままグロの前に姿を現す。

「お前達は???」

「バンビーザファミリー。早崎将」

「同じく長田敬介だ」

「バンビーザファミリー……。あの、マフィア界の最強のファミリー……。この時代のボンゴレファミリーと戦って傷一つ付かなかった……。」

「バンビーザって、未来じゃ、かなり強いらしいな」

「つべこべ言っていないで、あの変な奴を倒すぞ」

「ああ」

将は抱えていたクロームを下ろし、自身もボツクスから武器を出す。将の武器は自転車の車輪に鎖を巻きつけ、振り回す武器だ。長田の武器は銃。チャージした死ぬ気の炎を発射する武器だ。

「つじや、行くか！」

「あ。クロームさんはこの部屋から出て、どっかに隠れて！ 後で迎えに行くから！」

そういわれたクロームは部屋を飛び出し、昔、犬が作った非常用の隠れ家に入り身を隠す。

一方、長田&早崎はグロの戦っていた。近距離の将の武器と遠距離の長田の銃の連携攻撃でグロは次第に追い詰められていく。

.....

『眠ってはいけませんよ……。かわいいクローム』

「骸様！？ どこ？」

『いいえ、ここにいますよ。さつきからお前の後ろに・・・』
「あ・・・」

振り返ると、そこにいたのはグロのボックス兵器である雨フクロウがいる。今頃、グロはびっくりしているであろう。自分のボックス兵器がフラッと何処かに行ってしまったのだから・・・。
クロームはそのフクロウを見つめる。すると、右目が徐々に割れていく。そして、遂に右目が割れて「六」の文字が浮かんでいる目になる。

「・・・ムク・・・ロウ・・・」

「ええい、待て！ 何処に行きやがる！！」

その時、近くに仲間と名乗った人物の声があった。クロームは正気に戻りあたりを見る。すると、部屋のドアが飛ばされ、グロが入ってきた。その後にはバンビーザの2人が続いてくる。

『さあ、いきますよ。クローム』

「んん・・・？」

グロはクロームがずっとフクロウを見ていることに疑問を持つ。そして、すぐ隣に飛んでいるフクロウに異変を感じ振り返る。すると、雨フクロウのまもっていた雨の炎が変わり藍色に変わっていく。つまり、霧属性の炎が変わったのだ。

「霧の属性に・・・」

「変わった。しかも、目が・・・」

「確かに、目が前に見た骸の目をしている」

霧属性に変わった、フクロウがグロに突進を仕掛ける。それと同時にバンビーザの2人はグロへの攻撃を再開させる。その際にクロームはまた別の部屋へと逃れる。

「き！ 貴様！！！」

「眸に宿る六の文字！ 六道骸なのか！？」

「フ……クフフフ。君の状況把握の早さは一目置くのに値しますよ。グロ・キシニア」

「もしや前回の戦闘で……」

「クフフフそうです。あなたのフクロウに少し細工をさせていただけでしたよ」

ムクロウがグロに攻撃を再開するが、いとも簡単に弾き返される。その隙に長田が銃を打ち込む。よろけた瞬間に将の自転車のタイヤから出てきた刃でグロを攻撃する。

しかし、グロは態勢を早く立て直し、またしても構える。将の武器は変形式で車輪のタイヤ部には三角形をした刃が仕込まれている。車輪が回転することで刃が出てくる。そして、車輪から鎖を外せば手に持って回すことも出来る。近・中距離に対応できる武器だ。

「ちい！ まだ、倒れないのかよ！」

「教えてやるう。トップランクであるAランク以上の6甲花。その中でもホワイトスペル3名には、百蘭殿よりメインボックスとサブボックスが授けられているのだ。貴様のその体はサブボックスのそれだ。とるに足りない相手に使う通常兵器といえる。だが、私の真の力はこのメインボックス……」

グロの足元から吸盤のついた赤い何かが出てくる。

「雨巨大イカにある!!!」

「おおー！ー！ 随分とデカイこと！」

「でかつ！」

「つて敬介！ オレ達もボックス兵器で行くぜ！」

「あいよ！」

敬介はリングに灰グレーの炎を共にボックスに注入する。将は黄色と黒の混ざった変な色の炎をボックスに注入する。

「いでよ！ 凶暴鮫!!!」

「出て来い！ 空を風のように飛び回る鳥 隼!!!」

2人は鮫と隼のボックス兵器をだす。ちなみに、長田が鮫で将が隼である。

「ふん！ 所詮貴様らなどこの雨巨大イカの前には手も足も出ない」

「ほれ」

長田がイカに向かって足と手を出す。

「ほら。手も足も出たぜ！」

「ヒッ！...！」

またしても、右目の上の血管が膨れる。

『クローム。お前の信じるものはなんですか？』

クロームはムクロウの問いかけに胸の中で考える。そして、長田と将vsグロの戦いが再開された。しかし、2体のボックス兵器の連携技で雨イカは封じ込まれ、グロ自身も2人の攻撃に手をとられ身

動きできな状況だ。

やっとの事で、長田と将、隼と鮫は敵の動きを封じ込めることに成功する。

「クロームさん！」

「今だ！！ 攻撃を！！！」

クロームはコクツと頷き、槍を回転させる。さっきムクロウに問われた事を思いだして。

「強力な術です。これなら僕も遊べそうだ。少々懐かしいですがね・

・・・」

「骸様・・・犬、千種・・・・・・・・」

目の前に現れたのは骸、犬、千種の3人だ。そして、骸たち3人は動きの止まっているグロにファイナルアタックを仕掛ける。長田が雨のリングの力でこの部屋の状態を水溜りのような場所に変える。骸は水柱を立ててグロに接近する。骸は水柱の中に消え、骸だけに気を取られていたため、他の水柱からはなられた毒針に対処出来ずにまともに腹に食らう。腹には針が刺さっている。そして、最後に骸が水柱の中から姿を現す。それと同時に長田と将はグロから離れる。そして、2人も武器を構える。骸の槍がグロに当たった瞬間、長田は最大まで死ぬ気の炎をチャージした銃のトリガーを引く。将は車輪を回転させてグロに投げつける。

爆発音と共に部屋は煙と水の蒸気に埋まった。長田と将はその中から倒れているクロームとムクロウ、それから、ムクロウのボックス、そして、グロの持っていた雨のマーレリングを回収し急いで黒曜ランドを後にした・・・・・・・・」

入江正一は自身の研究室である場所で資料とパソコンに目を通して悩んでいた。

「間違いない……。また、過去から誰か来てる……」

一体何処にいるんだ？ 何故見つからない？ そろそろ、ボンゴレの連中を見つけないと百蘭サンだって……

「やはり、ここでしたか入江様」

「上着は肌身離さずお持ちください。非情連絡無線が使えません」

「君達ノックくらい……」

「しました。報告です。第8グリチネ隊長グロ・キシニア殿が重傷です。グロ殿は単独で黒曜ランドに向かったようです。記録装置によるとリングを使用しての戦闘があった模様。グロ殿のサブボックスは発見されず、メインボックスは大破。しかも悪いことに雨のマーレリングが発見されませんでした。相手側がマーレリングを持ち帰ったと考えられます」

「一体どういうことだ！ 何があったんだ！」

『聞いた正ちゃん！！！！』

「わああ！！！！」

パソコンの画面が変わり、百蘭からの通信が入った。画面いっぱい

に百蘭の顔が写されている。

『グロ君がやられたって聞いたなら正チャンどんな顔するかなと思っ
て抜き打ちコール!!』

「百蘭さん!! ノーマル回線じゃ傍受されますよ!」

『そんなときは回線開きっぱなしの正チャンの責任ってことで!』

「あなたって人は!!」

「っていうか、どうして黒曜ランドの事、僕には教えてくれなかつ
たんですか!」

『だって僕も知らなかつたんだもん』

「えっ!」

その後、百蘭と話した後、ノーマル回線は危険ということで通信を
切った。続けて起こる事態に正一は頭を抱えていた。も勝手な行
動をしてやられて帰ってきた。幸いにもマーレリングは無事だつた
が、今回は違う。1番重要なマーレリングが何者かによってとられ
たのだ。

「とにかくグロ・キシニアと面会する」

「グロ殿は医務室に運ばれましたが重傷でまだ意識が・・・」

「構うもんか!!」

.....

「どうだ?」

「画像データのようですね。もうすぐです」

「でもよ・・・暗殺部隊といえば・・・あの人達しか・・・」

「おっ、いけそうですよ。やはり、暗号コードもボンゴレのもので
す。再生します」

ジャンニーニがパソコンのエンターボタンを押し、ビデオを再生する。

『ヴおおおおおおおい！！！！！！！！！！』

そこにいた一同。そして、廊下にいたランボ、イーピン、フウ太。そしてそして洗濯物をしていた京子とハルまでもが、その声の確かさに驚いた。ラルに居たつては、目ん球がひん剥いている。

『首の皮は繋がってるかあ！？ クソミソカスどもお！！！！』

『出やがった……』

『じゅ……10年後の……』

『スクアアロ！！！！』

『ボリユームを下げる！！』

『これでも、随分低いのですがねえ……』

『いいかあ？ クソガキどもお！ 今はそこを動くんじゃねえ！！ 外に新しいリングの反応があつたとしてもだあ！！』

『じつとしてりゃ、わっかりやすい指示があるから。それまでいい子にしてろつてことな！ お子様達』

『ナイフ野郎！！！！』

『ヴおおおい！！ てめー何しに来た！！』

『王子ヒマだし……。ちやちやいね』

『口出すと、ぶっ殺すぞお！！』

『やってみ』

『ヴおおおい！！！！！！！！！！』

そして、喧嘩が始まった。そして、最後にスクアーロが出てきた。

『また、この世で会えるといいなあ！！　それまで生きてみるお！』

そして、ビデオは終わった。ほとんど意味の無いことをじゃべって・。。。

「わかりやすい指示ってなんだろう？」

「どーやら、あの方のようですよ。イタリア帰りの……」

「笹川了平　推参！！！」

「芝生！」

「お兄さん！」

「それにクローム髑髏……。それから将君と敬介君！？」

ツナ達の前に姿を現したのが了平とクローム髑髏、そして将と長田だった。ちなみに了平は10年後の姿である。

「将と長田には、俺が指示を出した。そして、黒曜ランドに向かわせた」

「希生君！！！！????」

「ツナ。やはり、黒曜ランドにはミルフィオーレの第8部隊隊長であるグロ・キシニアが単身黒曜ランドに乗り込んできた。その後で、長田と将。それからクロームの出した有幻覚の骸、犬、千種と共にグロを倒した。それから、骸はこのフクロウに憑依している。どうやら骸はグロのボックス兵器に憑依していたらしい。あと、これがグロの使っていたリングだ。グロ・キシニアはミルフィオーレの守護者でもある。そうだとすると、これは雨のマーレリングだ」

希生は淡々と長田達が行った戦闘の事などをツナ達に告げる。

・・・・・・・・・・・・・・・・

希生はツナ達のいる部屋を抜け出すと、一直線にクロームのいる医務室にむかった。部屋にはビアンキがクロームの手当てをしていた。

「ビアンキさん……」

「福瀬君……。なにかようでも？」

「はい。クロームさんは大丈夫かと思って……」

「ええ。外傷は少ないけど、栄養面の方が問題ね。この子、こつち来てから何も食べてないようなの」

「そうですか……」

ビアンキは部屋を後にした。希生はビアンキが完全にいなくなったのを確認すると、クロームのバツクの中身を見た。イタリアの語学の本や、ノート、ペンが入っている。しかし、何か不気味な物が入っていた。希生はそれをバツクから取り出してよく見てみる。

「発信機？ やっぱり……。やはり、グロ・キシニアはやるな……」

希生はそう言うと、発信機だけを持って部屋を後にした。勿論、今潰してしまうと敵に見つかるとはかもしれないので、ひとまずポケットにしまった。そして、ツナ達のいる部屋に戻っていった。

・・・・・・・・・・・・・・・・

ツナ達は部屋を移動し、京子やハルなどは出て行ってもらった。ここにいるのは了平、獄寺、ビアンキ、草壁、ジャンニーニ、ラル、山本、リボーン、希生、賢、そしてツナだ。

希生は部屋の入り口で壁にもたれて立っている。その他はみんなテーブルを囲むようにしてソファアに座っている。

「こないだファミリー首脳により大規模作戦が計画された。そしてここにいる10代目ファミリーへの指示は5日後にミルフィオーレ日本支部の主要施設を破壊することだ」

了平が淡々と事態を伝えた。

「バンビーザへの指示は無いのか？」

「俺も、向こうにいる時点では、お前らバンビーザの事状況は把握していなかった。だから、バンビーザへの指示は無い」

「だったら、俺らもボンゴレに加わるとするか……。貧弱なこのボンゴレでは寂しいしな……」

「貧弱とはなんだ!!!!!!」

了平が切れた。それを、ツナと獄寺が押さえる。

「どつちにしろ、5日後なんだ。今のボンゴレの修行が達成できるかなんて分からない。だが、このまま修行を続けていたら、間違いなく終わらないだろう……」

「だが……」

了平が落ち着き、声を出した。

「決めるのは沢田。お前だ。中止の場合は俺が首脳に伝えに行く。しっかり頼んだぞ」

「ちよつと……」

「さーて、俺は極限飯食って寝るっつっ!!!!!!」

結局、了平は伝えたいことだけ言って部屋を後にした。残ったメンバーはまだソファアに座っている。先端を開いたのは希生だった。

「ツナ。やるしかないな・・・」

「えっ！」

「俺らが過去に帰るんだつたらやるしかない。ただ、それだけだ」

「俺は・・・。やります！」

「だったら、リボン。了平には言っといってください。つな。お前は修行再開だ」

「はい！」

「山本、俺らも行くぞ！」

「OK小僧」

そして、獄寺以外は部屋をあとにした。残った獄寺も部屋をあとにした。

.....

「百蘭さんとの連絡は？」

「ええ。つい先程、食事に出られたと・・・」

「食事？ なんてあの人はもう・・・」

入江正一は自分の研究室に向かっていった。そして、2人の女性に伝言を言う。

「グロからは目を離さないように指示してくれ。僕は少し休む」

「休むのでしたら・・・」

「上着は肌身離さずだろ？」

「では、失礼します」

正一は2人の女性がいなくなったのを確認した後、上着を脱ぎ、机に倒れた。

その拍子にパソコンの電源が入り、百蘭からの通信が入った。しかし、それはリアルタイムではなくさっきの通信の録画だった。驚いた拍子に録画ボタンを押してしまったのだろう……。正一はその録画を見ながら机のごみを下に落とした。その時、見知っている人が写った。

・・・・・・・・・・・・・・・・

ツナはグローブから放出される死ぬ気の炎を操る修行をしていた。Ver.V.Rのグローブは炎を出力が一定時になると爆発的に放出されるようになる。それを操るための修行だ。一直線にブロックを配置しそれを避けながら進む修行だ。まだ、ノーマルグローブの方がタイムは早いのだが……。

「まだまだ、動きに無駄が多い。こんな事では午後の修行で希生に半殺しにされるだけだぞ!!!」

「ひいひいひい!!!」

「……………。他の連中を見て来い。5日後の戦力になるかをな……………」

「は…………はい……………」

ツナはトレーニングルームを後にし、山本のいる10階にむかった。

「へえ、この階本当に日本風になってる…………。10年後のオレ…………、何考えてこんな建物作ったんだろ？」

歩いて奥に進んでいると、正面にあった障子の奥から金属音や銃の

音が聞える。ツナは音が聞える障子を開けて中をのぞく。

その瞬間、顔にケチャップ……。じゃない、なんかベチャベチャしたものが付いた。びっくりしながらも部屋をのぞく。奥では山本がリボーンの放つ銃弾を交わしたり、刀で弾いたりしている。そして、山本がツナのいる場所に來た時山本が反応する。

「ツナ！」

次の瞬間、山本は倒れ、障子と共にツナは潰された。

「大丈夫か？ ツナ？」

「修行中に入ってくるほうが悪いんだぞ」

「いや……。ほら……。修行の調子はどーかなーって思って……」

「なるほどな……。とりあえず、ペイント弾にあたった数だけ実践では死んでるってことだ……」

そう言つてリボーンはリモコンのボタンを押した。それと同時に部屋が暗くなる。山本を見ると、暗闇でもツナの顔がはっきり見えるくらい光っている。つまり、ペイント弾にたくさん当たったと言う事だ。

ツナはその後、獄寺と賢、それからビアンキのいる嵐ルームの司令室にむかった。ドアを開けると、仲にはビアンキと賢が椅子に座っていた。ビアンキと賢はツナが入ってきたのにも関わらず振り返らなかつた。

「ビアンキと賢君。獄寺君の修行どお？」

「バツクれたわ」

「……え？」

「いなくなったの！ 逃げたっていつてるでしょ！！」

ビアンキは怒ってツナに言った。ツナもビアンキの声のでかさに驚き、また、獄寺が修行から逃げたことにびっくりした。

こんな調子じゃ5日後に殴りこみなんて無理だよ……。本当に福瀬君の言った通りになっちゃうよ……

.....

「お呼びですか、入江様」

2人の女性が入江の研究室に入ってきた。女性が入江の机に来たところでパソコンの画面を見せた。

「見てくれ！」

「これは、先程の百蘭様からの映像ですね」

「この男は誰だ！」

そう言つて、正一は映像の隅に映っている、小男を指差した。

「この部屋に侵入できるのは許可された伝達係りと世話係りだけだと思います。確か先日伝達係りのルイジが亡くなれ、代わりにレオナルド・リップピという男が配属されたと聞いています」

「その名は知っている。レオナルド・リップピは僕が推薦したんだからね……。だが、レオナルドは60歳の小男だ！」

それから、入江は2人の女性を従えて、この基地の司令室に向かった。すでに、本部への連絡を開始していたが、どこの回線も繋がら

なかった。

「ダメです！ 百蘭様への緊急回線も繋がりません！」

「もーいいよ！ ほかのイタリアの部隊に！」

「それもダメです！ 本部パイオペディラムに繋がる全ての回線が通信障害を起こしています」

「なんだよそれ！ 一体どーなって・・・あっ！」

まさか、あの伝達係りが・・・。百蘭さん！！

・・・・・・・・・・・・・・・・

「お帰りなさいませ、百蘭様。お食事いかがでしたか？」

「うん。うまくいったよ。ラーメンにギョーザ。ところでレオ君、何してんの？ とうとう世話係りまで任されちゃった？」

レオは丁寧に百蘭に接待している。普通の事だ。上司にタメ口を利くなど許されない。まあ、希生なら平気で先生の事を馬鹿にしたような呼び方で呼ぶが・・・。

「い・・・いえ・・・。あの百蘭様にお仕事の話で相談が・・・」

「賃上げ要求とかやだよ」

「いえ。実は一身上の都合でやめさせていただきたく・・・」

そうなのだ。レオが百蘭の部屋で待っていたのはこのためだったのだ。

「お、それはびっくり。君の才能には期待していたんだけど・・・。ホント、なかなか出来ることじゃないよ。第11部隊は退け、黒曜ランドにグロ・キシニアを向かわせるように誘導するなんてさ・・・

。君はあそこでクローム髑髏に勝たさなければならなかった。だから僕に虚偽の含まれる報告をして、勝ち目の無い第11部隊ではなく、第8部隊に向かわすように操作した。グロ君だけに黒曜ランドにいるクロームの魅力的情報を教えることを怠らずにね」

レオは百蘭が何を言ってるのかが分からなかった。正確にはわかっているが知らないフリをしているといったほうが妥当だろう。百蘭は気づいていたのだ。。。

「百蘭さま・・・？」

「もういいから出ておいでよレオ君。いやこの場合ガイド・グレコ君？ それともボンゴレ霧の守護者かな？」

「ボンゴレの・・・霧の守護者ですか？」

「うん。六道骸君・・・・・・・・」

「うん。六道骸君……」

百蘭に名前を言われたレオは顔色を変える。殺気に満ちた顔になる。それは、六道骸本人の意志である。

「いつから？」

レオは殺気に満ちたその顔でボスである百蘭に問う。まあ、もうボスではないが……。それでも百蘭は怖気もせず、レオの問いに答える。

「随分前だよ。部屋にダチュラの花を飾ってもらったの覚えてる？
花言葉は変装なんだ」

「やはり僕の予想通りだ。あの頃から、あなたの視線がくすぐったかった」

。そう言うと、二人はクスクスと笑いだした。なんとも不気味な……。

「お互い相手の腹を知りつつ知らぬフリをしていたわけだ。あなたが入江正一に知らせなければもっと遊べたんですがな」

「よく言うなあ。遊びを超えてボンゴレの仕事し始めちゃったの君だろ？」

「ボンゴレ？ 彼らと一緒にされるのは心外ですね……」

レオはそう言うと煙に包まれる。そして右目に六の文字が浮かび姿

を現す。六道骸が……。髪も長く、背も高くなっている。10年前とは大違いだ……。

「沢田綱吉は僕の標的でしかありませんよ」

「へえ。君は骸君かあ。悪くないね……。レオ君は君にとって2人目のクロームという解釈でいいのかな？」

「クフフフ……。それはどうでしょう？」

「わっ！ レア度星5つのヘルリング！ 2つ持ってるんだ。骸君やる気マンマンじゃん」

「当然ですよ。僕は楽しみにしていましたからね。ベールに包まれたあなたの力を暴けるこの日を……。あなたを乗っ取る日を……」

「食後の運動くらいにはなるかな」

そう言うと、骸は気味の悪いボックスを取り出す。そして、百蘭は大空のマーレリングを骸に見せ付ける。

.....

ツナは1人、先程、ファミリー主要で話し合いが行われた部屋で頭を抱えていた。すでに、他のメンバーは修行に移っている。ツナは1人悩んでいた。作戦に参加しなければ地獄。了平がファミリー首脳に中止の場合は話してくるといったが、過去に帰るならやるしかない。10年後の獄寺も入江を倒せば元に戻ると言っていた。しかし、現状の戦力では到底殴りこみにはいけない。獄寺は修行かか逃げ、ラルは体調を崩した。山本もペイント弾にあたりすぎているし、ツナ自身、グローブの必殺技も考えていなければ、グローブの使い方にもなれていない。バンビーズのみんなは頼りになるが、ツナ達と共に行動してくれるとは100%とはいえない。ボスである希生

自身も勝手に外に出たりと暴れている。

そういう考えごとをしているとデカイ笑い声が聞え、それがツナのいる部屋に入ってきた。1番きてほしくない物だ。もじやもじや頭の奴。せめて10年バズーカの効果が無限だったら、20年後の姿になってほしい。そのほうが頼りになる。しかし、頼りになるのはまだまだ先だ。

「ツナみーっけ！ ツナにも落書きしてあげよっか!？」

「ランボ、遊んでる気分じゃないんだ……。あっちいつてくれよ・

・」

「あららのら 本当は遊びたいくせに~~~~~!!」

そう言うと、ランボは油性マジックの蓋を取る。

「やめろ。本当に怒るぞ……」

「ガハハ 書いちゃうもんね!」

ランボがツナのズボンにペンを走らせたとき

「やめろっていつてるだろ!」

ツナは普段ではありえないくらいの声でランボをしかつた。ランボも驚き、ペンを落とし、しりもちをついてツナを見上げている。その顔には汗と瞳には涙が浮かんでいる。そして、固まっている。

「どっしたんですかツナさん!？」

その時、ハルが部屋に入ってきた。ハルはランボを見て近寄る。

「はひ？ ランボちゃん泣いてるんですか？」

「ハル！！」

「修行中はちゃんと面倒みるって言ったじゃないか！！」

「すいません．．．でも．．．。ランボちゃんだって、ちゃんと家事の手伝いとかしてくれるんですよ。ツナさん、何も知らないから．．．」

何も知らない．．．．？ ツナの心に怒りが込み上げてきた。

そして、1番言っではいけない言葉を発した。

「何も知らないのはお前達だろ！！？」

ハルはツナの怒りの言葉を聞き、謝った後、ランボを抱いて部屋を後にした。

希生はその様子を外で聞いていた。

「へたくそだな．．．。それじゃあ、嫌われるだけだぞ．．．」

その時、希生の横をリボンが通りツナのいる部屋に入る。それに続いて希生も部屋に入る。

「へこんでるヒマはねーぞ・クロームの容体が急変した」

「えっ！！？」

ツナはリボンと共にクロームのいる医務室に向かう。ツナの考えでは、クロームの内臓は骸の幻覚で補われている。もし、クロームの内臓が壊れることがあるようなら骸に関わる。骸が何かやってれば、クロームの幻覚どころじゃなくなり、クロームの内臓の幻覚は解ける。

ツナは医務室に駆け込み、そばにいるビアンキに声を掛ける。

「ダメだわ！ 手の施しようが無いの！！」

「そんなぁ・・・」

「失われてるのよ！！ 内臓が！！」

クロームのおなかはへこんでいる。へこんでいる場所が幻覚の内臓である。その時、医務室の部屋の扉が開き、希生が入ってきた。

「希生君！！」

「クロームのボンゴリングは何処だ！ それをクロームの指にはめろ！！」

ツナはクロームのバックからボンゴリングを取り出すと、クロームの指に嵌める。

「ぼ・・・す・・・」

「そーだ！ オレだよ！」

「あつた・・・かい・・・。ボス・・・むく・・・ろ・・・様を・・・」

クロームはそのまま、最後に血を吐き、ベットにぐったりとなった。

「どけツナ！ 後は俺がやる」

「どうするの！」

「オレの幻覚とクローム自身で幻覚を作り出す」

そう言うと、希生はポケットから霧のBランクのリングを取り出す。そして、それを指に嵌め幻覚を作り出す。それと同時にクローム自身に促し、自身で幻覚を作らせた。すると、クロームの腹のへこん

でいた部分が徐々にふくらみ、元通りに戻った。

「希生君!!!」

「大丈夫だ。今はクローム自身の幻覚とオレの幻覚で内臓を補っている。クロームのそばにいる俺の方が骸の幻覚よりは強い。それに、こいつ自身の幻覚も相当なモンだ。心配ない」

「よかった・・・」

ツナはそつと胸を撫で下ろす。

.....

クロームの内臓が失われ始めた頃と同じ頃・・・。骸は三又槍を壊され、右目を押さえかろうじてたっていた。すでに不気味なポツクも壊されている。右目からは出血している。

「なんて恐ろしい能力でしょう。さすがミルフィオーレの総大将というべきですか。敵いませんよ」

「また、心にもないこと言っつて。喰えないなあ、骸君。言っておくけど、この部屋には特殊な結界があつて光や電気は愚か、思念のたぐいも通さないんだよ。だから、骸君が牢獄に戻ろうとしても戻れないの。だからさ、いっそのこと、ホントの死を迎えようか。バイバイ」

.....

時は進み、作戦室。ここにはアジトにいるメンバー全てが集まっている。まあ、バンビーザは賢と浅井しかいないが・・・。他のメンバーは独自に偵察にでると言っつ・・・。

そして、待っていた希生が部屋に入ってきた。あの後もう少しクロームのそばにいて状態を見守っていた。

「クロームは!!」

「落ち着いたよ。クロームだけの幻覚では生命維持がやっとだったが、オレの幻覚も使っておいたから心配は無い。もう少しすれば目をさますだろう」

「よかった・・・」

「でも、クロームがあの状態では5日後には戦えないな・・・」

「痛いな・・・」

「心配するな。クロームの不足分は俺が補う」

「そんな事任せられるわけねーだろ。お前、今座ってんのもしんどそうじゃねーか」

「!! リボーン、何を言ってる!!」

ラルがリボーンに反対しようと立ち上がった瞬間、ラルは倒れこんだ。

「じゃあねーな。クロームの分は俺がやるってことで・・・」

「希生君・・・」

「だけど、オレの幻覚は骸ほどじゃないぜ・・・。だけど、戦闘なら負けないな・・・」

そう言ったとき、ガチャと言う音が聞えた。

「何言ってるの？ 僕には勝てるの？」

「おっ！ 思い出した。オレは雲雀に勝ったんだった。だから、この中で1番強いのは俺ってことで」

「希生君・・・」

「心配するな。この事態をバンビーザファミリーはボンゴレを必要

以上に援護する」

「ホントに……」

「だが、修行はきっちりやる。それに入江を倒すのもお前だ。ツナ」
「えっ！ ちょっと待ってください！」

ツナの静止を聞かずに、賢と浅井を連れて希生は部屋を去った。

「やりましょう！」

「えっ！」

「敵のアジトに行けば過去に戻ることでじゃなくて、骸への手がかりのつかめると思っんです。それにノン・トゥリニセツテのこともわかるかもしれないし……。でも、どっちもゆっくりしていると手遅れになりそうな気がして……」

「うむ……」

「それに、こんな状況に一秒でも長くいてほしくないんだ。並盛の仲間はもちろんだし、バンビーザのみんなも、ラルもクロームも……、こんな状況全然似合わないよ。とにかく……」

ツナは死ぬ気丸をのんだ。

「5日間しかない。一刻も無駄にできないぞ」

部屋のメンバーにそう言うと、ツナはグローブの炎でトレーニングルームに行ってしまった。そして、それに続いて山本や獄寺も修行に向かった。獄寺は何してるのかわからなけど……。

ツナはトレーニングルームに入って驚く。すでに、希生が賢と戦っていたのだ。しばし、その戦いを眺めていると、希生が気づいたらしく戦いをやめ、賢を別の部屋に行かせ修行が始まった。

希生は有無も言わず、ツナに切りかかった。それを避けて、戦いが始まった。最初は何がなんだかわからなかったが希生の意図が分か

り、ツナも全力で相手した。てか、相手してもらっているほうが妥当だが。

ツナもグローブの使いかたを徐々に自分のモノにしてきていた。しかし、まだ、微妙な調整が出来ていないようで、所々で攻撃に対処しきれずにいる場面がある。

「驚いたな……。俺が少し見ないうちに格段に動きが良くなったな」

「ええ。ノーマルグローブとVerグローブの方と使いわけをしているんです」

「そうか……。だがな……」

希生は渾身の一撃をツナに浴びせて戦いが終わった。

「ツナはまだ、オレのHELL DRAGONのような技を使っていない」

「技？」

「ああ。オレには分からないが、ボンゴレの超直感で見つけるんだな」

「技か……」

「ああ……。後は休め。これ以上やると体に悪い。他の仲間の修行をみてきたらどうだ？」

「うん。そうするよ」

希生とツナは一緒にエレベーターに乗り、それぞれ、違う階で降りた。希生は偵察の任務に当たってた奴からの報告を聞きに自室に戻った。部屋には、紗夜夏がいた。彼女はパソコンを使って何かを調べているようだった。

「紗夜夏、どうした？」

「百蘭つてすごいね。あたし達、過去にちゃんと戻れるかな……。なんか不安で……」

紗夜夏は希生に抱きついてきた。希生は紗夜夏の腕を引き包み込むように抱きしめた。

「大丈夫だ。俺達が過去に帰してやるから。それまで、待ってて……」

紗夜夏は希生の胸の中で頷き、そのまま泣いていた。

「希生。偵察隊が帰ってきたぞ」

そう言つて福坂と本田が入ってきた。彼らは希生が彼女を抱いていてもどうも思わなかった。なぜなら、普段の学校生活でも何回も見ているからだ。だから、驚く様子もなく外の様子を伝える。

「ミルフィオーレの連中は地上の警備もしっかりしている。それと、敵のアジトの位置が分かりました」

「何処だ？」

「はい。ボンゴレアジトと同じく地下にあるようです。そして、その場所は並物ショッピングセンターがある場所です」

「となると、そこらへんにアジトへの入り口があるんだな……。ご苦労だった」

「はい」

2人はそのまま部屋を後にした。希生は10年後に初めて にあつた、並盛神社戦の時に、 に発信機を取り付けたのだった。しかも、取り付けた場所は のボックスだ。すごく小さいチップをボックス

のつけておいた。小さいので電波の状況が悪かったが、こないだ、一時電波が入った時があった。その時の電波の位置を割り出していたのだ。

「クロームのバックに入っていた発信機も見つかった。こっちもアジトを見つけた。と言う事は、もうすぐ向こうも仕掛けてくるな・・・。紗夜夏？」

彼女はすでに、希生の胸の中で眠りに着いていた。

「お疲れさん。少し休め。後は俺がなんとかするから・・・。」

そう言うと、彼女は起こさないようにそっとベットに寝かせ部屋を後にした。

.....

ツナは廊下を歩いていた。向かう先は決めていなかった。とりあえず一回自分の部屋に戻ろうと思ったのだ。

「技って。グローブにまだ使っていない機能があるのかな・・・？」

ふと正面を見るとランボが物陰に隠れてツナを見ていた。ツナの視線に気づいたのかランボは角だけを出して物陰に隠れた。ツナはこないだランボに怒ったことを思い出し、少しランボを脅かそうと考えた。

.....

ランボはもう一度、ツナのいた場所を覗いた。しかし、そこにツナの姿はなく。代わりに飴玉が置いてあった。ランボはツナがいないことを確認して飴玉を取ろうとし物陰からでた。その時

「わっ！！！！！！！！！」

「ぐびゃっつっつ！！！！」

そのまま、ランボは逃げ出した。ランボが物陰からでた瞬間、ツナが脅かしたのだ。

しかし、ランボがツナから逃げられるわけもなく、捕まった。そして

「逃がさないぞ。こいつ」

「はなせっ！！」

「こちよこちよ、こちよこちよ~~~~」

「ギャハハハッハハッハ！！」

「どーだランボ！」

「くすぐったい~~~~」

.....

ツナはランボに飴玉をあげ、自分は食料庫に向かった。そして扉を開け中に入る。柵越しにしたを見ると、まだハルが泣いていた。ハルが気づいたのか上を見てツナに言った。

「ほっといってください。日課ですから・・・」

「聞いてくれよ。今日のは全部おれがわ・・・」

ツナは足を滑らせ階段の上部から下部まで一気に落ちた。ツナは立ち上がり、もう一度ハルに謝った。

「本当にごめんな・・・ハル・・・」

「だったら、過去に戻れたら一緒に遊園地行ってください!」

「なんでそーなるんだよ。つか、ランボとも遊園地行く約束したな・

・・・」

「ツナさん。ランボちゃんと仲直りしたんですか?」

「うん」

「京子ちゃんと紗夜夏ちゃんとよく話すんです。ツナさんたちを支えるのは私達の役目だって」

「!!!!!!」。ハル、京子ちゃんにもありがとっって言っというて

そういうと、ツナは急いでトレーニングルームに向かった。そして、死ぬ気モードになる。

力を出せるのは支えがあるから。強力な炎を前方に撃ちだすには、それを受け止める支えが必要だったんだ。柔の炎で支え、剛の炎を放つ!!!

やっと第2章が今回で終わります。

作者「長かった・・・」

福瀬「お前がろくすぽ書かないからだろ！勝手に新しい連載始めるし」

橋本「やめておけばよかったのに」

浅井「うんうん。納得」

福瀬「まあ。いい。それでは第14話」

「「「「お楽しみください！！！！！」」」」

ツナは死ぬ気モードになり、腕を前後に構える。そして、手から発せられる死ぬ気の炎の炎圧を最大にして、一旦止まる。

強力な炎を前方に撃ち出すには、それを受け止める支えが必要だったんだ……。柔の炎で支え、剛の炎を……。放つ!!!!!!

ツナ後ろに回した腕で柔の炎を放ち、前に回した腕で剛の炎を放った。今、持てる最高炎圧で……。

希生はこの一部始終を物陰で見っていた。

「遂に技を見つけたか……。だが、完成には程遠いようだ……」

希生はそう言うと、トレーニングルームを去っていった。

……

山本はリボンとの修行中、上から聞えてきた轟音に驚く。たちまち、その轟音にびっくりし時雨金時も通常の竹刀に戻ってしまった。二人は手を休める。

「何だ……。？ 今の音？」

「上の階からみてーだな。5時間修行ぶつつづけた、休憩がてら他を見に行くか……」

「オーケー!!」

山本とリボーンは1番最初にツナのいるであろう、トレーニングルームに向かった。エレベーターに乗りトレーニングルームに入る。

「あ」

「お」

入ったとたん、2人は上部の壁に穴が開いていることに気づく。しかも、その穴が人型の形に縁取られている。

「いつつ~~~~」

「あ」

「お」

「おお~~~~、いてて~~~~」

壁の下を見れば、崩れた壁の瓦礫に混じって頭を押さえて倒れているツナの姿がある。2人は急いでツナに駆け寄り。ツナは2人に気づくと起き上がって山本たちを見る。

「柔の炎と剛の炎の出し方のバランスがこんなに難しいなんて・・・」

「大丈夫かよ！」

「ハハツ・・・。新技を試してみたんだけど・・・」

口では笑っているが、顔は笑っていない。まあ、当然だが・・・。

「どーなったら、こうなるんだ？」

「おいツナ。その新技はモノにできそーなのか？」

「うん。どーだろ」

そのまま、ツナは瓦礫の中に倒れる。言い換えれば、力の使いすぎでバテて寝たともいえるべきか……。

……

笹川了平は闘志に満ち溢れていた。対する雲雀恭弥は嫌悪な表情を浮かべ、了平を睨んでいた。

「ならば拳とボックスを交えるまでだ！」

「僕は構わないよ」

「極限に止めるもの、何もなし！」

「いいえ。さつきから私が止めてます！ くだらない理由で守護者同士がバトルなどやめてください！」

草壁が静止しているのに対して了平と雲雀は殺る気がマンマンである。

「どこがくだらぬ理由だ！ 俺は屋敷に入れるのに、チビ達は出入り禁止とはどーいうことだ！」

本当にくだらない理由だ……。草壁さん、かんばつて!!

「本当は君だつて入れたくないんだ。君を見てると闘争本能が萎える」

「何を！ 極限にプンスカだぞ！」

「わかりました！ 私が向こうのアジトでランボさん達と遊んでいきますから」

「仕方ない……。1ラウンドだけだ」

「僕は構わないよ」

「ダメです！ 話し合いをしてください！」

話し合いの進まない話し合いでした……。

……

クロームは夢を見た。暗く、柱の隙間から流れる光が唯一の光源……。そこに1人さまよっていた。他には誰もいない世界。現実世界とはかけ離れている世界。

コ……コ……二……ア……ル……

「骸様……どこにいるの？ 何があるんですか？」

クロームは上を見る。すると、上から白い粒子を放って落ちてくる尖ったものがクロームに向かってくる。クロームが手を差し出し待っている、尖ったものはクロームの手には落ちず、手の上に浮いている。

「骸様の槍の……、残……骸……」

残った力で何かを伝えようとしている……

クロームはいつしか、真つ暗な世界にいた。さっきまで柱の隙間から流れる光も何もない。すると、前方から白い玉模様が大小、いろいろな大きさの玉が飛んでくる。次第にそれは、形や大きさの違うゼンマイに形を変えていく。最後には全てのゼンマイが集まって何か大きな構造物を形成する。それは、白く大きな丸い装置か何かだ。すると、その装置から少量の煙が上がり中央の丸いものが四等分され開いていく。

「何これ……。なんで、ここにいるの……？」

クロームが白い装置から、現れた何かをみて呟く。それと同時に白い装置に手を伸ばすが

「近づくな！」

いきなり、伸ばした手を弾かれクロームは後ろに倒れこむ。クロームはもう一度、白い装置の方を見ると、一人の少年が立っていた。めがねをかけている……。そして、首にはヘッドフォンがかけてられている。少年は右手を胸の前に持つてくる。中指には何か嵌められている。やがて、その姿が大きくなり、白い服を着た青年に変わる。

「ボス！」

「!!!」

「何だよ……これ……」

クローム、ツナ、そして希生が順番に目を覚ます。どうやら、3人とも同じ夢を見ていた。

ツナは飛び起きた。そして、頭上から落ちてくる紙に目をやる。それは、リボンからのメモ書きだった。

『休憩がてら獄寺の修行を見に行く。お前もボスなら部下の状況を把握しろ』

その瞬間、獄寺の「大丈夫っす！」と満面の笑みが浮かぶ。しかし、実質獄寺はビアンキと早崎賢が用意した修行から逃走し、今は1人であるのだ。ツナは急いで立ち上がり、トレーニングルームを後にした。

.....

「何だよ……。今の夢……」

「どうしたの？」

夢から覚め目をこすりながら起きた希生は隣で寝ていた紗夜夏に声を掛けられる。

「ん？　なんか、白い丸い装置に1人の男がいて……。なんか変な夢だった。感覚が夢に行ってたっていうかなんというか……。とにかく、変な夢……」

「それって、睡眠不足じゃないの？　それか栄養不足とか……。アタシが何か作ってあげる」

「ああ、ごめん。ありがとう」

「うん。気にしないで」

紗夜夏はそう言うと、部屋に備え付けてある小型のキッチンで調理を始めた。今更だが、希生達、バンビーザが使う部屋は希生と紗夜夏がいる部屋を覗いて、3人一組の部屋である。希生と紗夜夏の部屋は普通より少し大きくキッチンと少しばかりのスペースがある。食事は希生の部屋のキッチンで作ったものを、別の部屋に持って行って食べる。ボンゴレとは別である。希生は起き上がり、ベットから下り着替えると外にでた。

.....

「あとはこいつを10代目にどう説明すつかだな……」

獄寺は頭に小型の凶暴そうな猫を乗せ、つけていたはずのめがねは

片方、レンズが割れている。腕には無数のひっかき傷がある。

.....

入江正一はモニター越しに百蘭と話をしていた。レオの事や、レオの正体は骸だったことなどを話した。

「骸君にしてやられてさ……。ミルフィオーレの情報少しずつネットワークに漏れるようにコンピューターに細工してあったんだよね」

「では、ここの情報は!？」

「アレの存在を知ったらボンゴレも何がなんでも行くだろうね」

「でも、これはビツクチャンス! ボンゴレが日本に増援を送るなんて出来ないし。ってことで、忙しい

正ちゃんのためにスペシャルボーナスを用意したんだ」

「増援でしょ? いりませんよ。足手まといなんです。そういうの。

僕が直接やりますよ。かれらの迎撃とボンゴレリングの奪取は」

「まかせたよ正ちゃん」

「じゃあ、しばらくほっといてくださいね百蘭さん」

入江正一はそう言うと、百蘭がまだ何か言いたそうだったが一方的に通信をきった。そして、付き人の2人の女性に指示を出す。

「非常召集だ、ハンガーを全部あげてくれ! 白いのも、黒いのもだ!」

「はっ」

数分後.....

「入江様、全ハンガー滞りなく向かいました」
「僕も行くぞ」

入江は白い隊員服の上にマントのように黒いマントを羽織った。これはミルフィオーレの黒と白が共闘するという意味だ。

全ハンガーが一箇所に集められ、中央から入江正一と2人の付き人の女性が現れる。そして、中央の棒の高さがちょうど、このフロアの半分にきたところで止まった。そして、入江はこう告げる。

「諸君に集まってもらったのは他でもない。百蘭様より、この基地が標的とされる可能性が示唆された。よって、この基地の指揮系統を僕を頂点としたトップダウンに移行する許可を貰った。これより、どこの所属でも、僕の命令には直接的及び、絶対的に従ってもらう」

「なんだって！」

「ついに入江がキバをむく」

「反論のある奴は前へ出るがいい」

「あるなあ」

「アニキ!!」

真っ先に口にしたのは、単独で出撃し、返り討ちにあった。だった。敗戦しかない将が反抗するとは無理がある。すると、の後ろから誰かが飛び上がり、入江のいる丸い棒にしゃがみこむ。

「百蘭様の命ではせ参じた。入江殿にはむかう輩は斬ってみせましょ」

なんと姿を現したのは幻騎士だった。

.....

「何この丸い装置を見たことがあるだと！」

作戦室にはボンゴレのクロームを除く全メンバー、バンビーズの全メンバー、そして、フウ太、ビアンキ、ジャンニーニ、リポーン、ラルが集まっていた。

「悪いが、俺も見た」

「希生君も！」

「ツナ兄も希生さんも何処で見たの？」

「これの前に入江正一が立っていた」

「どこで見たんだ！」

ラルが怒り口調で言う。

「それが夢なんだけど」

「俺も、夢だ」

「夢だと！ ふざけているのか！」

「で、他に何をみたんだ？」

「リポーン！！」

「かすかにしか覚えてないんだけど、入江正一以外にも誰か人がいて、中にすごく大事な物が入ってるみたいで……」

「大事なものか……。案外、この丸い装置が入江正一と謎を解く鍵かもな……」

「正気かりポーン！」

「別に一つのターゲットにしたって構わない。そんなに信用がない

なら、俺らバンビーズで勝手に調査してくるぜ！」

「希生君！」

「まあ、なにせよ、今は修行だ！ 行くぞ沢田。あの新技を完成させるぞ！」

「うん。希生君！」

「山本、お前も行くぞ。この中で1番遅れてるみたいだからな・・・」

「ん？ ああ。おっけー」

.....

山本は刀でリボーンを斬りかかるが、リボーンの十手に阻まれる。

すると、リボーンの十手が変形し銃に変わる。山本はそれを斬りおとすがペイント弾で斬ったはいいが結局は拡散して服に着いてしまった。そのまま山本は倒れこんだ。

「いい手だとおもっただけだな・・・」

「今のは良かったぞ。ちつと、俺も本気がでちゃった。ちなみに今ので、ボックスと炎と時雨金時の扱い方は合格だ。次の段階にはいるぞ。これからはより高度な剣技は俺が教えるのは限界がある。そのかわり、これを解禁するぞ」

リボーンが山本に渡したのは「剣帝への道COMPLETE BOX」と書かれたDVDだった。リボーンはパソコンを持ってきて、ディスクを再生した。移った瞬間、スクアアロが映っていた。

「これはスクアアロが2代目剣帝を名乗るために自分課した100番勝負を収めたDVDだ。大リーグを目指すお前に1勝負ずつ送られてきたんだ。自慢のためにな」

「じ……自慢かよ……」

「もちろん、本心は違つたろうけどな……」

飛ばすぜえ!!!!!!

スクアールの声と共に勝負は始まった。その瞬間から山本は夢中になつていた。

「3日後に抜き打ちテストを行う。相手は福瀬だ。あいつに一太刀でも浴びせられたら合格だつて、福瀬が言つてた」

「お前は世界1のヒットマンに鍛えられたんだ。自信もつて剣を極めろよ」

「そつか、そーだな。よし、合格したら小僧の秘密教えてくれよ」
「約束な」

そして、それぞれの修行が更なる進歩を遂げた。そして、3日後……

希生は山本と勝負が始まった。

「特式 十の型 燕特攻」

「合格だ。よくなつたな」

……

「本当にいいんですか？ こんなにお肉使っちゃつて……」

「いいのよ」

「すみません！ 遅れました！」

「紗夜夏ちゃん！」

エプロンを付けた紗夜夏が入ってきた。

「今日はツナ達と希生達と一緒に食べるんだって」

「成人組にはお酒もだして今夜はパーティーといきましょう！」

「今夜はパーティーです！」

.....

笹川・雲雀・草壁・ラル・リボーンの5人は和服に身を包み、雲雀の部屋で会談をしていた。

「雲雀！ 明日は年長組、いいとこみせような！」

「いやだ」

「放せ！ 中坊んときから成長せん男め！」

「落ち着いてください、笹川さん！」

「僕の目的は君たちと群れることじゃない」

「ラル・ミルチ。あなたは出るのですか？」

「無論でる。戦力は多いにこしたことはないからな」

「その体調で無理するな！」

「バンビーザの連中に任せられるか！」

「死にたきゃ、死ねばいいさ」

「雲雀い！ お前には思いやりの心はないのか！」

「誰が頼りないって！？ 悪いけど、俺はボンゴレの連中より腕は上だしラル、あんたよりも強い。今回バンビーザはボンゴレを全力で支援する。それになんの問題がある？」

中に入ってきたのは肩にリボーンを乗せた希生だった。

「どーなんだ草壁。シミュレーションの結果は出たのか？」

「はい。高く見積もってわずか、0.0024%です」

「ふっ、奇跡でも起きなきゃ成功しない数字だな。沢田達には黙っておけ」

「賛成です」

「ってか、そんな数字なんて無意味だな。どうせ、パソコンの計算に過ぎない。カチカチ計算してたって意味のない事だよ。俺らは突撃するって決めたんだ。なら、やるしかないでしょ。たとえ負けつつ、それは自分達の弱さが招いた結果だ。強ければ勝つ、弱ければ負けるじゃないんだ。ようは、やる気があるかないかの問題だろ？」

「福瀬……」

「なに？ ラルさん。俺の話聞いて感動した？ 感動する場所間違えんなよ！ 俺らが過去に帰ることができたとき、初めて感動するんだ。今、感動してちゃ意味無いつてことよ。大丈夫。ボンゴレのヒヨっこ才は俺が全力でサポートしてやるよ。簡単に言えば勝つて、このアジトに戻ってくればいってことでしょ？」

.....

ツナはお守りを探していて京子とぶつかった。その後、京子が始めて未来の時代に来た時にツナに助けてもらったこととお礼をいった。その後、ツナの探していたお守りが見つかって、京子が内ポケットを作ってくれた。

「明日は過去に帰るための大事な日なんですよ？」

「京子ちゃん……。オレ、必ずみんなを過去に……。」

「無茶しないで……。」

「え！？ そーだよ無茶しちゃいけないよね！」

「10代目……！ ご飯ですよ！」

「今日はバンビーズのみなさんと食べるらしいっすよ！」

……

「なんだと、ボンゴレのアジトを突き止めた？」

「はい。グロ・キシニアの様子が変わったので口元を観察していた所、敵に発信機を取り付けたとのことでした」

「場所は？」

「はい。発信機が動いているので定かではありませんが、だいたい同じ場所へ行ったりきたりしているので、そのデータを元に割り出しました。ポイント座標A24・1 36・2 並盛の南西ですが、更地になっています」

「まさか！」

「そういうことだったのか！ 奴らのアジトも地下にあったんだ」

「突入隊の準備は？」

「はい。完了しております」

「直ちにボンゴレアジトへ突入せよ……！！！」

夜の並盛には合わない全身黒に特殊ゴーグルをして背中にはリュックサックを背負う男達。そして、それと真逆の白色に特殊ゴーグルをしてリュックサックを背負う男達。この2つの男達は夜の並盛の街に突然現れ、ある一点の場所に向かっていた。そう。ボンゴレ地下アジトに……。

隊長格の男がリーダーを見ながら進む。そこには、グロのつけた発信機の場所がマップ上に表示されている。今の発信機は動いている。

そして、隊長格の男達6人は3班に分かれる。そして、ボックスとリングを取り出し、ボックス兵器を呼び寄せる。6人男、全てが同じボックスを持っている。掘削作業に適したモグラ型のボックスである。

一方、ミルフィオーレ基地、通称メローネ基地の司令室では入江正一他、数人のエリートが首をそろえていた。

「3隊に分かれボックス兵器での掘削作業を開始しました」

「念のため周辺道路は封鎖しておけ。突入準備が整いしだい、僕につないでくれ」

「はっ」

ボンゴレアジト突入隊はボックス兵器で掘削作業を開始した。しかし、あまり深くない位置にアジトの天井が姿を現す。すでに町は朝

方になっている。太陽も顔を出し始めている。

「敵アジトの天井部分と思われる防壁を発見!!」

「B・C班も同じ発見」

「これよりボンゴレアジトに攻撃を仕掛ける。カウント3で防壁を爆破し、一斉に突入せよ!!」

「了解」

『カウントを開始する。3。2。1…………。爆破!』

『全隊突入!!!』

入江正一の合図と共にアジト突入隊は破壊した防壁から内部に侵入する。

……………

時を戻してアジト突入隊が来る少し前。ツナは近くで聞える「がりがりがり」という音で目を覚ます。それ共に部屋を出る。同じタイミングに山本も部屋から出てくる。ついでにリボーンも。

「ツナも聞えたか？」

「うん」

「どーやら、あれみたいだな」

リボーンを指差す方を見ると、雲雀恭弥と猫がいる。それと同時に後ろのドアが開き、中から獄寺が顔を出す。

「ああっ！ てつきりボックスに戻ってるかと！」

「酔っ払って僕のとこまで来たよ」

「何してやがったんだ……瓜！」

若干変な名前付けてるし……。てか、変な名前……。雲雀は瓜を獄寺に返す。瓜は獄寺に飛び乗り、何をするかと思いきや、獄寺の顔をひっかく。いまだなつかない……。

「君達……。風紀を乱すとどうなるか知ってる？」

雲雀は自分の武器である仕込みトンファーを構える。

「おい！」

「てめっ！」

「めんなさい！」

唯一謝るツナ。しかし、雲雀はあくびをするとトンファーをしまった。

「眠い……。今度ね……」

「待て！ 雲雀。この借りはいつか返す……せ」

「期待せずに待つよ」

「明日一緒にがんばりましょう！」

ツナが言うが……

「いやだ……。僕はしんでも君達と群れたり、一緒に戦ったりするつもりはない。強いからね。おやすみ……」

めずらしく、ツナ達にむかって「おやすみ」というと自分のマジトへと戻ってしまった。

……

ボンゴレアジト突入隊は防壁を破壊し、次々にありの大群のようにボンゴレアジトへと侵入する。しかし、侵入した場所は何も無く、ましてや人影すらない。そして、上から革靴のかかとは地面にあたるような音がしてきた。

「な、なんだ！」

「弱いばかりに、群れをなし、かみ殺される、袋の鼠」

雲雀は仕込みトンファを構え、さらにボックス兵器であるハリネズミを出す。そしてそして、紫色の殺気はなんとさえいいかわからない。ただただ、恐ろしい。そして痛い。そして、隊長格の男が声をあげる。

「わ・・・畏だ!!!」

「うわあああー！！！！！！」

味方の叫び声と同時に一条の光がこのフロアを駆け抜ける。それは雷属性の炎を帯びている雷球だ。一片の壁が崩れおち、外から人が歩いてくる。

「飛んで火に入る、夏の虫・・・か・・・」

「またか！」

「雲雀さん。加勢はしませんよ。でも、俺も戦います。俺より雲雀は弱いからな・・・」

「君から先にかみ殺すよ」

「構わないさ！」

そう言うと二人で敵のど真ん中に突っ込んでいった。

.....

予定より早い出撃にツナ達は焦っていた。

「出撃って・・・予定より早くない！」

『敵の急襲ですよ。2キロはなれた格納庫予定地に敵部隊が集合しているようです。すでに福瀬と雲雀が向かっています』

「集中した敵の兵力を2人が一手に引き受けることで地上と敵アジトの戦力は薄くなる。2人の行動に報いたければ殴りこみを成功させる！」

「わかった。ジャンニーニ！ ハッチを開けて！」

ちなみにこのメンバーはツナ・山本・獄寺・了平・ラルの五人だ。バンビーザの連中が来ないことにラルはイラついていたが・・・。ツナ達はハッチから外にでて、敵アジトの侵入口に向かっていた。場所は並盛シヨップセンターの地下駐車場から入れる場所だ。地下駐車場に入ると、ピアンキが手を振って場所を教えてくれた。

「見送りにきたわ。この中から敵アジトに侵入できる」

「こんな危険な所まで・・・」

「京子やチビ達のこととはまかせないさい。安心して暴れてくるのよ」「うん。いつてきます！」

ツナ達はラルを先頭に小さな通路をはいはいで進んでいた。すると突然ラルはとまった。

「赤外線が張られている。これより訓練どおりに“潜り抜け”を実行する。いいな！」

「わかった・・・」

そう言うつとラルはジャンニー二特製の擬光フィルターを赤外線発生装置に向かつて投げるとすぐに動き出す。ツナ達も遅れないように急いで通り抜ける。

全員が通り抜けたかと思っただが、一番最後にいた了平だけが赤外線
の餌食になった。しかし、間一髪赤外線には触れていなくセーフだ
ったが……。しかし、敵のレーザー砲が放たれてしまった。やら
れると思っただがいつの間にか下に落下していた。というのも、すん
でのところで山本が地面を切り裂き、そこから全員が落下したのだ。

「はあ~~~~。モグラでなく人間のガキだ」

「でけっ！」

「ん〜、ガキか。つてことは一般人がまぎれこんだんだなあ。ま〜
いいや。お前達のおかげで武器庫に届いた武器の試し撃ちができる
！ 兵器の威力を見るのは生身の標的が1番だからな・・・」

そういうと、でか男は肩部に取り付けられてビーム砲を発射する。
しかし、ツナ達には当たらなかった。直前で獄寺がボックス兵器を
使い、みんなを物陰に避難させたのだ。

「道開ける。ムダマツチヨ！」

「む・・ムダ！ デンドロ様すばらしき筋肉を何とかあ！！
！ 許さん、許さんぞ！！！」

そう言うつてボックスに雷の炎を注入して電槍を出す。
ランチャ・エレクトリカ

「やつかいだな・・・」

「電撃突き（コルポ・エレクトロ・シヨック）！！！」

槍をツナ達に向かって突き刺す。激しい火花が散る。そして、デンドロは満面の笑みを浮かべる。

「会心の一突きだな〜〜^^。ははー！ 飛び散った！」

そして、槍を抜こうとするがなぜか抜けない。押そうしてもなかなか前に進まない。そして、煙が晴れると、そこには後ろに炎を逆噴射する少年の姿があった。

「遊んでいる暇はない」

少年はそう言うと、前方にも強力な炎を発射した。デンドロは避けきれずにそれを真つ向から食らう。デンドロは消滅して消えた。ツナ達は、馬鹿男の話をするわけでもなく奥へ進んでいった。

「B8Fに着いたぞ」

「施設破壊に入る前にこの奥にある警備システムサーバーを破壊するんだっけな」

「そうだ。警備システムをダウンさせれば、基地内の索敵能力をマヒさせることが出来る」

「ツナの新技はすごかったな」

「うむ。あれはたいした極限技だった」

「沢田はまだ半分程度の力しかだしてないだろう？」

「はい。えっと2割くらいしか。。。まだフルパワーじゃ打てないんだ。それに敵も全力じゃなかったし」

「たしかに見た目は派手だったが、武器の力を充分に発揮してるとは思えなかったしな」

「そーいや、あいつの炎はなんつーか、鋭かったよな」

「ああ、別モンだぜ。。。電光の炎はな。。。」

.....

「た、隊長……。いくら酒に強くてもそこまで飲んじゃあ……。」「んん？ 俺はいつから部下に指図されるようになったんだ？」

そう言うと 部下を捕まえ雷の炎で攻撃をした。

「黙ってる……」

「な、何やってんだよ！ 部下にあたるなんてらしくないぜ！ 一回負けたくらいでイジケちまって！！ こんなの アニキじゃねーよ！」

「ナマ言うようになったな野猿。そーかおしおきして欲しいんだな？」

は立ち上がり野猿の前に立つ。目は鋭く、以前のような はいない。いるのは復讐に囚われた狼だけだ。以前の希生のように……。

「歯……食いしばれ」

「アニ……キ……」

が拳を振るった瞬間、太猿は野猿を庇い、の拳を受けた。その拳の力で太猿は後ろに飛ばされる。そして、鼻血をたらしながら言う。

「ケガの方は随分、いいみてーだな 兄貴」

「なんの真似だ？ お前ら」

「そりゃー、俺らは惨めだよな。俺と野猿は10年前のボンゴレのガキ共いのされ、アニキは福瀬に串刺しだ。ホワイトスperl出し抜くどころかおお恥じかいて謹慎の身。なさけねえーもんなあ」

は無断での出撃で敗北し、入江から謹慎を言い渡されていた。それで、酒三昧な日々だったのだ。

「太猿、てめえー・・・」

「今じゃ、入江正一にはこの基地を好きないようにされちまい、酒と玉突きと弟イビリしかすることあねえんだ。くわえて、あの幻騎士にはビビッて手もだせねえしな！」

「それは違うぜ・・・」

「ユ二様の命令だからってのか！ それがビビッてるっていうんだぜ！」

「もう一度言ってみろ。兄弟の縁を切りてめえを殺す」

「兄弟喧嘩か・・・」

割って入ってきたのは、幻騎士だった。

「傷は癒えたか、ガンマ」

「何しに来た」

「話だ」

・・・・・・・・・・・・・・・・

ツナ達は見つからないように基地内部を進行していていた。

「基地内の敵が想定していた数より少ないな・・・」

「そんなに多くの敵が2人に・・・」

「心配はいらん。今だかつて雲雀がくたばった瞬間は見たことがないからな。福瀬は知らんがな」

「福瀬君は雲雀さんと戦って余裕で勝っていたから大丈夫だと思っ

ますけど・・・」

「通気孔にカビ？」

獄寺が壁にカビが生えているのを見つける。

「なんかやばい植物でも栽培してんのか？」

「もしくはゴミタメか・・・」

「詮索は後だ。今は警備システムの破壊が優先だ」

ツナ達は更に奥に進み、遂に警備システムの一歩手前まで来た。この部屋を抜ければ警備システムがある。ラルが慎重にドアを開け中に入る。何もない事を確認して、ほかのメンバーに合図を送る。

「待て！！」

ラルはそう言うのと腕部にマウントしている銃を熱反応のする方向し向け発射する。

それと同時に敵からも攻撃が発射される。ラルに当たる。そう思ったときだった。

「電磁シールド展開！」

間一髪で敵の攻撃からラルを守る。

「希生君！」

「おい！ 雲雀さんは！」

「雲雀たちなら浅井と福坂と長田が向かっているよ。心配するな、何の影響もない」

「よかった」

余韻に浸ってる間に「パチン！」と指を鳴らす音が聞え敵が姿をあらわす。トンガリ帽子に黒いマント派手なシャツにズボンと叫ぶ。でた。でた。でた。

「魔法使いか？」

希生が首をかしげながら言う。確かに魔法使いといえば見当はつく。

「魔導師の人形……。ジンジャー・ブレットか……」

「今はミルフィオーレ第8部隊副隊長さ。しかし驚いたな。まさか、こんなところにまで敵の侵入を許すとはね。僕には君達がここに来てるって上に知らせる義務がある」

「おもしろい人形だな……」

希生は1人、喋る人形を見て驚いている。魔導師の人形の意味、違うんですけど……。意外と天然なんですかね？

「まあ、先に殺しても悪くないけどね。君のコロネロみたいにさ」

「コロネロだつて!!」

「貴様、師匠に何をした！ 返答次第ではただではおかんぞ！」

「フツッ！ 何か勘違いしてるようだね。最強と謳われた7人の呪われた赤ん坊、アルコバレーノも非73線の放射される中じゃ死にかけて虫みたいなものだろ？ そんな退屈なもの、わざわざ自分の手で殺すかよ。僕はただ、残酷で笑える殺し方を提案して、なぐめてただけ」

「貴様あ！」

了平が晴れのリングの炎を灯す。しかし、

「下がっている笹川」

「待て！ ラル・ミルチ。お前の体では無理だ！ 俺が行く！」

「冷静さを失った奴は、戦う前から負けていると、コロネロは教えなかったか？」

「でも、ラルさんも少し動揺してるね。でも、今回はあんたに任せよ」

「イジメがいが出てきたな。通報する前に少し遊んでいこう。ただし1対1の1勝負だけね。君を片付けたら上に報告するよ」

そついうと指をパチンと鳴らす。すると了平達の前にくもの巣のバリアが出来る。

「あぶねえ！ 巻き込まれるところだったよ」

何気に希生はくもの巣バリアから逃げていたようだ。これで、希生以外ラルを手伝える存在はいなくなつたと言つ事だ。まあ、希生がいれば充分なんだが・・・。

ツナ達の前にはくもの巣が張られ、ツナ・獄寺・山本・了平の4人はラルの救援にいけなくなってしまうた。しかし、間一髪でくもの巣から逃れられた希生もラルの戦闘に手を出す気配は無く、ラルとジンジャーの戦いを見ている。

「へたに動かない方が、身のためだよ。君達全員殺さなくちゃいけないから」

「たいした自信だな」

ラルはジンジャーの背後に回りこみ、左腕にマウントされている銃が火を吹く。無数に散らばるミサイルが避けるジンジャーを追尾する。霧の炎を帯びているミサイルである。

「甘い甘い……バア~~~~」

ジンジャーはマントで追尾するミサイルを防ぐ。そして、その動きのまま魔法使いにはかかせない魔法の杖を出す。

「それでも、“選ばれし7人”^{イ・プレシエルティ}？」

杖から紫の先の尖った、ミサイルが発射される。ラルは宙返りをしてミサイルを交わす。しかし、ラルが避けた場所は壁でこつから後ろには下がれない。その間にもジンジャーは間隔をあげずにミサイ

ルを連発する。そして、遂にミサイルは壁にいるラルにも飛んできた。そして、ラルにミサイルが全弾命中する。しかし、爆風が晴れた場所にいたのは、ムカデに守られたラルが立っていた。その表情には余裕が伺える。

「おおっ！ ムカデがシールドになっている！」

「まったくひけをとってないぜ！」

「まったく、強いんだか弱いんだか・・・」

ボンゴレ4人は驚くが、希生は呆れ顔である。

「ガキが」

ラルはそう言うと、ムカデをジンジャーに向かわせる。

「甘い甘い　ここまでおいで」

しかし、ここまで調子にのっていたジンジャーだが、次の瞬間ムカデの捕縛されてしまう。両腕・両足を拘束され何も出来ない状況に陥った。

「うまい！　完全に先読みしてる」

「あの女、動きは予知できんのか!？」

「いいや経験だ。幾千もの実践を生き抜いてきたことこそがラル・ミルチの強さ」

「コロナ口を殺った実行犯を吐け」

「なんだ、やっぱり気になるんだ。フフ　だーれが言うかよ」

身動きが出来ないのに関わらず、ジンジャーは強気の姿勢でいる。

しかし、ラルはそれに怒ったのかムカデの捕縛する強さを強くする。さらに強く締め付けられうめき声をあげる。

「そのムカデは万力のように手足を締め上げるぞ。また、その手で飯を食いたいなら吐け！」

「やめるお！！ 折れる〜〜！！」

「待ってラル！」

ツナがやめようと声を出す、ラルは力を弱めることはしない。

「なんてね」

ジンジャーは指を鳴らす。しかし、何も起きない。

「えっ！」

「残念だったな。動く人形さん」

「何？」

希生が口を開く。そして、ラルの近くまで歩いていく。

「あなたは、一番最初にラルに攻撃したとき、完全に当たったと思っただろう？ でも、実は違うぜ。間一髪で俺が電磁シールドで防いだよ。その間に俺はラルに攻撃を受けたかのように幻覚を使ってお前に見せていた。まあ、その時点でお前の負けは決まっている。ちなみに言うと、お前が今ムカデに縛られている手足は義足と義手だ・・・」

希生はジンジャーに言う。希生はやはり、ボンゴレのメンバーより強いことが伺える。ジンジャーは種がばれたのか、ムカデに縛られていた手足を体本体から外す。

魔法の杖からミサイルを発射する。しかし、希生は間一髪で幻覚を解き刀をあらわす。そして、刀を抜き放ち、ミサイルを全弾はじく。そして、刀を戻した。

「俺はあくまで、ラルに任せる」

すると、ジンジャーは焦りの表情を引っ込める。そして、コロネロの侮辱を始めた。

「いいよ。教えてあげる。コロネロと一緒に戦っていたバイパーを庇って死んだよ。彼は身代わりになるのが好きなんだね。でも、傑作だったね。助けられたバイパーも勝ち目が無いとみると、自ら命を絶って死んでいったよ。笑っちゃうだろ。バイパーもアホだが、コロネロという男の性分をよく現している。おせっかいの役立たずさ。君がその濁ったおしゃぶりを手放せないのも、奴を助けそこねたからなんだろ？ 裏目裏目の男コロネロ」

ラルは7人がアルコバレーノになった日を思い出した。コロネロが後ろからつけてきて最後には自分の身代わりになった。ラルは不完全な赤ん坊にかわった。コロネロは赤ん坊に戻ったあと、ラルに手を差し伸べた。「一緒に来るか？」と……。

「しかし、悲惨な人生だったね。哀れなラル・ミルチ。それもこれもアルコバレーノのおせっかいバカのせいってわけだ。裏目のコロネロのね」

「……撤回……しろ」

ラルの顔にはあざが増えていく。そして、ラルの持つおしゃぶりが青い光が放たれる。

「コロナロへの侮辱を撤回するか死を選べ。ジンジャー・ブレット」
「醜いなあ　それはなりそこないになった時の名残だろ？　まあ、君もまがりなりにもアルコバレーノってわけだ。君の濁ったおしゃぶりはもう使い物にならないと思ってたよ」

「確かに俺はなりそこないだ。不完全な呪いに蝕まれたオレの体は歪な体質変異を起こし、体内を巡る波動までもが霧と雲の属性に変わってしまったんだ・・・だが、このおしゃぶりは変わらない。本来コロナロではなくオレが受け取るはずだった、この青いおしゃぶりはオレの命と引き換えに炎を放つ・・・。属性は雨だ・・・」

その時、ラルの体から青い炎が発せられる。

「なるほどね」

「その肉体に背負われた宿命。苦しみと絶望は誰にもわかりはない。オレがあのままアルコバレーノになったら、魂を病み、バイパーと同じ最期を選んでいただろう・・・。でも・・・」

ラルはここで言葉を切った。そして、宙に舞う、ジンジャーを睨みつける。

「でも、コロナロがいたから生きたんだ。あいつのおかげで生きてこれた！！」

「ほーう。君にとってはコロナロは救世主みたいだね。でも、君もここで死ぬんだし」

「死ぬのはお前だ！　ジンジャー！！！！」

ラルの炎の炎圧がさらに上昇する。そして、勢いよくジンジャーに突っ込んでいく。しかし、ジンジャーは華麗にラルの突進を交わす。だが、ラルはムカデを掴み方向転換をする。そして、ジンジャーを背後から捕まえる。それと同時にムカデが2人を包んでいく。

「最後のチャンスだ。撤回するか死を選べ」

「ヤダヤダ。しつこい女だなく〜。僕が本気を出せばこんな拘束、へでもないね。甘い甘いバァー」

その隙にラルはムカデをジンジャーの腹部に突き刺す。そのまま、何本ものムカデがジンジャーの体を貫く。そして、なぜか希生自信までもが6本の刀を手に持ち、ジンジャーの腹部に突き刺していた。

「俺は、そんな奴は存在しなくていい人間は殺す！」

「オレの鎮静力を甘く見すぎたな・・・」

「でも・・・いいのかな？ 僕を殺したらコロネロを殺した実行犯は聞けなくなるんだよ・・・」

「お前を生かしておいたところで意味がない。自分で探す」

「憎たらしい・・・メスだな・・・」

「ふせろ!!!」

ラルが言うと、大きな爆発が起こった。希生は刀をジンジャーの体から抜き、地上に降りる。爆風が止むとツナ達を阻んでいたくもの巣も消えた。急いでラルに近寄るとラルは起き上がる。

「倒せなかった・・・」

「なっ」

「人形」

その時、メローネ基地内に警報が鳴り響いた。ジンジャーが入江に報告したのだ。

「でも、希生君は!?!」

「確かに。だが、構っている暇な無い。警備システムを落とすぞ！」

そういえば、爆破の後から希生の姿が見当たらない。しかし、探している暇などなく急いで警備システムのある部屋に向かった。希生はと言うと、1人で先に進み警備システムをダウンせずにさらに奥へと進んでいた。

・・・・・・・・・・・・・・・・

「なぜ、こいつらがここに……。ボンゴレがいるんだ！」

入江はジンジャーがいた部屋の監視カメラを見て、声をあげた。今まで、ボンゴレアジトにいるのだと思っていた標的はすでにこの基地に侵入している。しかも、こんな奥まで……。

「ボンゴレアジトとの通信は繋がらないのか！」

「はい。一向に電波障害がおさまりません」

「だが、なぜ、いままで気づかなかつたんだ！」

「カメラに偽景フィルターをつけられてんだよ」

メインモニターが映りモジャモジャ頭のアイリスが映る。

「あいつらの通ったルートにはいつもと同じ光景が写しだされるように細工されていたんだよ。ついでに、いろんな失態が重なってしまったようだね……」

モニターに映し出されのは腕と足を拘束された、あのバカ男のデンドロ・キラムが映っていた。しかし、次の瞬間モニターが全てノイズに変わった。

「警備システムダウン！」

「誰かを向かわせる！ 誰かいないのか！」

「ブラックスペルのスパナ氏 BランクがB9Fで整備中です」

「個人との連絡は取れるか？」

「はい。いまつなぎます」

メインモニターにスパナが映る。彼はアメを啜っていた。

「やあ、スパナ。ボンゴレが基地内に侵入したんだ。君達に直ちに迎撃してくれ」

「つつのは飛び回るんでナビが欲しい。この基地の細かい裏道まで分かる3Dマップをダウンロードしてくれよ」

「許可するよ」

「警備システムが使えないなら敵の逃避ルートは限定できた方がいい。メインルートにあるゲートを全て閉じてよ」

「わかった。だが、アレは細い道を通れるのか？」

「うん。通れないところは壊す」

.....

「よし！ 警備システムの破壊は成功だな」

「そんじゃあ、主要施設の破壊に移つか」

「お前達で行け。オレは後で行く」

「それはダメだ」

「希生君！ どこに行ってたの？」

「味方をつれてきたんだよ。雲雀の奴、群れるの嫌いっつって、こいつら追い払われたからよ」

希生は後ろに早崎賢・将・浅井・福坂・本田・長田をつれていた。

バンビーザの連中を全て連れてきたようだ。

「足手まといになるのはゴメンだ・・・」

「ダメだ！」

そこにいたメンバー全てが声をあげた。

「ふざけんなよアホ垂れが」

「これくらい想定内なんだよ」

「オレ達は作戦を成功させて誰一人かけることなく帰るんだ！」

その時、上から扉が降りてきたり、ゲートがしまってきている。

「メインルートのゲート封鎖が始まったか」

「急ごう」

「でも、囿役は？」

「オレがやります。確か、機動力とかあったほうがいいんですよ。それならオレが1番かと思うし」

「10代目！」

「わかった。お前に任せる。しかし、無理はするな。やばくなったらバンビーザのエリートが助けにいくからよ」

「ありがとう。じゃあ、行ってくる！」

ツナは走って、基地の奥に進んでいった。「10代目！！」と叫ぶ
右腕を残して。

.....

ツナは用水路的な感じな場所で死ぬ気モードになって敵をまっつい

た。少しして、轟音を響かせながら飛んでくる4機のデカイロボットを確認する。ツナはその中の一機だけを捉え壁に押さえこむ。そして、壁に押し付けたままずるとめり込ませる。そしてある程度めり込ませた後で思いつきりパンチをお見舞いする。一機はそのまま、用水路に落ちていく。用水路におとしたところで他の3機がツナに迫る。先頭の2機を見過ごし最後の1機の狙いを絞るが、肩上部からミサイルが発射される。それを交わすが・・・。

「催涙ガス？」

ツナはそのまま用水路の海面に降りる。水の上でしゃがみこむと水中から大きな手が現れツナの体を水の中に引き込む。ツナはXグロ―ブの炎でツナの事を掴んでいる手を焼ききろうとするが中々切ることが出来ない。表面の装甲が削っていくものの完全な攻撃を食らわずことが出来ない。

ツナは焼ききることをあきらめ、強引に手を振りほどくと、一気の上昇し、水中から飛び出す。4機も上昇してくるが、ツナは一つの必殺技を繰り出す。

「死ぬ気の零地点突破 初代エディション」

ツナは海面を氷らす。

.....

モス力内部で全機の操縦するスパナは感嘆の声を漏らす。

「すごい。装甲が1万6738層まで凍らされている。これが、伝

説の零地点突破初代エディション。でも、モスカは炎高炉が凍らなければ死なない。凍らされたって・・・溶かせば良い・・・」

スパナはモスカの腹部から死ぬ気の炎を放出する。そして、氷を溶かした勢いでツナに当てる。

・・・・・・・・・・・・・・・・

「こいつを待っていたぜ」

ツナはある姿勢を取る。そして

「死ぬ気の零地点突破改！！」

モスカから放たれた炎は全てがツナに命中した。爆風を吹きお互いの状況が分からなくなった。

爆風が晴れると、大きな炎を塊を吸収するツナの姿があった。炎を吸収すると、ツナは一気のグローブの炎圧をあげる。

・・・・・・・・・・・・・・・・

「死ぬ気の零地点突破改！！ 本当に人体でやってるなんて・・・」

」

スパナは一機のモスカの内部でツナの技を見ていた。ツナの死ぬ気の零地点突破初代エディションで凍らされたモスカを脱出させるために放った炎。

それには、もう一つの狙いがあった。それは、氷を溶かしながら、ツナに死ぬ気の炎を当てることだった。現に当てるまではうまくいった。

しかし、煙の中から姿を現したツナはモスカの炎を吸収し、自分の炎に変える「死ぬ気の地点突破改」を繰り出し、全ての炎をツナの力に変えてしまったのだ。

「本当に人体でやってるなんて・・・」

スパナはモスカの操縦をしながら、通信機能を作動させる。そして、スピーカー越しにツナに話しかける。

「なぜ、モスカのレーザーが死ぬ気の炎だと分かった？」

モスカがツナに対して、そして、氷を溶かすのに使った攻撃オプションはレーザーだ。正確に言えば、レーザーに見せている死ぬ気の炎だ。それを、一瞬にて見切り零地点突破ができたのがスパナには不思議であった。

ツナは少し微笑みを見せた後、こう答える。

「零地点突破初代エディションを溶かせるのは死ぬ気の炎以外、あ

りえない」

スパンはツナの答えに最もという表情をして、続けて質問する。この質問はモスカを扱う身として、またロボット魂としては、1番聞きたいことだ。この質問の答えを利用して、モスカのパワーをあげることも出来る。

「闘る気は……無いのか？」
「ある……」

スパンはにっこり笑い、パソコンを操作する。ツナも構え、モスカに備える。

一機のモスカが溶かした水面から飛び上がり、ツナに向かって先の尖った棒を突き出しながら突撃を開始する。

ツナはグローブの炎を自在に使い分け、一回転をするように避ける。その反動を利用して、モスカにかかと落としをする。姿勢が安定せず、地面に向かって落ちていくモスカにツナは更なる攻撃をする。落ちていくモスカに向かっていき、拳を思い切りモスカの背部に突き刺す。ツナの拳はモスカの装甲にめり込む。そして、拳を抜き、最後のキックをする。

モスカは何もできずに、壁に衝突し右腕を破損して地面に落ちる。スパンは破壊された機体の中でパソコンの示した数値に目を通していた。

「データ……とれた……」

スパンは機体内でぼそりと呟くと、残る3機のモスカをツナの正面に浮上させる。

「まだ、壊されたいのか」

「172%だ。零地点突破改で吸収した炎を自分のエネルギーに変換することで、あなたの戦闘力は約1.7倍に跳ね上がった。これは相当に高い数値だよ。人としては……」

「何が言いたい」

「それでも、ウチのモスカの方が強い」

スパナはそう言うと、モスカを操作する。2機のモスカの腹部のレーザー発射口が開き、光を放ち始める。ツナも構えるが、その予想とは裏腹に、2機は後ろにいるモスカにレーザーを発射する。

レーザーを受けるモスカの機体からは大量の死ぬ気の炎が発せられる。まばゆい光はツナの視界を包む。やがて、死ぬ気の炎を出し切った2機は力をなくし、一機は水面に、もう一機は地面に落ちる。最後に残った、モスカは機体から大量の炎を吹き上げている。

「これは一体……」

スパナはパソコンを操作しながら、その問いに答える。

「キング・モスカ……」

スパナがキング・モスカと称したモスカはさつきとは打って変わって、機動力が格段にあがり、ツナにも攻撃をふせぐことで精一杯になるほどの速さである。

最初のパンチはなんとか腕で押さえつけたが、次の瞬間、ツナの腹部に強い衝撃が走る。キング・モスカの脇部に隠されていた小型のハンマーが飛び出し、ツナの腹部を直撃したのだ。その衝撃に襲われ態勢を崩しているツナに容赦のない攻撃が繰り返される。膝蹴りをされ、まだ凍っている水面に落下していく。しかし、そこで終わらなかつた。キング・モスカは指先にある、小型ミサイルを発射する所から無数のミサイルを放つ。ツナはまともに食らい爆発と共に

凍っている水面に吹き飛ばされる。

「キング・モスカはとっておきだ。徹底的に細部をチューンアップし装甲は2倍。そして、目玉の炎吸収パワーシステム。その優れたエネルギー変換効率により戦闘力は10倍にあがる」

爆風の晴れない、水面にむかってスパナはモスカを自慢する。すでに、モスカの戦闘力は数倍に跳ね上がり、ツナと比ではない程にパワーアップしている。

「その計算は本当にあっているのか？」

爆風が晴れかかる。その中から死ぬ気の炎を放出しているツナのシルエットが見えてくる。

「10倍でその程度とはたいしたことないな……。そいつがお前のとっておきなら……」

次の言葉を言おうとした瞬間、煙が晴れ正確にツナの姿が視認できるようになる。ツナは両手を合わせ、現代で言う、指を鳴らすような感じになっている。そして、強い眼差しでキング・モスカに、スパナ向かって言う。

「次はオレのとっておきを見せてやるぜ」

「とっておき？」

「ああ。これ以上、おまえ1人にかまっていられないからな」

足場は確実にできている。高出力のX BURNERならキング・モスカの倒せる。だが、問題はあのスピードだ。奴を落とす。アレを狙うしかないな……

ツナは両手を後ろに構え、一瞬にしてグローブの炎の出力を上げ、キング・モスカに接近する。最初はモスカの足元目掛けて突進するがあっさりと交わされる。モスカを通り過ぎたとき、炎を前方に放出し、肘打ちをする。しかし、腕で受け止められ逆に脇部のハンマーを出される。だが、それを受け止め、キックしようとしたモスカのスラスターをツナのキックで潰す。しかし、スラスターを潰した足で蹴られ、壁に激突する。

「主推進装置を壊して身動きをとれなくする……。とっておきつてこれの事？」

「まあな」

「分かってないな……。キング・モスカの本領発揮はこれからだよ」

キング・モスカの胸部の砲口から光を放ち始める。そして、死ぬ気の炎を帯びたミサイルが発射される。ツナは零地点突破で吸収しようとするが、炎に不純物が含まれているため吸収はせずに壁に当て爆発させる。

「キング・モスカはあんたは想定されてつくられている。零地点突破改の長所も短所もわかっている」

逃げるツナに休むことなく、死ぬ気の炎を帯びたミサイルを発射する。ぎりぎりでも交わした後、凍ったいる水面の上を逃げる。モスカはツナに向けてさっきより多いミサイルを発射する。ツナはそれを交わすが……。X B U R N E Rの足場となる凍った水面がミサイルにより破壊されてしまったのだ。

「しまった！ 足場が！」

崩れ行く氷に気をとられ、背後を留守にしていた。その隙に付け込まれ背後に強力なパンチをくらう。そのパンチと一緒に指先から発射されたミサイルも誘爆を起こしたため威力が倍になる。態勢を崩された隙に背後にマウントされていた、鉄の金棒のようなもので弾かれる。

「スピードをさっきの倍にしたよ。これが真正銘のキング・モスカのパワーMAXだ」

「なんだって」

弾かれて前方に飛んでいくツナは更にパンチを食らう。そのまま前方に飛ばされる。その間にモスカは腹部の発射口を開き、死ぬ気の炎をチャージする。

これほどの力を残しているとは……このあと、どうすればいいんだ……

遠ざかる意識の中、ツナは最後の必殺技の名を呟く。

「X BURNERさえ……」

その時、耳につけているヘッドフォンからノイズが流れる。そして、ノイズの中の声を見つける。

『撃ちやあいいじゃねえか』

「!」

『あるのは柔の炎と剛の炎だけだ。地上も空中も関係ねえはずだぞ。ダメツナが頭で考えんじゃねえ』

それは、ボンゴレアジトにいるリボーンの声だった。リボーンは見えていない戦闘をまるで見えているかのように言葉を発する。

「決めて…………やるぜ！」

ツナは大きく目を見開き、X BURNERの構えを空中で取る。炎を逆噴射し、モスカのレーザーが発射されると同時に発射する。

「X BURNER AIR!!!」

二つの炎がぶつかり合い、まばゆい光を放つ。モスカも負けじとレーザーを発射するが、ツナのX BURNERには敵わずに次第に押されていく。

しまいには、ツナの炎がモスカの装甲を削る。ツナの炎も切れ掛かった時、目の前で大きな爆発が起こる。

キング・モスカは破壊された部分をあちこちに飛ばし、水中に落下していった。スパナはピストルを手に持ち、最初に破壊されたモスカの内部から出てきた。

ツナはと言うと、スパナが出てきたモスカの足元に横たわっていた。

「未完成のようだね。任務は迎撃。さいなら」

……………

ツナ達とは別行動をしていた山本・獄寺・了平、そして意識をなくしているラルの4人は無線機から聞えるかすかなリボーンの声聞き取った。

「聞えたか？」

「どうした？ タコ頭たこへっぴ」

「リボンさんの声でした……」

「無線機の雑音ぽいやつ？」

「どうやら、山本は気づいていないようだ。了平はと言つと……」

「お前は耳がいいんだな！ でかしたぞ、タコ頭！ おそらく警備システムを破壊したことで電波を妨害するものがなくなったのだ！
で、なんといつていた？」

「それがほとんどノイズですよ……。ジャンニーニさんが、あんまり深い階だと電波が届かないって言ってたぞ」

「むう……。何があったのだらう……。リボンさんのことだから10代目に……」

獄寺はそういいかけて気づく。そう10代目の存在を！

「まさか10代目に何かよくないことが！」

「落ち着け！」

獄寺は暴れだし、それを必死にとめる了平。笑いながら止める山本。2人+ラルが獄寺に覆いかぶさる。そして、獄寺が落ち着いてここで2人は立ち上がりこう告げる。

「沢田のことだ！ 心配いらん」

「デンドロのときはすごかったもんな！」

「ノー天気野郎どもが」

.....

メローネ基地作戦室では入江正一がスパナからの報告を待っていた。

「スパナからの連絡は？」

「ありません！　しかし、用水路で爆発がおこったことが確認されています！」

「戦闘か！　誰とだ！？」

「わかりません！　強制的に通信を開きましようか？」

「いや、それはいい。戦闘中は気が散るから通信はいれるなど言われている」

「入江様」

「現状の把握と対策シミュレーションが完了しました」

「じくろつ」

「確認されている敵の数は6人。敵の侵入目的を主要施設の破壊と仮定した場合、考えられる破壊対象はメインコンピューター42%、第一司令室で28%、最後に入江様の研究室12%です」

「そうか」

入江はそれだけ言うと、ペットボトルに入った水を飲み干した。

「ですが我々はどれも敵の手に落とすつもりはありません」

「ああ」

「そこで戦力を3点にわけそれぞれに配備し警護することを提案します」

「どうなるんだ？　今いるCランク以上の兵士は？」

正一は気になる兵士の質問をする。ことによればこの基地を守りきることができ、なおかつボンゴレリングの回収が出来る。

「はい。第3部隊、電光の、同じく嵐炎の太猿。第12部隊、妖花、アイリス・ヘプバーン。第8部隊、魔導師の人形、ジンジャー・ブレット。第7部隊、白の殺戮者、バイシヤナ。第9部隊、鬼熊使い、ニゲラ・ベアバングル。第9部隊、佐田秀。そして、幻騎士です」

これだけでも、猛者の集まりだ。こいつらにそれぞれの警護を任せれば問題無い。しかし、侵入した人数が少ないのは気のせいだろうか……。6人だけではないはずだ……。なにせ、バンビーザの人間が1人しかないのだから……。

「配置は幻騎士・アイリスをメインコンピューター。司令室を太猿。研究室をバイシヤナ・ニゲラ・佐田で固めるつもりです」

「バイシヤナを野放しにするな！ 幻騎士をむかわせる！」
「はっ」

研究室に何かあつてはシャレにならない。バイシヤナを静止するにはニゲラより強い幻騎士を置く必要がある。なんとしても研究室にはいれてならない。

.....

ボンゴレの4人は開きかけたドアの壁で立ち止まる。中から殺気を感じたためである。山本が時雨金時を構え、ドアの前に立つ。そして、出てきたのは顔面血だらけのニゲラだった。

ニゲラは何も言わずその場に倒れる。そして、更に奥から人が出てくる。

「我……所望す……」

奥から出てきたのは、入江に要注意されていたバイシヤナである。しかし、そのバイシヤナも後ろから銃弾に打たれ倒れた、更のさらに奥から出てきたのは、了平と同年代くらいの青年だ。片手には銃を持っていたが、それを投げ捨ててリングに炎を灯す。

「オレが貴様らの相手をしてやるよ……」

銃を片手に奥から出てきたのは笹川了平と同じくらいの年代である青年だ。彼はリングに炎を灯す。そのリングからは嵐属性特有の赤く周りを黒い炎が覆っている。すでにニゲラ・バイシヤナは息絶えており、戦力としては1対4でボンゴレ側が有利だろう。しかし、ラルが先ほどから意識を失っていることを考えれば、1対3になる。それでも、ボンゴレ側が有利である。

彼は、銃を投げ捨てるのとボックスを取り出す。ボックスに炎を注入して出て来たのは、嵐属性の炎を纏ったセイウチだった。体長も通常より大きく、牙も長く鋭い。恐らく、ボックス用に強化・改造されたのだろう。

「おい・・・、俺の相手は誰だ？　いないなら、てめーらまとめてこいつの餌食にするぞ！　あ！」

「その口調はむかつくな・・・」

了平達が後ろを振り向くと、さっきから姿が見つからなかった福瀬希生の姿がある。すでに、戦闘モードに入っており両手には3本ずつ刀が、そして、希生のボックス兵器である雷ユニコーンにまたがっている。

「お前は・・・、福瀬希生！」

「あゝ・・・、あんた、佐田秀か・・・」

「知っているのか？」

了平が質問してくる。希生は黙ってそれに頷くと、淡々と少し説明をする。

「知ってるよ……。俺と同じ中学だ……。よもや、10年後の世界ではミルフィオーレに入ってるとはな……」

「ふん！ 貴様ごとき、俺の敵ではないわ！」

「じゃあ、やってみるか？」

希生は佐田の答えを聞かないまま、攻撃を開始する。今まで、その場所に立っていたはずだが一瞬にして姿を消す。正確には目にも留まらぬ速さで移動していることだ。

希生は佐田の背後に回りこみ、渾身の一撃を佐田に食らわす。しかし、佐田は2本の牙を両手に持ち、希生の攻撃を簡単に防いだ。希生は刀を弾くと、一旦間合いをとる。

「中々、やるな……」

「当たり前だ……。10年前の俺とは違うんだよ！」

「ほう……」

希生は不敵な微笑みを見せ、またしても姿を消す。ふっと、佐田の目の前に姿を現すと、鳩尾にパンチをし、更に刀で斬りつける。佐田は地面を滑るように、後ろへ飛ばされる。なんとか持ちこたえ、片膝を付きながら、憎しみを表す表情を浮かべ言い放つ。

「こいつは！ 俺の好きだった奴を殺した！ 自らの行動で！」

「！！！！」

「あなたの行動のせいで、あいつは死んだ！ 全部てめーのせいだ！ てめーがあんなことなんて、しなければ！ ほのかは今も生きていたんだよ！」

「貴様………！」

希生は佐田に鋭い視線を向ける。しかし、佐田はそれに動ずることなく言葉を返す。

「貴様が殺した！ ほのかを殺した！ あんたのせいだ！ お前g・
……」

希生は佐田に物凄いスピードで迫ると、6本の刀で斬りつける。そして、宙に浮いている佐田に対して、更なる攻撃を加える。

「DEATH FANG!!!!」

希生自身も空中に上がると、腹を天井に見せ浮いている佐田に6本の刀を使って叩き落とす。更に、地面に叩きつけられた佐田に、最後の一撃をおみまいしようとするが、佐田の上に佐田のボックス兵器である嵐セイウチが割り込み、攻撃を庇う。

「命拾いしたな……」

セイウチは胴体を切り裂かれ、すでに戦える状態ではなくなった。ここに来て、希生の刀の鋭さが増しているのだ。そして、怒りを発した時から、雷の炎と龍属性の炎がミックスして、希生の6本の刀全てにまもっている。

佐田はかろうじて片膝を付き、起き上がると、最後の力を振り絞ってこう言い放つ。

「貴様が殺した！」

その目には涙を浮かべている。了平達は希生がすぐさま攻撃に転じ

ると思っていたが、何故か一向に希生が動かない……。佐田も不思議そうに希生を見ている。すると、希生は膝から崩れ落ちる。了平達が慌てて駆け寄る。

「俺だつて……。俺だつて……。守りたかつたよ！ ほのかを……。でも……。でも……」

希生は拳を地面に打ちつけ、涙を流していた。それは、ほのかの笑顔を思いだしての事だった。希生は中学1年の時に、最初の彼女を失くした。マフィアである男に人質にとられて……。それと同時に希生の幼馴染である女子を同じく男の手によって殺された。全ては自分のせい……。希生はそれ以来、外にはでようとせせず、バンビーザのメンバーですら顔を合わせなかった。それは、自分と関われば死ぬ。そういう思考が出来ていたからだ……。

その後、希生は警察に逮捕される。しかし、尋問に当たった警察官を殺し、警察署も壊す。この時、希生は殺人鬼のような感じになっていたのだ。それから、むかついた奴はすぐに殺していった。唯一、むかついても殺さなかったのは家族くらいだった。

希生が殺人鬼に変わっていく中、希生を必死に救おうとしたのは、今の彼女である橋本紗夜夏だった。彼女は何かと希生のことを心配していた。実の所、彼女は希生が好きだったのだ。彼女と接していくうちに希生の心は殺人鬼のような感じはなくなっていた。

そう。希生は誰かに助けを求めているのだ。そして、心の傷を癒してくれる誰かの愛を……。

そこから、希生は少しずつ前の状態に戻っていった。その後、紗夜夏から告白を受け、今度は必ず守ると言う事を死んでいった二人に誓って、紗夜夏を希生は付き合いたしたのだ。それからというもの、希生は、前ほのかと希生が付き合っていた頃みたいに、戻っていつ

ただ。

「俺は……。もう迷わない……。今は、紗夜夏達を守る。それが、亡くなったほのかと優音との約束だから……」

希生は泪でぬれた頬をぬぐうと、立ち上がり、刀を構える。そして、佐田も立ち上がり、2本の牙を構える。

「俺は貴様を許さない。俺から大切なモノを奪った！」

「俺は、全てを守ってみせる！ ほのかと優音の誓いにかけて！」

希生はユニコーンに、またがり、駆け出す。一方、佐田はセイウチに嵐の炎を大量に放出させ、嵐の炎でシールドを展開する。そして、その後ろには牙を構えた佐田が待ち受ける。

希生は雷ユニコーンの角からいくつもの雷球を作り出し、それを嵐のシールド目掛けて、放っていく。嵐シールドは炎の特性である、「分解」生かして、雷球を分解していく。

やがて、両者の距離が縮み、お互いが攻撃を繰り返す。

「いけ！ MAGNUM STRIKE!!!!!!」

「IVORY THRASH!!!!!!」

.....

ツナは周りから発せられる香りに包まれていた。

日本茶をコップに注ぐ音が聞こえる。そして、自分の母親の顔が見

える。その顔には笑みがこぼれている。そして、母がこう呟く。
＜先週、奮発して買ったお茶なの！？　すごくおいしいのよ＞
＜うまいんならオレにもいれてよ。今、リボンと宿題やるから＞
そこで、ツナは現実世界に意識が戻る。目が覚める。すると、目の前には「酢花。」と書かれた紙が見える。ツナは起きていない体で呟く。

「す．．．はな．．？」

「パ。スパナ」

「本当だ。が付いている。ごめん、寝ぼけてた．．．」

そして、ツナは周りに目をやろうとしたとき、視界に黒い物体が飛び込む。思わず声をあげて起き上がる。

「モスカ!!!」

ツナは慌てて起き上がるが、スパナという人物にパンツ一丁でいることに気づかされる。そして、渡された作業服とお茶を受け取る。ツナの服は紐でつるされ乾かされていた。少し大きなテーブルの上には、Xグローブ、死ぬ気丸、ヘッドフォン、そして大事なお守りが置いてある。ツナはそれらを取ろうと手を伸ばすが．．．。

「騒ぐなボンゴレ．．．。あんた今、行方不明ってことになってるから．．．」

右手は手錠をされ、近くの場所に鎖とつながれている。おまけにツナの頭には銃を突きつけられる。ツナはその後、スパナに殺されず、スパナの作業場に連れて行かれた。そして、今の今まで眠っていたのだった。

.....

入江の命令を受け、兵士3人は用水路にいた。すでに戦闘は終了しており、周りには無残なモスカの残骸が残っている。まだ、煙が少し上がっており、モスカの装甲も熱い。頭はハゲで色の黒い男が無線で司令室に報告をする。

「ハッ。それではボンゴレリング及び、ボンゴレの捜索を行います」

.....

「入江様。やはり、先ほどのスパナ氏の報告通りです」
「そうか」

スパナからは、激闘の末相打ちとなりボンゴレは用水路に落下し行方不明になったと報告が来た。出撃させたモスカ4機は撃破されたと言う事だ。

「ただちに捜索隊を増員し向かわせる！モスカの戦闘記録はどうなっている！」

「モスカが炎上しているため、まだ回収していません」
「急がせる！」
「ハッ」

.....

「Sサイズでもでかいな・・・」

ツナはスパナに渡された作業服を身につけた。Sサイズというのは作業服の大きさだ。今度は手錠を両手にしっかかりとされている。足は拘束されていないので自由に動くことが出来る。スパナは銃をツナに向けるかと思いきや、予想外の質問をしてくる。

「未完成なんだろう？ 最後のアレ。左右のバランスが悪くてフルパワーで撃ててないように見えた」

「撃つ・・・？ もしかしてX BURNERのこと・・・？」

スパナはXバーナーの事を聞いた瞬間笑顔になる。そして、淡々と事実を説明し始める。

「そうX BURNERだ！ あれが安定しないのは左右の炎の力のベクトルにずれが生じるからだ。左右を完全なシンメトリーになるように工夫すればいい」

スパナは何故か、Xバーナーの事を話し始めると、笑顔になっている。彼はX BURNERの欠点を示す。そして、1番の驚きは次の言葉だった。

「うちがX BURNERを完成させてやる」

.....

大きな爆発が起こった。両者の攻撃がぶつかり合い、起こった爆風

によつて了平達は後ろに吹き飛ばされる。爆風の晴れない内に了平達は動き出す。この際、希生を助け出しすぐに立ち去るのがBES Tだろう。追撃にこられては、応戦しているうちに、ボンゴレアジトにいるミルフィオーレに兵士が戻ってくる可能性がある。

「希生――――！！！！！！」

「なんだ……」

めんどくさそうに希生が返事をする。

「希生！！ 佐田はどうした？」

「終わった」

「そうか……。では次に急ぐぞ！」

獄寺と山本が了平の声に返事をする中、希生の声だけが聞えない。3人は希生の方に振り向くと、希生は雷ユニコーンの足にもたれてゐる。足からは血がでてゐる。佐田との戦いで負つたものだろう……。

山本が助けの手を差し伸べるが、希生はそれを払いのける。

「お前らは先に行け！ 俺は後からバンビーズのメンバーと向かう」

「でも……」

「気にするな……。俺は、負けない」

了平は一瞬、顔を曇らせるがすぐに踵を返し、ドアの方に向かっていく。希生は3人を見送つた後、静かに目を閉じた。

.....

一方、希生と佐田の攻撃でおきた爆発は司令室のモニターでも確認できた。入江は矢継ぎ早に状況を確認する。

「バイシヤナ・ニゲラとの連絡は！ 幻騎士はどこにいる！？」

「2人は無線も繋がりません！ 佐田も交信不能です！ 幻騎士殿も連絡不能！」

「マズイです！ 現在、この近くには味方がいません！」

「なんだって！！！」

「入江様……」

入江はこの時になっていつもの腹痛が襲う。いまずぐに対策を立てないとやつらが入江の研究所に入ってしまう。侵入されれば、こちらは不利になる。しかし、入江にはもう一つの危険があった。白く丸い装置を壊されることだ。

それは何かなんでも止めないといけないことだ……。装置が破壊されれば……。

入江は決断を下し、司令室を出た。後ろにはいつもの女性2人がいる。すると、1人の女性が入江に話しかける。

「アレを使われるのですか？」

「何か、問題があるかい？」

「この機密を知るのは、我々と入江様、百蘭様のみ。これを行えば、他の部隊に……」

「そんなもの、何もせずに失うよりずっといい」

入江はエレベーターに乗り込む。指定の階で降り、正面に伸びる通路を進んでいく。やがて、正面にドアが見える。そのドアの横にあ

る、セキリユティの解除をし、中に入る。もう一個のドアのセキリユティを解除し、部屋に入る。正面には大型のモニターと2本の地面から突出してる機械が見える。

入江は自身のマーレリング、晴属性のリングに炎を灯す。そして、2本の突出した機械の右の方にある固定されたボックスに炎を注入する。

「さあ、目覚めてくれ。僕のボックス・・・メローネ基地」

「稼動ブロック移動開始」

その瞬間、部屋全体。いや、基地全体に衝撃が走る。

「随分と遊んでくれたなボンゴレ。後悔させてやる。今度はお前が狩られる番だ!!」

.....

衝撃に耐えながら、廊下を走っていた了平・獄寺・山本。山本だけが、遅れ獄寺と了平と分断されてしまう。獄寺が手を差し伸べるが、壁が上から迫り、山本も覚悟した様子であがっていく獄寺を見送る。3人は分断される。

獄寺達は、後方に開いたドアに向かう。入った瞬間、2人の体に旋律が走る。

「なあ、おい。今の地震はなんだ？」

「おまえは・・・。電光の・・・」

「ああ、忘れつかよ……。あいつは、電光の……。!!」
「なにか騒がしいと思えば、おまえらが来てたのか。何しに来てんだ？」

電光の……。以前、獄寺と山本が2人掛かりでも倒せなかった相手。だが、福瀬希生の前にはあえなく撃沈した戦士。ビリヤードキットを駆使し、巧みにボールを操る。ボールの連携技に獄寺・山本は何一つ敵わなかった。

獄寺はやけになって、リングに炎をともす。しかし、ここは了平がなだめ、疑問を口にする。

「ここは白い装置の部屋のはずだ。おかしいではないか」
「言われてみりゃ……」

獄寺も黙り込む。地図に従って道をたどれば、ここは白く丸い装置のある部屋なのだ。しかし、前に広がるのは、コンテナがいたるところに配置された場所だ。何故か、おかしいのだ。

「この基地は、縦・横・高さがすべて正方形に区切ることができてな、ほぼ、全ての区域を立方体で分割する事が出来る。そして、何も無い空間もある。つまり、こいつは立体パズルってところか」

が丁寧に説明した。ということは、さっきの地震と関係している

のだろうか……。了平達が考える暇もなく　が殺気に満ちた声で言う。

「この決闘バトルには感謝する。これで、あの方に報いられるってもんだ」

が顔の前に雷のマーレリングを掲げ、炎を灯す。リングから電撃がはじけるような炎が放出される。獄寺が　の相手をしようと前に進み出るが、了平のボックス兵器の一つである、晴の炎で出来た強化縄で拘束されてしまう。そして、笑顔になりこう告げる。

「オレが6弔花に複数でかかっては男がすたる。ここは、まかせておけ」

「なら、オレにサシでやらせやがれ!!」

「ならん。成長したとはいえ、まだ、お前の勝てる相手ではない」

了平が獄寺に向かってキツク言うと、獄寺は黙ってしまった。そして、　に向かって歩き出す。

「まるで自分は勝てるでも言う口調だな。だが今の俺は福瀬を2人引っ張ってこようが勝てないぜ」

「たいした自信だな。なにを根拠にいつておる」

「女神が……。微笑んだのさ」

2人は顔の前でリングに炎を灯す。2人とも自信に満ちた顔だった。そして、戦いは、始まった。

了平は足に死ぬ気の炎を灯す特殊なブーツを履き、宙に舞う。　は余裕な表情で了平をみている。

了平は一度、ブーツから炎を放出するのをやめ、前傾姿勢になる。その時、再度炎を灯し、　に向かって突進をする。

「極限イングラム!!!!」

了平は のいた場所に拳を振るうが、あえなく逃がしてしまった。了平の前の煙が晴れると、コンテナがあった。しかし、了平の拳をもつてしても傷一つ付いていない。はと言つと、も特殊なブーツを履き天井に重力に逆らうように引つ付いていた。

「コンテナを破壊できなかったのは気にしなくていい。このコンテナはちいと頑丈だからな・・・」

「気にしてなどいない・・・」

「そうか・・・。次はオレの番だ・・・」

はビリヤードのボールを展開すると、山本や獄寺達も軌道を読めなかった技「ショットプラズマ」を炸裂させる。了平はブーツを操り、地面をホバーするように滑って避けていく。ボールはつま先スレスレで地面にあたる。了平はひとまず、近くにあったコンテナの後ろに退避する。ボールはコンテナのいたるところに当たり、了平には当たらない。了平はこの隙に作戦を練ろうとするが、 の更なる追撃があつた。

「おい。誰の入れ知恵か知らないが、そんな避け方じゃ間に合わないぜ」

「?」

その瞬間、宙に浮いていたボールが一気に降下を始める。そして、所定の位置につくと、ボール自身が強大な電磁を発生させる。それは今まで見たことの無いくらいの威力だ。ボールの周りは大きな電気の球態で覆われている。そして、一気に電気の軌道が了平に向かって伸びる。

「エレクトリック・タワー」

了平は全身に電気を浴び、口から血を出して倒れこんだ。その様子を了平のいるコンテナの裏から見ていた獄寺は、コンテナの高さを越える、血を見て驚愕とする。

「芝生！！！！！！」

「前、会った時とは違うんだ。生憎な・・・」

.....

「ボス！！！！！！！」

雷ユニコーンを見つけ、その足元に横たわる希生の姿を見つけて、早崎将と、早崎賢が駆け寄る。2人は希生を抱き上げると、ひとまず、退避するためにおんぶする。しかし、偶然、敵のメンバーに見つかってしまう。2人はうなずき、ボックス兵器を出す。

賢は「レッドタイガー」を、将は「隼」と「ライチヨウ」を繰り出す。そして、それぞれの武器を出し、一気に蹴散らしていく。

賢は野球のバットのような武器で敵を殴っていき、将は自転車に鎖を巻きつけタイヤから出ている三角状の刃で敵を切り裂いていく。3体のボックス兵器も息を合わせ、猛然と敵に踊りかかっている。

敵の兵士の悲鳴を聞いて、目を覚ました希生はひとまず、加勢する。

「ボス！？」

希生の参戦を見て、2人は驚きの表情を浮かべている。

「早くここを脱出して、ボンゴレのメンバーを助けないと……。
なんか、ヤバイ気がする」

「分かったぜ！ ボス！ ここは雲の炎を使って……」

「ああ……。行くぜ！」

希生は自身の雲のリングの炎を賢と将の武器に送る。雲の炎の特徴である「増殖」を用いて攻撃を開始する。賢は雲の炎をおかげでバツトの刀身が伸び、超長い棒になっていく。将は鎖がどんどん伸びていき、振り回すだけで周りの敵が切り裂かれていく。希生はいつも通り、雷属性の技「HELL DRAGON」を放ち、敵を殲滅する。

全ての敵を掃討後、3人は急いで他のメンバーの救出に向かう。

.....

「なかなか、しぶとい晴の守護者だ。今、天国の扉を見せてやる」

が了平に最後の攻撃をしようとした時、横から何かが飛びあがってきた。反射的に標準を変え、飛びあがってきたものに攻撃する。よく見ると、笹川了平のボックス兵器であるカンガルーが飛びあがってきた。しかし、に到達するまえに、電気を帯びたボールに焼かれ地面に落ちる。

「焼き加減はレアだ……」

「てめーーーーー!!!」

獄寺は今、開けられるボックスで、1番頼りないボックスを開口す

る。それは猫型のボックス兵器で、獄寺が「瓜」と名づけたボックス兵器だ。瓜は獄寺の背中に飛びのると、獄寺の命令も聞かずに目をこする。しかし、殺気を感じたのか、いきなり を威嚇する。

「おお？」

そして、獄寺の背中から下りると、まっすぐ に向かって走り出す。しかし、飛び上がった瞬間、弾かれた。弾いたのは了平だ。了平はグローブの高速治療能力を全開にして、 の放った電気を帯びたボールを押さえつけていた。

「芝生！！」

「ほう……。思ったより頑張るな、晴の守護者。だが、諦めな……。オレとお前では何かと差がありすぎる。リング一つとってもな。。。」

より一層、電撃が激しくなり次第に了平を押ししていく。踏ん張りながら了平は力を振り絞り獄寺に向かって言い放つ。

「いいか獄寺。オレが倒されれば縄は解ける。お前はオレと同じで、すぐに頭に血を上らせるのが、お前の悪い癖だ……。あわてるな。。。」

その時、 が残ったボールを弾き、「エレクトリック・タワー」を繰り出す。ダメ押しとばかりに再度、攻撃をする。エレクトリック・タワーが了平に当たった瞬間、獄寺を拘束していた縄は解ける。その瞬間を獄寺は見逃さなかった。ダメ押しの攻撃をボックス兵器のシールドで防御する。

「てめえだけは、ゆるさねえ。。。」

「中学生か……。また、痛い目にあいたいようだな……。」「ほざいてる。変わったのはお前だけじゃねえ……」

はお得意の「ショットプラズマ」を繰り返す。しかし、シールドの足元にある丸い透明な物を使つて了平同様、ホバリングをしながら避けていく。そして、了平とある程度引き離れた場所で止まる。それにそつてボールも獄寺に向かつていく。

「エレクトリック・タワー」

再度、炸裂する。しかし、その電撃は全て黒い骨を骨格としたシールドに防がれる。強力な電撃を加えたのに何一つ傷一つ付けられない。硬度で勝る、雷の炎を嵐の炎単体で防げるはずが無い。の中で疑問が渦巻く。

獄寺は素早く、腕にマウントするガンタイプの武器をボックスから出す。それと同時に、弾丸もボックスから出す。弾丸は嵐の炎を放出する弾丸。それを素早く装填し、発射する。

「赤炎の矢!!!」
フレイムアロー

は空中に上がり、避ける。追尾する攻撃を雷のシールドで防ぐ。しかし、硬度で勝るはずの雷属性の炎をシールドを少しずつ貫いていく。はシールドで防ぐのをやめ、ひとまず避ける。しかし、そこを狙つて新たな矢が発射される。

「逃がすかよ!」

「逃げやしねえよ」

はシールドで防ぐこともなく、矢が目の前を通過する。

「見るのさー!!」

通過する矢をしっかりと見る。硬度で勝る炎なのに、たかが嵐の炎が貫通することが不思議だったのだ。そして、は答えを得る。しかし、あまりに近すぎたのか、矢が目の辺りをかする。たまらず回転しながら避ける。

「おっと、あぶねえ……。こいつは驚いたぜ。嵐と雨の炎を同時に使うとはな……」

そう・獄寺は嵐の矢の表面に雨の炎をコーティングさせて放っていたのだ。雨の特徴である「鎮静」を利用して雷の炎を弱体化させ、嵐の炎の特徴「分解」をつかって雷のシールドを貫いたのだ。そして、獄寺を包むシールドも同じく、雨と嵐の炎を混合させて使っていたのだ。複数の属性を使う人は世界にもいるが、同時に使うのは聞いたことが無い。獄寺が始めてかもしれない。

「からくりが分かった上で、何度もくらうオレじゃないぜ」
「さーな」

獄寺はそっけなく言葉を返す。それと同時に、弾丸を交換する。にも分らないように。弾丸を交換して一気に放つ。今度はガトリングのように発射する。弾は超小型のミサイルのような感じだ。嵐の炎で加速している。はよけようとするが、不規則に加速するミサイルを見て少し反応が遅れる。よく見ると、この不規則な加速は晴の炎の付加が加わっていた。ミサイルが着弾し爆発が起こり、煙が立ち込める。

「こいつを使いこなすために、5つの波動が俺には流れている」

は爆風の中から姿を現す。直撃は避けたようだが、ダメージは与えたはずだ。

「複数の炎とは驚かせてくれるな・・・」

「福瀬だつて同じだ。6つの波動を使いこなす。お前はそれに負けた」

「夢を見るのも、ここでお終いだ。そろそろ、現実を教えてやるよ」「やってみな」

「なめんなよ・・・」

はボックスに炎を注入する。姿を現したのは、前にも翻弄された電狐だ。今回も炎の量はすごいことになっている。は獄寺に向かって突進を開始する。獄寺も晴の炎を纏ったミサイルを発射するが、あっさりと射線を交わされる。が何か狐に命令すると、2匹の狐は獄寺の脇に行く。はそのまま突撃する。

「弾の特性が分かれば、そうそう当たらないさ」

「甘いぜ！」

獄寺はシールド両脇に散開させ、2匹の狐を封じ込む。狐はシールドに挟み込まれ身動きも出来ない。

「てめえの手札は読めてんだ！」

「だが、おれはフリーだぜ。その、ナマクラ弾には当たらん」

「どうだか・・・」

獄寺は瞬間的に、弾を交換する。そして、は獄寺の眼前に迫ったとき、矢を発射する。矢は一つから二つに、2つから3つに・・・。どんどん増えていく。雲属性の増殖を使った矢だ。は避けることも出来ず、まともに食らってしまう。獄寺も爆発に巻き込まれるが、

シールドを展開し、爆発の直撃は避ける。

「SYSTEMA C・A・Iは瞬時武装換装システムの事だ。瞬時に変わった弾の特性についてこれなかったようだな……。今は相当くらったはずだぜ」

はコンテナの裏側にいる。コンテナに寄りかかり、座っていた。雲属性の攻撃についてこれず、まともに食らった。自慢のシールドを展開する時間も無く。

「ガキ相手になんで様だ・・・」

その時、の手が一つのボックスを触る。それを取り出す。

「こんなところで、くたばっていらねえーな」

獄寺はシールドのホバーで のいた場所に向かう。しかし、その場所には誰もおらず、しかし、宙のを見ると凄まじい雷の炎を放っている の姿があつた。そばには、見慣れぬ黒い狐がいる。

「何年かぶりにこいつを開けたが、相変わらず凄まじい。だが、これをあげた以上、カタはつく」

獄寺は横にホバーしながら、嵐と雷の炎を混合させた矢を放っている。しかし、すべてが黒狐の電撃によって弾かれる。そして、狐とが獄寺に向かって突撃する。獄寺も矢を放つが、狐に阻まれる。その隙に獄寺に接近している。狐も正面から突進してくる。シールドを全て狐にまわす。しかし、狐はシールドをも突き抜ける。獄寺の両脇に狐が攻撃し、 が更に正面から攻撃する。

「ボンゴレリングもマーレリングも炎の出力は変わらない。炎のパワーに差がでるのは、一つ・・・」

「!!!」

「覚悟の差だ!」

獄寺はダメ押しの「ショットプラズマを食らい、地面に倒れこむ・・・意識が薄くなる中、　　が獄寺の覚悟のことを言う。

「中学生の覚悟なんざ、そんなもんだ。ガキは言葉に酔う。かつこいい言葉を並べると、揺らぐことの無い本物の覚悟は違っつてことだ・・・」

「く・・・そ・・・」

「今、楽にしてやる」

が狐に命令をしようと見ると、かすかにおびえているのが見えた。も狐が怯えてみている方向に目を向ける。そこには虫の大群が見えた。その多くはオオスズメバチだ。やがて、八チの大群の中から少年が姿を現す。

「覚悟の差を語ってくれるねえ・・・。てめーの兄ちゃんは変な覚悟だったけどな・・・」

「なに! お前は・・・」

「俺はすでに揺らぐことの無い覚悟を持ってるぜ。言葉にも酔ってない・・・」

「!!!!!!」

「あの日以来、覚悟はかわんねえんだよ!!!!!!」

姿を現したのは、紛れも無く虫のボックスを使う福瀬希生だった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3605w/>

家庭教師ヒットマンREBORN! もう一つのリングとファミリー

2011年12月11日21時55分発行